ト2J-33

八岡坂本龍馬

289
SA32
3

始

303

坂本龍馬

289
SA32
3

水守亀之助著

人文會出版部

954
191

目次

第一章
壯士去る……（五）
燭のゆらぎ……（一〇）
その前夜……（一七）
脫藩のはなむけ……（四二）
第二章
嵐を呼ぶ……（五六）
激動の巷へ……（六六）

病友の宿で……（九九）

第三章

恩人の遺族……（九一）

志士の會合……（一〇五）

父恩に哭く……（一一六）

第四章

刺客豹變……（一一九）

新たな發足……（一五一）

救ふ人・救はれる人……（一六六）

第五章

大阪から兵庫へ……（一八九）

雨瀟々……（二〇四）

危地に入るもの……（二二七）

第六章

狂嵐の後……（二二九）

英雄策を建つ……（二四五）

聯合往來……（二六一）

第七章

ピストルと花嫁……(一八七)
歡樂から戰爭へ……(二〇三)
恩讐を超えて……(二二四)

第八章

われに經綸あり……(二四二)
妻よ・ふるさとよ……(二五九)
惑星殞つ……(二五二)

第一章

壯士去る

肝膽元雄大奇機自湧出
飛潛有誰識一偏不レ耻龍名一
—武市瑞山—

文久二年三月二日の朝まだきである。

武市半平太は、高知の東端にある松ケ鼻への一筋道を、ひた急ぎに急いで行くのであつた。左側は、廻船問屋や、魚屋や、食べ物店などがたちならび、右側は松並木の土堤になつてゐる。

壯士去る

『あツ、武市樣ぢや。』『おゝ、瑞山先生らしい。』といつた路傍のささやきも耳に入らなかつた。

陣笠の紐の食ひこんだ顎がなみの人より長いところに特長のある顏と、立派な風采で、武市であることは誰の眼にも分つた。

土佐勤王黨の本部ともいふべき南新町の武市の道場へは、いろんな人が出入し、さまざまな情

報が入つて來るので、昨夜も、吉村虎太郎と、宮地宜藏と、曾和傳左衞門の三人が某酒樓に會合してゐるのを知らせたものがあつた。ところが、今朝になると、それらしい三人が松ケ鼻へと急いでゐるといふ密告が入つたのである。

武市は、ぢつとして居られなかつた。まだ、起きたばかりの朝飯前であつたが、さらさらと一封の書面を認めると、それを懷中にして單身とび出して行つたのである。その、書面は長州の久坂玄瑞にあてたものであつた。

吉村等の脫藩は、武市には、ちやんと分つてゐた。曾和が、それとなく相談に來た時には、『功名に急な彼のことだから、制すべくもない。しかし、彼一人位なら今のところ仕方のないことだ。』と、いつた位である。しかし、三人になつたと分れば、これは默つて居られない。そして、一旦は長州へ落ちのびる魂膽であらうから、內密に久坂への返書を托したいといふのが、武市の腹なのであつた。

いや、監察役場に出仕してゐる曾和一人だけは、どうあつても、ひきとめねばならぬ。——かう、心の中で決心して來た武市の眼前には、松ケ鼻の石壘が見え、小船が、入江が、船客の姿が、ぱつと一時に眼の中へとびこんで來た。眩しく輝き出した旭日が、それらの光景に金粉をふりまくやうに光波がゆれてゐる。

『おーい！　その船ちよつと待つた。』

一艘の小船が、すんでのことに、朝凪ぎの水面をすべり出さうとしてゐるところだつたので、武市は、思はず、緊張した顏をふりたて、手をあげて叫んだ。

『諸君！　賴みがある。ちよつと托したいものもあるんだ。』

武市は、走せ寄るといひ直すやうにいつた。

やがて、武市の前には、船からあがつて來た旅裝束の三人の當惑しきつたやうな顏が並んだ。

『わしは、事こゝに到れば無理にひきとめはせんが、少々話がある！』

武市の額からは、たら〳〵と汗が流れてゐる。磯の香を含んだ微風が、髮のほつれを嬲つてゐる。しかし、息づまるやうな一瞬であつた。

『…早朝から御苦勞をおかけいたしました。何とも相すみません。實は、私、これから長濱村の親戚へ參る所用がありまして、——丁度、兩君も同じ方面へ參りますので、いゝ連れが出來たとよろこんで居るところでした。』

吉村は、さすがに、もぞ〳〵とした調子でいつた。

他の二人は、默つて頭を下げた。

武市の顏には、見る〳〵苦笑が浮んだ。どつちかといへば小柄の、しかし、ぴち〳〵と元氣のいゝ、色白で丸顏の、なか〳〵愛嬌に富んだ吉村を見ると、武市も自ら、緊張がゆるんだのである。

『そんなごまかしをいふたつて駄目だよ。諸君の企圖は、ちやんと見ぬいてゐるが、この期に及んで、わしは、何もいひたくはない。しかし、坂本君から聞いたこともあるから、いろ〳〵たのみたいことがあるわけなんだ。』

武市は、親しみをこめていつて、それとなく、あたりに眼をくばつた。

『えッ！　龍馬がかへりましたか。』

吉村が、驚き顏できゝかへすと、他の二人も眼を睜つた。

『うむ、昨夜な、無事歸つた。丁度貴公等が酒盃を傾けて慷慨の氣を吐いてゐた頃かも知れん。ハハハ……』

武市は、かういひながら、眼でさがし求めた場所へと三人を誘つて行つた。

吉村は、止むなく後から從ひながら、どうして、そんなに早く諜報が飛んだのであらうと、

『櫻樹未レ開揚眼嬌、呼レ朋訣別酒終宵、一家一國焉足レ患、宜レ使三本朝爲二本朝一』と、朗吟してゐた昨夜の自分の姿を思ひ浮べてゐた。

武市を中心にして四人は松の根方に腰を下ろした。

『……龍馬先生、飄然としてもどつてどさつたのよ。久坂君からの手紙をもつてな。』

武市は、もう微笑さへ浮べてゐた。

『ど、どんな文言でした？』

吉村は急きこんだ。かういふ時には、彼の內に藏された烈々たる氣魄が眉間に閃く。

『では、九州方面のことも詳しくおきゝでしたか。』

宮地が、半身をのり出す。

『坂本さんは、では、長州からずつとかへられたのですか。』

曾和も、默つては居られなかつた。

『いや、坂本君は長州から大阪方面へ出て、住吉陣屋（土州藩）に安岡や、檜垣を訪ふてな、阿部

野の古戰場を弔つたり、北畠顯家卿の御墓に詣でたりしたといふのぢや。——丁度、菜種の花の眞盛りで、雲雀が囀つてゐて、いゝ心持ぢやつたとさ。ハハハ……』

武市は、面白さうに、しかし、揶揄を交へた語氣でいつた。

『坂本さんらしい！　相變らずですな。』

『德人は、ちがつたもんぢやよ。』

二人はかういつて笑ひ合つたが、吉村は、

『先生！　久坂氏の書面には何と書いてありました？』

と、再び、執拗に迫つた。

『久坂君か、——諸侯も恃むに足らん、公卿も恃むに足らん、かうなつては草莽の志士を糾合して義擧をやるより外に策なし、だから、貴藩も弊藩も滅亡しても、大義ならばいたし方がない。私共同志は、かう決心したからよろしくたのむと書いてあつた。』

武市は、嚴肅な調子でいつて、

『まるで、吉村虎太郎の口吻ぢやないか。』

『先生！　そこです。お腹をきめて下さい。』

吉村は、ずつと前にのり出した。

『しかし、それぢや一藩勤王の誓約はどうなる？　今わしが苦心してゐるところは、江戸で久坂や、薩摩の樺山三圓等と盟約した一藩をこぞつて勤王にかためようといふことぢやないか。』

武市は、ぢろりと睨め廻し、押へつけるやうにいつた。

『しかし、形勢は急流のやうに變化して行きつゝあるぢやありませんか。』

吉村は、快活さの中にも、重つ苦しいものが蟠つてゐるやうな語調であつた。

吉村は、先に坂本龍馬とほとんど相前後して、長州へわたり、九州へも廻つて來たのだが、あちらで容易ならざる密謀のあるのを耳にした。といふのは、平野國臣や、眞木和泉や、清河八郎や、田中河内介や、その他各藩各地の志士浪人相呼應して、島津久光が精兵を率ゐて鹿兒島から上洛する機會をねらつて、討幕攘夷の旗擧げを決行することになつたといふのであつた。

吉村は、一議に及ばず、その盟約に加はり、土州の同志を糾合して大阪表で合流すべく急いで歸藩し、武市に迫つて贊成を求めたのであつた。しかし、沈毅にして、輕擧を好まぬ武市は、時期の熟しないことを說いて藩論をまとめることを急務とするので、むしろ、鎭撫につとめたのであつた。吉村が、それに默從するわけはなかつた。その結果が今日の脫藩騷ぎにまで進ませたの

である。

『おんしは、その急流に押し流されるのが本望なのか。時勢の流れを、正しい方向に導かうとは思はないのか。』

武市は、急に激しく、うめくやうにいつたが、

『おゝ、船頭が呼んでゐるぞ。まアいゝ、諸君は、潔く出發するがいゝ。しかし、曾和君だけは殘つて貰ひたい。』

と、きつとなつて、曾和の方を見た。

船頭が、船から怒鳴つてゐるので、一同はあはてゝたちあがつたが、武市は、曾和の袖をつかまんばかりにして、

『な、な、曾和君、君が行つてくれては困る！』

『私一人が…？ 何故ですか。』

曾和は、うらめしさうにいつた。

『君は、監察吏ぢやないか。わが勤王黨が藩廳内の事情をさぐるには、君をおいて他に人はないのだぜ。それは、君の固守すべき重要な部署であり、任務であることを忘れては困るぢやないか。』

武市の言葉は抉ぐるやう鋭どかつた。

曾和は、泣き出したいやうな氣持だつた。吉村と宮地に追ひすがらうにも、武市といふ防塞がたちふさがつてゐる。しかし、二人の同志の表情は、眼顔で思ひとまれと訴へてゐることが明かによみとれた。

『…先生！ 御言葉に從ひます。』

曾和は、一轉瞬の間に決意して、

『ぢや、兩君！ おんし等は敢然として征け！ わしは、こつちでやるぞ。』

と、投げつけるやうにいつたかと思ふと、眼は涙にうるんで來た。

吉村と宮地は、武市に無言の別れを告げて船に乘らうとすると、武市は、あわてて久坂への返事を托し、細大洩らさず形勢を報告するやうにとたのみ、悄然としてゐる曾和を宥めながら、波うち際まで進み出て見送つた。

纜を解かれた船は、ゆら〳〵とすべるやうに漕ぎ出された。海鳥が低く亂舞する中を、見る見る遠ざかつて行く。船と岸との間では、いつまでも、無言の惜別が交されるのであつた。

『血氣にはやるのも無理はないが……』

武市は、曾和と一緒に歩きながら、もう、吉村等の乘つてゐる船がどれだか分らなくなつてゐるのにふりかへり〳〵獨語するやうにいつた。

吉村は、高岡郡檮原村の生れで、後には、この邊一帶は勤王郷と稱せられた。十二歳の時に早くも父に代つて里正（庄屋）の役についたほどの俊髦であつた。幼少から武術を好んで城下に出て研磨したゞけに劍技にかけても相當なものであつた。しかも、土佐の庄屋には、傳統的に勤王思想が流れてゐる。昔から『底土は禁廷さまのもの、上土は太守樣のもの』といふ言葉があつた位だから、吉村の血脈には、その精神がつよく流れてゐた。諸侯や、武士とは違つて、庄屋なるものは、農耕、殖産の民草を治め、忠誠を勵むべき皇室直屬とでもいふべき身分であるといふのである。さういへば、中岡愼太郎も大庄屋の家柄であつた。

『吉村は、今年幾つだつたかのう?』

しばらくしてから、武市は、なつかしさうにつぶやいた。

『たしか、二十四で……』

『さうか、わしより九つも下か。龍馬よりも四つ若いなア。』

武市は、勤王黨の血氣にはやる誰彼の顏が、次ぎ〳〵と眼前にゑがき出されるのを覺えた。

『曾和君！　どつちにしても、大義に殉ずることには變りはないのだぞ。』

『はア……』

『わしとても、いつまでも因循固息でゐる氣はないよ。唯、吉村のやうに身輕には行かぬし、坂本のやうに飄々ともして居れんのでな。』

『お察しいたします。』

『さうだ、今朝は坂本君から改めて報告をきく約束だつたな。』

『いづれ、どつさり話の種をもつて、かへつて來られたでせう。』

『うむ、君も一度會つて、ようく天下の形勢をきいておくがいゝ。――だが、島津久光公を擁して蹶起するといふ、あの話はどうなのかな。』

『先生は、どう見て居られますか。』

『うむ、――まア、そこまではいはぬが花ぢやらう。』

『しかし、さつき承りした久坂氏のお手紙などから察しますと、よほど急迫のやうに考へられま

すが……』

『矢張、一藩勤王にまとめることのむづかしさに、業を煮やしてゐるのだらうて。』

『その點では、こちらも同樣ですな。』

時々魚屋や、荷車を挽く顏見知りが、丁寧にお辭儀をしてすれ違つて行く。

『しかし、やれるところまではやつて見ないことには話にならんわけだよ。』

武市の語尾には苦悶の響があつた。

『私も、こちらで、しつかりやつて見る決心をいたしました。』

『たのむぞ！　今、脫藩者が相次ぐやうでは、藩論統一にひゞが入る恐れがあるからな。』

『さうです。』

曾和は、口では調子を合はせながら、吉村、宮地が意氣揚々として行く姿を思ひうかべると、矢張、その方へひかれるやうな氣持をどうすることも出來なかつた。

武市が歸宅すると、坂本龍馬がやつて來て待ち構へてゐた。

『何か、あつたやうですな。』

龍馬は、まだ、眠りの足らぬやうな充血した眼をしてゐる。

『うむ、吉村と宮地ぢや。曾和も一緒だつたがつれてかへつた。』

『矢張りさうですか。これから脫藩がはやりますぞ。』

『龍馬先生がおだてゝゐるのぢやないかね。』

『とんでもない！　わしは、かうして、殊勝にちやんと歸藩してゐるぢやありませんか。』

『さて、これからが分らんてな？』

『まア、しばらくのうちは、ひるねでもしながら學問をしますよ。』

『ほほう、それは殊勝な、――いや、昨夜は失禮、久坂君の書面も篤と拜見したし、君のお話で、どこもかしこも想像以上に緊迫してゐることは分つたが……』

『土州藩だけが緊迫してゐないのですな。』

龍馬は、今朝になつても、まだ、永い旅からかへつたまゝの姿のやうで、髪もみだれて居れば、襟のよごれも目だち、黑羽二重の着物の胸ははだけてゐるといふ風體である。

『いや、さうは申さぬが、久坂君にしても、ちと殺氣立ちすぎはせぬかと思ふ。』

『しかし、まア考へて御らんなさい。どこの藩にも、老人もあれば若いものもある、金持もあれば貧乏人もある。わが藩だつて御同様、上士と下士との間には永い間の確執暗闘がくり返されてゐるわけでせう。今、こゝで一人の異論もなく藩論がまとまるやうだつたら、それこそ極楽か天國の沙汰ですぜ。』

『ぢや、君はわれ〳〵の仕事に目算はつかんといふのかね。』

武市は、むきになつて來た。

『いや、そ、そんなことはいはないが、土佐の勤王黨といふものが、かう根軸を搖つて有象無象を自由自在にひきづり廻すやうにならぬことには埒はあきませんぞ。』

『それは、坂本君一個の意見だらうが、議論は兎も角、實地に事を行ふには、先づ、ようく藩の現狀と睨み合はせてやらんことには、徒らに紛糾するばかりぢや。』

『なる程、それが墨龍先生（武市）の御議論なので……』

『坂本君、冷かしちやいかんよ。君は、まだ、昨夜の醉ひが、――いや、旅のくたびれがのこつてゐるのだらうが……』

『いや、今度はくたぶれどころか、いゝ保養になりました。』

『茶種の花盛りに、揚雲雀の囀りか。ハハ……』

『何しろ、安政五年以來ずつと、國にくすぶつてゐたんですからな。』

『さうなるかな。』

『あんたも、ちと京、江戸方面へのり出して見ることですな。』

『わしを脫藩組に入れようといふわけか。』

『ハハハ……。その節は、お供してもようがす。』

武市は、女が飯の支度が出來たことを知らせに來たので、人拂ひをして別室で談合するために龍馬の爲に朝酒をも命じ、そちらへ運ぶやうにといひつけた。

いつ會つて見ても、龍馬は愉快であつた。吉村などのやうな過激さはなくて、何か餘裕をもたせてくれるおほどかなところがある。しかし、謹嚴で、規律正しい武市の性分とは、どこか、そりの合はぬところがあつて、どうもぴつたりしない。だから、武市は、うつかりしてゐると、背負投げを食はされさうな不安を感じさせられる。

『坂本君、どうかこちらへ……。今日は、ゆつくりとくつろいで、いろ〳〵相談したいから：』

武市は、妙に改つた調子でいひながら、先に起つた。

『さうですか。』

龍馬は、自分のずりこけた袴の裾を足にひつかけさうになつてよろけたが、

『おつとどつこい！　長州の話、上方の話、まだ、どつさり話のタネはありますぜ。』

と、おどけたやうな調子でいつた。

燭のゆらぎ

二三日すると、澤村總之丞が、吉村等の後を追ふて、ひそかに國境を越えて脱走したといふ噂が同志の間に傳はつた。

龍馬は、澤村と親密な間柄であつたから、かへる早々のことゝいひ、さすがに、ひどい衝撃をうけた。澤村のことを知つた河野萬壽彌が、龍馬のところへ血相變へてかけつけて來た。

『澤村が、とうとうやつた！』

河野は、眼の色を變へて叫ぶやうにいつた。

龍馬は、ごろりと寢ころんで、『資治通鑑』の我流讀みをしてゐたところであつたが、

『おんしは、どうするのか。』

と、いひながら起きなほつた。

『何が……？』

『脱藩がだよ。』

『戯談を……。かうざはついてゐては、藩論一定なんて、とても及びもつかんことぢやないか。わしは、いよ〳〵心配になつて來たから、貴公と武市のところへ押しかける決心でやつて來たんだ。』

『よからう。しかし、窮屈先生（武市）では、どうも、融通が利かんのでなア。』

『坂本！　君が說破する責任があるのではないのか。』

『あるかも知れん。いや、會へば必らず說得されつとめよるぢやないか。ところが、向ふでは、わしのことを直ぐ坂本の大風呂敷だの、法螺吹きだのといつてとり合はんのだから困るんだ。』

『それほどでもないだらう。兎に角、瑞山によつて勤王黨二百餘名の連判狀も出來たのだし、平井善之丞、小南五郎右衞門、渡邊彌久馬なんていふ錚々たる連中を汗水たらして說き廻つてゐるところから見れば、あの先生だつてさう融通の利かぬ人でもあるまい。』

『ぢや、吉田東洋も、口說き落したか。』

『吉田參政が、さうわけなく行くやうなら樂な話ぢや。ところが、民部樣は、一人の吉田元吉を倒すなら、他の佐幕一派を叩きふせることはわけはないとおつしやつて同志を激勵されたといふぞ。』

山内民部は、容堂の弟の豐譽のことで、まだ、若年ながらも、兄の公武合體に反し、勤王の志深く、大義に明かな人物であつた。

『それは、わしもきいた。さぞ、那須信吾あたりが、涙をこぼしてありがたがつてゐることだらうな。』

『坂本！　本氣できいてくれよ。——吉田東洋は、さしあたり、長州でいへば、長井雅樂か。』

『なるほど長州の長井は、土州の吉田だな。しかし、天下到るところに大小の長井、吉田がゐて、佐幕や公武合體に奔命してゐるのだよ。——わしは、どうも、そんな奴らにかゝはつてゐることは好かんのでな。』

『ぢや、どうするのだ？』

『とつくりと考へておかう。だから、學問ちふものを始めてゐるんだよ。』

龍馬は、自慢さうに『資治通鑑』の表紙を叩いて見せた。

『ふん、相變らず端倪すべからずぢやのう。』

『さア、顎先生（武市）の館へ乘りこまう。』

『おゝ、行つてくれるのか。ありがたう！』

『おんし一人では心細からうから、ついて行つてやる。』

『何を！』

『天下の憂ひを憂ひとするもの同志は、行動を共にするのは當然ぢや。さう、怒るな！』

『分つた〳〵。』

二人は、そゝくさと起ち上つた。

武市の道場には、相當の人數が集つてゐて、沈痛な顏をして、何やらいひ合つてゐた。澤村總之丞の脫藩問題も出てゐるらしい。

『おゝ、よいところへ……』

武市は、二人を迎へると、鷹揚にいつて、

『河野君には、ちよつ賴とみがある。』

『はツ！』

何事だらうと、河野は、招かれるまゝに、武市の傍近く進み寄つた。

越後の浪士本間精一郎が、ひそかに土州へやつて來て遊說を試みるらしい。が、あの人物は評判の辯者であるから、そのつもりで、河野と上田楠次の二人で國境まで會見に出かけて貰ひたいと、武市はいふのである。そして、『層聲をひそめて、

『……本間はな、どのやうな突拍子もないことをいふか知れないが、君たちは、徹頭徹尾一藩勤王の說を固持して時を期し、正々堂々京師に入るべしと主張して貰ひたい。うつかり口車にのつては、とりかへしがつかんことになるからなア。』

と、いひ含めた。

『はア……』

河野は、氣のりのしない返事をのこして退いた。

『何の話だつた？』

龍馬は、河野が座につくと、そつと訊いた。

『お次ぎは、どうも坂本が怪しいといふてどさつた。』

『まさか。』

龍馬は、鼻つ先であしらつたが、內心ぎくりとさせられた。

先年、水戸の住谷寅之介が、矢張、他藩遊說の途すがら、國境の立川まで探索にやつて來たことがあつた。その時は、龍馬が會ひに行つたのだが、住谷は、ひどく龍馬の爲人をほめたてながら、後で人に向つて、『老中の名前さへ碌に知らぬやうな田舍武士では……』と、揶揄したといふのである。實際、龍馬は、一々老中の名前など知つたやうな顏はしなかつたのである。

その後、長州から長嶺內藏太、山縣半藏の二人が、有志の代表として入りこんで來た時も、龍馬が應接に出かけて行つたのである。

ところが、今度は、自分が命ぜられたのだから、河野は、まんざらわるい氣持はしなかつた。しかし、本間の人物の如何は兎も角、たとへ會つたところで、思ふ存分に議論は出來ないことを考へると憂鬱なのである。武市の方針には同じがたいからであつた。

『坂本君！　おれは、實に、厄介な命をうけたんだよ。』

河野は、遂にうちあけた。

龍馬は、何を考へてゐるのか、腕組みをして、次ぎ〳〵と運ばれて來る燭臺の灯のゆらぐのをぼんやりと眺めてゐる。

一座の議論は、果てしもなくつゞいてゐた。

『どどうした？　議論の仲間にも加はらないで……』

河野が、もどかしさうに龍馬の肘をつゝついた。

武市は、一座を睥睨するやうにして、吉田參政と論判した模樣を得意げに演述してゐるところであつた。

『……まア、さういつたやうなわけでな。わしは、それに對して、かう逆捻ぢを食はしてやつたよ。一體、公武の合體などゝいふことが臣子の分として申せることでござらうか。不肖半平太には、とんと腑に落ちませぬ。申さば、臣下である武家や幕府が、一天萬乘の君の命にたゞ〳〵添ひ奉らんことをのみ日夜祈念してゐるべきに、幕府が天朝樣に合體すとは何といふ恐れ多いことであらう。左樣なことが申せるならば、この半平太が、太守樣や老公に合體、――いや、同席致すのと同樣の僭上沙汰で、斷じて許せることではござりますまいとつめ寄つたものよ。これには、さすがに吉田殿も……、ハハハ……』

武市の笑ひ聲が凛々として響きわたつた。

それを聽いてゐるのか、ゐないのか、

『……澤村は、どこまで行つたかな？』

と、龍馬は近眼を細めて、まぼろしでも追ふやうに虚空を見入つてゐた。何かに憑かれた人のやうに。

その前夜

十六夜の月である。見ると、光をあびて、數人の壯漢が路上で喧嘩をおつ始め、まるで、軍鷄か土佐犬のやうな騒ぎであつた。刀こそぬかないが、袖はちぎれとび、下駄は散亂し、殴られたのか、かきむしられたのか、顔から血をふき出してゐるものさへあつた。

『ほう、安藝郡に香美郡の若い衆らしいぞ！』

折柄來かゝつた龍馬は、ひよいと軒下にかくれて、喧嘩の成行如何にと見守つた。醉ひの爲に身體をぐら〳〵させてゐる。

安藝、香美の二郡は、武市半平太が藩の命をうけて劍術指南に出張してゐた關係から、勤王黨

に走せ參じたものが、土佐七郡の中でも非常に多いところであつた。

醉つた上の他愛もないことが原因の爭鬪だつたのだらう。騷ぎは、間もなく靜まつて、手をとり合つて泣き出す者さへあつた。

『……やつちよるな！』

龍馬は、くす〳〵笑ひながら、軒下から出ようとした。

唯一人だけ、あたふたとこつちへやつて來るのがあつたが、直ぐ精次郎だと分つた。

『おい〳〵。』

びつくりして立ち止つた相手は、きよと〳〵しながら、ひどく面喰つてゐる。

『わしぢやよ。お前も、さつきの喧嘩の仲間だつたのか。ハハハハツ……』

龍馬は、喧嘩の群れが散じ行くのを見定めてから、ぬッと面前に現ばれた。六尺豐かな長身に月光をあびてゐるので、素晴しいのつぽに見える。

『をぢさんは見てゐたんですか。』

精次郎は、きまりわるさうに頭へ手をやつて、

『……僕は、仲裁役だつたのが、とうとう捲きこまれたんです。馬鹿な目に合ひました。瘤までこしらへて……』

『いや、いゝ見物だつたよ。だが、ちと近所迷惑ぢやな。』

『恐れ入ります。』

『おかげで、わしも道草を食つたが、お前は、早くかへれよ。春猪が心配して待つてゐるぞ。女房の身にもなつてやるもんだ。』

『ぢや、御一緒に……』

『うんにや、わしは、まだ寄るところがある。』

龍馬の兄權平に春猪といふ娘がある。その婿に來たのが、家老、山内下總の家來鎌田實清の三男にあたる精次郎なのであつた。春猪は、白ぁばたのぶく〳〵肥つた女だが、可憐愛すべきところがあつたが、精次郎の方は、ちと、凡庸らしいので物足らなかつた。だから、喧嘩の仲間に加はつてゐたのが、むしろ、不思議な位であつた。

『あの、澤村總之丞さんがおかへりになつたことをおきゝになりましたか……？』

『それ、誰から聞いたのか。』

『二三の人がいつてゐました。武市先生の屋敷に監禁同樣の身の上といふぢやありませんか。』

『わしは知らんぞ。』

龍馬は、頭をふつてつよく打ち消した。

『をぢさん！　僕も、もつと廣い世界へとび出したいと思ふやうになりました。』

『どうして…？』

龍馬は、横合から跟いて來る精次郎をふりかへつた。

『いろ〳〵な世間の話をきくと、ぢつとして居られない氣持になるんです。』

『しかし、お前は世間へ出て苦勞をせんから、そんなことを考へるのだらうが、まア、ようく考へて見ろ。土佐はいゝ國だぞ。珊瑚、かつを、ヨサコイみんないゝぢやないか。ハハハッ…』

『…一領具足の武士つていひますね。』

『しかし、それは大昔の話ぢやよ。』

『田を耕作するとも、槍の柄に草鞋兵糧をくくりつけ、スハといはゞ鎌鍬を投げすて走り行く、鎧一領にて着替もなく、馬一疋にて取替もなく、自身走り廻るゆゑに、一領具足と名づけたり、鐵砲太刀打を訓練し、死生知らずの野武士なり』と、『長曾我部盛衰記』に書かれてある。その『一領具足』の精神が長曾部の殘黨に血をひく鄕士、下士階級に流れてゐるのであつた。精次郎は、それをいつたのである。

『さうでせうか。』

『だがのう、精次郎よ。もう時代は變るぞ。いくさをするにも、槍や刀でなく、大砲や、軍艦になつて來た。』

千葉周作の弟に學んで北辰一刀流の極意を究めた龍馬の言葉として、精次郎には、腑に落ちないことであつた。

『お前は、黑船を見たことがあるか。』

『えゝ、室戸岬で…』

『そりや、薩州の蒸汽船か何かぢやらうが…。メリケンや、エゲレスのは、でつかいぞ。走ること矢の如しで、精鋭な大砲をうんと積んで、どかん〳〵とぶつ放なつのぢや。兵士は千人位も乘つてゐる。わしは、嘉永六年にペルリが浦賀にやつて來た時から二度も江戸に行つてゐたらう。だから、あの騷ぎには、土州藩の臨時警備にひき出されたからよく知つてゐるんだ。』

『ぢや、僕なんかは、これから、どうすればいゝんでせう？　あの燒きつぎをしてゐた饅頭屋の長次郎さへ、をぢさんに動かされて發奮したおかげで、今では江戸で安積艮齋先生の門生になつ

てゐるさうぢやありませんか。』

『近藤のことか。あれは才物だ。まア、他人のことを氣にせんで我慢してゐなさい。今に、わしがいゝやうにしてやるから…』

『をぢさん、本當ですか。たのみますぞ！』

精次郎は、心からよろこんでゐるやうであつた。

しつとりと更けわたる春夜の大氣にどこからか馥郁たる花の匂ひがぷーんと匂つて來る。

精次郎との問答に、もう酔ひは、すつかりさめてゐた。龍馬は、河田小龍のところへ行つて御馳走になり、時事を談じてのかへりなのであつた。小龍は畫家であるが、薩の筒奉行の池田觀藏や、砲術師の田所左右次に隨行して薩摩の軍備を視察に行つたこともあり、蘭學も可なりやれ、家塾をも開いてゐる知識人であつた。龍馬は、少年時代から知つてゐるので、ちよい〳〵訪ねて、島津の鐵砲製造や、製鐵所の話をきかされてゐた。

これから、龍馬が會ひに行かうといふのは、實は、澤村總之亟なのであつた。龍馬が、精次郎に訊かれて知らぬといひ張つたのは、祕密を要するからであつた。

かねて、しめし合はせてあるので、龍馬が武市邸の裏木戸から難なく忍び入ると、ほんのりと赤い灯が雨戸の隙から洩れて來た。

『おい！ 來たぞ！』

『這入れよ。』

『眠れんのか。』

『いや、一と眠りしたところぢや。夜ももう四更ぢやらうが…』

『さうはなつてゐまい。』

龍馬は、そつと雨戸をあけた。

そこには、澤村が立つてゐて、

『おゝ、まるで霜の如き月光ぢやのう。』

『何に、春月朦朧たりぢやよ。』

澤村は、屋根に流れる白銀のやうな月光を眺めてゐたが、『國を思ひねられぬ夜の霜の色燈よせて見るつるぎかな』と、口ずさんだ。橘曙覽の歌である。

『これでも囚人かい。どこからでも逃げ出せるぢやないか。』

龍馬は、どん〳〵あがりこみ、

『墨龍先生は、どうかの？』

と、つぶやきながら坐つた。

澤村は、すつかり戸締りをしておいて、

『もう、何事も意見は申さぬといふてござつた。』

と、これもどつかと薄汚い寢床の傍にあぐらをかいた。

『それで、こんなに寛大なのか。それとも、貴公だけは逃げ出していゝといふ謎なのかい？』

『さア、そこは分らん。』

澤村は、鉈豆煙管をとりあげて、粗いきざみをつめながらいつた。髪はいつ結つたのか、蓬々として居り、風呂に入らぬので、くすぶりかへつたやうな手や、顔をして眼だけがぎよりと光つてゐる。

澤村總之丞は、脫走して長驅長州の萩にとつゝ走り、やつと吉村虎太郎等と一緒になつたが、平野國臣等の義擧も日一日と迫り、この機を逸しては土州藩が立ちおくれになる恐れがあるので、本間精一郎訪問後の藩情を探り、同時に勤王黨の首領武市の蹶起を促す爲に、吉村に命をふくめられて、夜陰にこつそり城下に入り、武市のところへやつて來たのであつた。

ところが、武市は自重して一向動かうとしない。それのみか、澤村を諭し、自邸にひきとめ、脫藩の罪人を保護して、暫らく外との交通をさしとめてしまつたのである。心は矢竹にはやれど、澤村は、武市の命に背くわけには行かなかつた。

武市は、暇を見つけては澤村をかくまつた一室にやつて來て、長州や、薩州の動靜についてきくことを怠らないが、事體は、あまりに緊急であり、さし迫つてゐた。そのせいもあつてか、武市は、遂に、龍馬と河野萬壽彌だけには面會を默認したのであつた。

『おゝ、今日は三月十六日ぢやつたのう！』

龍馬は、ぽんと膝をたゝいていつた。

『わしも、それと氣づいたところぢや。島津久光公が六百の精兵を率ゐて鹿兒島城下を出發するのは今日だといふことは、わが藩にも報告は來てゐる筈ぢやが……』

『うむ、墨龍先生の惱みも、そこらにあるのかも知れんな。光次(中岡)の報告はどうなのかな。』

光次の中岡愼太郎は、既に武市の命をうけて京都へ潛行してゐるのである。

『それは知らんが、西郷吉之助が先發して京阪の地で、義擧を助けてゐるともいふではないか。』

『ところが、吉田東洋先生は、そんなことは一切信じないさうだ。浮浪無賴の徒の爲にする宣傳だといひ居るさうな。——山内家と島津家とは御親戚の間柄だから、若し、左樣のことがあつたら、ぢき〳〵に一番早く知らせがある筈ぢやといふわけだ。先生の腹では、苟くも、參政吉田元吉に默つて、島津がそんな無謀の擧を助ける筈は斷じてござらぬとうぬぼれてゐるのだらうよ。』

『しかし、萬一にも事が起つたらどうする？』

『澤村君！　わしはな。義擧とか何とかは別として、刻々に移り變る形勢を知るには、どうしても京阪の地へ飛び出す必要はあると思ふ。』

『さうぢや。藩内のことは瑞山先生に任せとけばいゝからな。』

『だから、京都へ行つてはどうか！　中岡だけ賴みにしては居れまい。』

龍馬は、ぼくろの目立つ顏を行燈の前にさし寄せて、聲を潜めた。

『京都へ……？　ぢや、矢張、義擧に加盟する氣なのか。』

澤村の眼は、ぴかりと怪しく光つた。

『いや、わしにはわしの考へがある。君は一つ公家へでも入りこむのだな。幸ひ、三條家には、平井隈山の妹の加尾子さんがゐるから……』

『わしが公家に……？』

『さうだ。わしは行儀がわるいから、とても、そんなところへは近づけんよ。』

『だが、お加尾さんならいゝだらう。』

『馬鹿いへ！』

龍馬は、柄になく赤くなつて、

『兎に角、武市窮屈先生や、中岡庄屋どんのやうにむづかしいことばかりこねかへしてゐてはどうもならんから、われ〳〵は、別行動をとるのだ。いゝかね、虎穴に入つて虎兒をつかむ勇猛心を奮ひ起すのぢや。』

『それはさうだ！』

『わしは、追つて江戸へも出かけたい。』

『ふーん、京都や江戸には美しいお馴染みが、どつさりゐるんだらう？』

『ゐるとも〳〵。澤村！　三月さくらの咲く時におんしとわしとが手に手をとつての脈け落ちぢや。洒れてるぢやないか。』

『戯談いはんで、眞劍なところをうちあけてくれんか。』

澤村は、急に開き直つた。

龍馬は、あだかも千里の彼方を見透すやうな眼をぢつと凝らして、しばらく、默つてゐたが、

『わしの戯談は眞劍なんだぜ。——澤村！　一體、覺悟はあるのか。』

と、いつたかと思ふと、いきなりぎゆつと澤村の手を握りしめた。……

燭臺の灯をうけて、平井收次郎（隈山）と、龍馬は相對してゐた。同じやうに、てら〳〵した顏色を見せ、可なり醉つてゐた。この同年の二人は、隔てなく一議論した後の興奮に、まだ呼吸をはづませてゐる。

『それでは、どうしても行かぬといふのだな。』

龍馬は、血走つた眼をあげた。

『君は一人で思ふ存分やるがいゝ。瑞山先生も、龍馬だけは別格扱ひらしいからな。』

『さう、疏外したもんでもなからう。』

『いや、實際なんだ。坂本はあだたぬ奴（手に負へぬ奴）ぢやから、いつそ廣い世界へ放してやつた方がよからうといふてどさつた。』

『體のいゝ追放か！　いやはやどうも、わしが本を讀んでゐると、門田爲之助や、大石彌太郎がそんな棒讀みはないといつて嗤ひくさつたことがあるし、水戸の住谷寅之助は、老中の名も知らぬたはけと冷かしたさうだし、わしといふ男は、よく〳〵變な男に見られるらしいのう。』

龍馬は、いゝ色をした松魚の刺身をぺろりとやつて、ぐつと盃を干した。

平井は、急に笑ひ出した。無作法で、無遠慮な食べ方がをかしかつたのだ。中岡愼太郎は、

『では一つ頂きませうか。』と、禮容を崩さないし、吉村虎太郎は、『なか〳〵結構ですな。』と、お世辭をいふが、龍馬になると、うまいのか、まづいのか唯むしや〳〵食べてゐるが、それで、ちやんと要領を得たもんで、たとへば、柿一つにしても、澁いところや、まづいところはぺいと巧みに吐き出してすてるのである。それでゐて、愛嬌があるから德な性分だとは武市の家庭でも評判であつた。

それとは氣がつかぬので、龍馬は、

『をかしいでせうよ。拙者といふ男はな。——瑞山先生、滄浪先生（間崎）、わが隈山先生と數へ

來たれば、これ皆立派な學者先生で、武藝者で、人格者で、詩をつくり、文をよくし、畫でも字でもすぐれてお上手と來てゐる。そこへ行くと、龍馬などは雅號一つもたぬ野人ぢやからのう。』

と、自嘲するやうにいつて、

『おゝさうぢや。字といへば、是非一つ三條家の加尾子さんに手紙を書いておくれんか。龍馬のことをよろしくたのむとな。』

『何に妹に手紙を……?』

『さう。一つ兄者人としての君からよろしく。譜紳堂上方に近づいて、事情を探ることが重大事だから、加尾子さんに助太刀としての應援をお頼みしたいんだ。たのむ! たのむ!』

龍馬は、幾度となく頭を下げた。

『堂上方に近づかうなんて、君らしくない謀叛氣を起したものだ。』

『いや、わしが何も近づかうといふのぢやない。加尾子さんに同志として、その……』

『まア、待つてくれ。山内家のことも考へねば、それは、輕卒には出來かねるな。』

『なる程、さういふお氣遣ひもあるわけか。』

龍馬は、幾分皮肉にいつた。

山内容堂の妹の友姫は、三條實美の兄公睦卿に嫁いだが、その時、平井の妹加尾子はお附の局として京都へ上つたのである。由來、三條家と山内家とは姻戚の間柄で、少將景翁公の妹は三條實美の廉中で、實美の實母にあたつてゐるし、容堂の奥方正君は、三條家の養女といふ間柄なのである。

龍馬のことだから、惡氣はなくても、どんなことをやり出すか分らぬと思ふと、妹のことは兎も角、平井の氣性としては、容易にうんとはいへないわけであつた。

しかし、龍馬にして見ると、平井は血盟の士であり、妹とは幼馴染みであり、今、脱藩の決意をうちあけて、加尾子への手紙をたのむ位のことは當然だと心得てゐるのである。

昨年の九月の頃であつた。龍馬は、女友達といふ氣安さから、つぎのやうな手紙を加尾子に送つたことがある。

先づ〳〵御無事と存じ上候、天下の時勢切迫に付、

一、高マチ袴、

一、ブツサキ羽織

一、宗十郎頭巾

外に細き大小一腰各々一つ御用意あり度存上候、

まことに龍馬一流のとぼけてゐるのか、眞面目なのか分らぬ、まるで、判じ物のやうな文句であつた。むろん、加尾子からの返事はなかつた。しかし、その時は、さほど氣にもしなかつたが、今、平井の煮えきらないところを見ると、加尾子が自分の眞意を誤解して何かいつて來た爲に、警戒してゐるのではないかと思はれるのであつた。味方とばかり思つてゐた加尾子も、いつしか無緣の路傍の人となつてしまつてゐるのであらうか！

『どうした？　飲まんかね。これは、別盃ぢやない。おれたちも、やがて、殿樣を擁し奉つて上洛の途につく時も來るのだ。』

平井は、怒るやうにいつた。

龍馬は、默つて、こくりとうなづき、素直に盃をとりあげた。

『干さんか。どん〳〵飲み給へ。』

『うん……』

龍馬は、加尾子と無邪氣に遊んだこともある昔のことを懐しく思ひ起してゐるのであらう。

『さア、飲んだり〳〵……』

龍馬は、追憶のまぼろしを打ち拂ふやうに、頭をふつて、たてつゞけに四五盃干して、

『……春くれて五月待つ間のほとゝぎす初音を忍べ深山べの里――これは、わしの詠んだ歌だ。これで、なか〳〵風流心もあるでな。』

と、朗詠の調子でいつた。

『ふむ、初音を忍べか！』

『意味深長ぢやらう。今は丁度五月待つ間だ。ぢや、失禮！』

龍馬は、いふなり、どうしたのか、ふら〳〵と起ちあがつた。

『ちよつと待つた。まだ、話はすんでゐない。』

平井は、驚いてひきとめようとしたが、龍馬は、刀を下げ、何やら微吟しながら、蹌踉として出て行くのであつた。しかし、その眼には、涙らしいものが宿つてゐた。

脱藩のはなむけ

親戚の廣光左門に無心して、やつと、十兩餘りの金を借りることが出來たので、『旅費はこれで十分！』と、龍馬は、ほく〳〵しながらかへつて來た。

兄の權平は、藩廳に對する責任もあり、それに坂本家は、家老福岡のお預り鄕士といつた身分でもあるので、龍馬の行動に贊成するわけはない。しかし、一應、戒めはしたが、たつてとめようともしなかつた。

龍馬には父もなく、母も十二歳の時に喪つてゐたから、こんな場合は、むしろ氣は樂である。それに、姉の乙女は、唯一の味方で、蔭日向なく庇つてくれてゐるから、二十八歳の龍馬も、まるで母親に對するやうに甘えてゐた。今度の決心についても、乙女は、萬事のみこんでゐてくれてゐる。

『…龍馬さん、ちよつと…』

乙女は、一室に呼び入れた。

『はい〳〵…』

龍馬は、子供のやうにのこ〳〵とついて行つた。

乙女は、いつもに似ぬ嚴然たる態度で、きちんと坐つた。『坂本家の仁王樣』と、あだ名されてゐるだけに、まだ、三十そこ〳〵の若さながら、龍馬の姉にふさはしく丈も高ければ、どつしりと幅もある大女である。

あたりを憚る眼つきで、そつと見廻した乙女は、うしろにかくしてゐた錦襴の袋に納められた一刀を前へ持ち出し、

『…これは、お家の寶刀肥前忠廣ぢやが、わたしの餞別の印だからもつて行きなさい。』

と、得意さうにいつて、初めてにつこりした。

『えツ！ 若しも、兄さんに分つたら…？』

『何にいゝんだよ。後のことはわたしがひきうけるから安心してゐなさい。』

氣丈で、負けず嫌ひで、頭のおさへ手のない乙女としてはやりかねまじいことであつたが、龍馬も、さすがに驚いた。しかし、にやりとしながら、

『實をいへば、ありがたいのだが…』

と、うれしさうに推し戴いた。

『では、いよ〳〵立ちますね。何も忘れてゐることはないかえ？』

『えゝ、暇參もして來ました。』

『感心だね。まア、しつかりやつておくれ。』

『姉さんも、どうぞ、お達者で…。もう、岡上へは戻らんつもりですか。』

岡上といふのは醫家で、乙女の嫁ぎ先だつたが、變り者の乙女は、夫と仲違ひをして實家にかへつてしまつたのである。

『わたしは、一生坂本の仁王樣といはれて通せばいゝのだよ。感心ではあるけれど、姉さんのやうな弱いことは嫌ひだから…』

上の姉千鶴は高松に嫁して太郎といふ悴もある。次ぎの姉は、柴田家に入つたが、夫の亂行で不緣となり、貞婦二夫に見えずとの遺書を殘して自害したのである。乙女がいつたのは、その姉を指したのである。

『姉さんは、矢張、つよくてゐらいね。』

龍馬は、かういふより外はなかつた。

『わたし、變人かも知れないよ。それはさうと、今度かへる時は、いゝ短筒（ピストル）をおみやげに買ふて來ておくれ。打つて見たいから…』

『いつかのは、どうしたんです？』

『あんな舊式のやつは重いばかりで駄目だよ。どつかで錆びてゐるだらう。玉もなくなつたよ、河田（小龍）先生に何とかならぬかと賴んで見たら、あの人、おゝ怖や〳〵といつてゐなさつたわ。』

『それは、誰だつて驚きますよ。』

『それから、いゝお嫁さんをつれてかへりなさいよ。京あたりのきれいなの…』

『いや、そんな嫁はありませんよ。』

『お前さん、どつさり知つてゐるのぢやないかえ？　ほら、京都の楢崎先生のとこにだつて？　お嬢さんが二三人あるつていつてゐたぢやないかえ？　それはどうなの？』

『うん、あの娘ですか。』

龍馬は、ちよつと照れて、

『さア、どうしてゐますかね。この前、江戸からの歸りにちよつとお見舞に寄つたきりだが、先生の牢死後のくらしはみぢめでした。一番上の姉娘が、しつかり者だから、何とかやつてゐるやうなもの〻…』

京都の勤王醫者といふべき楢崎將作は、水戸その他の勤王の士と交りがあつた爲に、安政戊午の井伊大老の彈壓に會ひ、入牢中に死んでしまつたのである。土州藩でも世話になつたものが多く、龍馬も、その一人で、特に愛せられてゐたのであつた。

『今度お訪ねしたら、ようく話して御覽なさい。まんざら、つり合はぬ家でもなからうから…』

『嫁の話は、まだ早過ぎますよ。武士たるものは、外に出ては内を忘るだけの覺悟がなくてはならんと山鹿素行先生だつたかもいふて居られるし、それに、浪々の身でゐる方がどんなにいゝか知れないから……』

『さうも行かないわさ。今に分るけれど……』

乙女は、まるで、母親か、おばさんのやうな口吻である。

脫藩の罪を犯してまで、風雲に乘じようとしてゐる弟に嫁選みとは、何といつても乙女は變つてゐる。しかし、乙女には、龍馬が可愛くてならぬのである。だから、何かといふと、うちの龍馬が——と出る。武市瑞山は、後から江戸に出て、桃井春藏について免許皆傳をとつたが、龍馬の方が千葉貞吉の道場で、先にとつたといふことを眉に自慢にしたがるし、長州の桂小五郎とは龍馬も江戸で面識があるが、彼は、齋藤彌九郎篤信齋の塾頭になつてゐたけれど、齋藤と千葉とは比べものにならぬから、龍馬の方が劍法にかけてはつよいと、ひとり定めにしてゐるといつた風に。それから二番目にいふことは、『坂本家の家名』のことであつた。普通の鄕士や、下士の家柄ではないといふ腹があるからである。

むかし、明智光秀の一族の光春は愛する女に一子を生ませたが、その光春は光秀に殉じて江州坂本に滅びたのである。それで、女は泣く〳〵子供を抱へて土佐にのがれて來て、才谷といふ山里にかくれすみ、坂本の姓を名乘つた。それが、坂本家の祖先なので、後に長曾我部に仕へたが、それは、大阪夏の陣に滅びてしまつた。その後へ移封されて來たのが、遠州掛川の山内家であつた。坂本家は、その爲、山内家の鄕士となつたわけである。四代目の頃に分家して城下に移り、才谷屋といふ酒造家となつたが、後に分家して鄕士の株を買つて武士となつた。それから櫓平で既に十代目になつてゐる。

乙女が誇りとする家柄といふのは、さつとこんなものであるが、坂本家は、現に、百九十七石の領地と、十石四斗の祿を食むで富裕なくらしであつた。龍馬が、自費で江戸へ遊學の出來たのもその爲であり、掛川以來の山内家譜代の上士階級ではないけれど、長曾我部系の草野にひそんで反抗をつゞけたちやき〳〵のそれとも少しは違ふのである。下士階級の一人として、龍馬にも叛骨稜々たるところはあるが、さりとて、徒らに、ひねくれ、つむじ曲りでないのは、さういふ血筋の爲でもあつたらう。

乙女は、又、一と通り家系の話をくりかへしてから、

『…思ひ出すとをかしくてならぬ。』

と、口をおさへて、ぷつと笑ひ出した。

『何がをかしいの？』

『くだらないことだよ。わたし、ひよつとお前さんの小さい時のことを思ひ出して…。ホホホ、、、。』

『また、夜溺（寢小便）のことですか。それだけは、勘辨して下さいよ。』

『いえ、あの洟垂れ（痴兒）だの、泣き蟲だのと嗤はれてゐた兒が、よくもこんな立派なお武士になつたかと思ふとね。今では天下の龍馬さま〳〵ぢやないか。』

『上げたり、下げたり、姉さんも、全く人が悪いや。』

『でも、日野根先生の道場へ通ふやうになつてから、まるで、人が變つたやうになりましたよ。』

『さうだつたかな。姉さんの薫陶の力にもよるのでせう。』

『お前さんは、父親似だらうね。お父さんは、御養子だつたが、お背も高かつたし、弓矢のわざにも長けてゐなさつたし、書畫の手筋もよく、性質は謹直で…。』

『おや〳〵、だん〳〵似なくなる。――わたしは不肖の兒ですよ。』

『どうして、そんなことをいふのです。龍馬といふ名がどうしてつけられたかといふことを忘れてはいけないよ。』

父の八平は、黄金の駒が天から駈け下つて懷中に飛びこんだ夢を見、母の幸子は、蚊龍が雲に乘つて赫々たる神火を吐いて胎内に入る夢を見たので、何かの奇瑞だらうと夫婦で語り合つてゐるうちに、胎んだのが龍馬なのであつた。龍馬は、子供の時によくきかされた話だが、それよりも背中に痣があつて、それに怪毛が生えてゐることが氣になつて、荒誕な夢物語りなどきかされても自信はもてなかつたものだつた。

しかし、今、乙女から父のことを語り出されると、五十九歳で亡くなつたことを思ひ出し追慕の情がわきあがつて來た。その父は、初めて江戸に遊學する時、『守』として訓戒を書てはなむけにしてくれた。『片時も不レ忘忠孝、修業第一の事』といふのが第一條で、最後には、『色情にうつり、國家の大事を忘れ、心得違有間まじき事』とあつた。幸ひに、龍馬は過ちなくやつて來たのである。そして、今度は、姉から、傳家の銘刀をうけて、勤王衍のかしまだちといへば聞えはいゝが、どうにも息づまるやうな藩内の空氣にたえられなくなつて、また、旅からかへつたば

かりなのに、ひそかに脱走しようとしてゐるのである。前と今とでは、何といふ相違であらう？

乙女との話は、いつまでもつきなかつたが、さうしてゐるうちにも、さすがは女で、新らしい肌着や、手拭や、洗濯した下帶や、脚絆や、そんなものが、つぎ〳〵と眼前に並べられるのであつた。

三月二十四日の夜もふけ、半月の光に三層の天主閣が林表に聳えてゐる光景は、幻のやうに美しかつた。

凜々しい旅裝束の二つの影は默々として城下をぬけ出して急いだ。これは、龍馬と、澤村總之亟と、他の一人は見送りに來た河野萬壽彌なのであつた。

河野は、朝倉村まで送つて行き、そこで、別れの言葉を交した。二人は、途中、那須信吾を吉村と同じ檮原村に訪ねて、後事を托したのである。龍馬にとつては、日野根辨治の門に劍法を共に學んだよしみもある那須のことだつたので、そこで一泊し、密事をうちあけて語り合ひ、まだ、夜のあけぬうちに出發し、宮野の關門を裏道にとつて無事通りぬけ、ほつとしたのであつた。目

指すは、先づ、中國から長州で、そこから京阪方面へのぼる計畫なのであつた。

山路の春も今はたけなはで、霞がたなびき、鶯が鳴き、山櫻が咲いてゐる。さすがに、狼は姿を見せないが、時には猿の群れが枝から枝へ奇擊を發しながらわたつてゐたり、兎が駈けて行くのが見られたりする。——那須信吾等の暴發組の策謀をきいて來たので、何だか同志を見すて〻來たやうで疚しくもあつたが、龍馬には、自分の進むべき道は、今、辿りつ〻ある山路の險岨で、曲折に富んでゐるのと同樣ながら、はつきりと見透されるやうな氣がしてゐるのである。

『…江戸の事情を知りたいな。今年正月坂下門で、安藤閣老が襲擊された後のことをな。』

龍馬の空想は、先へ〳〵ととんで行くのである。

『それよりも島津公入洛後の京都が見ものだと思ふな。』

澤村も、聲を彈ませた。

『ぢや、貴公は京都にゐて公卿の間を探り、拙者は江戸行と定めるか。』

『すぐ譜紳堂上といひ出すが、わしに出來ることかな？』

『お加尾さんが、ちやんと導きをしてくれるといつてゐるぢやないか。それに君は男つぶりがよくつて、頭腦がよくつて、學才があつて…』

『さう、おだてなさんな。』

『いや、本當だ。加茂川の水で磨いたら、一しほ、きれいになるよ。——時に、君は、ふぐ料理は好物だつたかな。』

『食ふよ！』

『ぢや、馬關へついたら、早速、御馳走しよう。なか〳〵美人もゐるぞ！』

『わしは、美人の方は苦が手ぢや。』

『さては、この間ふられて來たかな。』

『馬關へは寄らなかつた。』

『ぢや、萩のそら、何とかいふお茶屋の……』

龍馬は、かををかけるやうにいつたが、

『中岡の光次どんは、あれでしんねこが好きでのう。あんな顔をしてゐて、なか〳〵隅におけんのだな。』

『眞面目だから、信用されるんだらう。』

『わしは、信用されぬかな。』

『女でないから、わしには分らんな。』

『こん畜生！』

龍馬は、いきなり發作的に澤村の背中をどやしつけ、

『どうだ。廣い世界へ出て來たぢやないか。これは、城下の小池の中で大小の魚があぶ〳〵しながら、泳いでゐるやうな先生方には分らぬ氣持だぞ。ハハハ……』

不意をぶたれて、澤村は、

『あッたた……』

と、悲鳴をあげ、はづみを食つて、坂路をよろけながら走つて下りる。

『ざまア見ろ！』

龍馬は、手を打つて、子供のやうにはやしたてた。

二人が、このやうな愉快な旅をつゞけてゐる時、平井收次郎は、顔をしかめながら、妹の加尾子に、つぎのやうな手紙を書いてゐたのであつた。

坂本龍馬、昨二十四日の夜亡命、定めて其地に參り申すべく、龍馬國を出る前日、其許の事につき相談に逢候事御座候、たとへ龍馬よりいかなる事を相談致候とも決して承知不可致、

今其許は家にありて父母に從ふ身なれば、他人の爲に使はれ候事出來不申、元より龍馬は人物なれども、書物を讀まぬ故、時としては間違事も御座候へば、よく〳〵御心得あるべく候只々拙者も其許も報恩の節を失はず、忠孝の道に缺けざるやう致され度候、目出度かしこ。

こんなことがあらうとは、如何に龍馬とて、千里眼の持主でないから感づくわけはなかつた。

第二章

嵐を呼ぶ

世の中の春の急ぎに急がれて
急がぬ身さへ急がるゝかな
—大國　隆正—

那須信吾は、先には同じ村の吉村虎太郎の亡命を指をくはへて見送つたのであつた。そして、今は又龍馬たちとも空しく袂を別たねばならなかつた。

越後の浪士本間精一郎が潛行して來た時、那須は、禁を犯して自家に迎へ、武市に斡旋しようとした位だつたが、本間の方では土州の士に見きりをつけて立ち去つてしまつた。しかし、本間の態度や口吻には怪しまれるところが多かつた。策士で、恫喝的の辯を弄し、誠意といふものが認められなかつた。それ以來、那須は腹の蟲がどうにも納らないのだが、『糞ッ〳〵』と、胸を叩いて口惜しがりながらも、どうにもすることも出來なかつたのである。

ところが、龍馬等の脫藩にぶつゝかつたのである。それが、一方ならぬ刺激となつたことは否めない。

『坂本の奴！　勝手氣まゝに振舞ひやがる。まるで、無軌道でとりとめがないやうに見えるが、行つてしまふと、何だか大切なものを殘してくれたやうな氣がする。後から行くものへ道をつけてくれながら進むやうな感じだ。不思議な人間もあつたもんぢや。』

那須は、こんな風に心の中でつぶやいたが、さて、自分のことにたちかへると、もう、矢も盾もたまらぬ焦燥を覺えるのであつた。

『こりや、一刻も愚圖々々しては居れんわい。何が何でも巨魁吉田を倒さんことには、藩論の一定なんて、とても〳〵、百年河清を待つやうなもんぢや。』

那須は、かう決心すると、妻子にもいはずに、支度もそこ〳〵に、あたふたと飛び出したので

ある。槍が使へ、劍に秀で、史書にも詳しく、膂力衆に優れてといふ人物で、しかも、健脚馬に勝るといふのだから、國境に近い山路を行くにも、ぴよん〳〵とまるで宙をとぶやうな早さであつた。何しろ、十匁の火縄銃に彈藥を裝塡して直立したまゝで發射し、びくともせぬといふ豪のものだけあつて、氣性も激しい。もと〳〵醫者になるつもりだつたが、那須家から懇望されて、濱田宅左衞門家から養子に行つたのである。濱田辰彌（後の田中光顯）からいふと、宅左衞門は祖父に當り信吾は叔父になる。龍馬よりは六つ年上の今年三十四歳の血氣盛りであつた。

那須は、途中で長者村に實兄の濱田金治を訪ねた。金治は、舊主深尾鼎の家政を監督してゐた。深尾といふのは、高岡郡に一萬石の領地をもつた家老であつた。ところが、江戸での行狀がよくなかつたといふかどで、吉田元吉の彈劾に會ひ、容堂公の逆鱗にふれ、佐川から今のところへ蟄居の身となつて、祿も九千石に削られたのである。深尾と同時に、謹愼或は閉門になつたのは、福岡宮内、深尾弘人、桐間將監、五藤主計などの諸家老があつたのである。

那須は、兄の金治に對しては、よそながらの訣別であつたが、深尾の殿樣には面會こそもとめはしないが、『今に、吉田を倒して仇を討つてあげますぞ！』といふ氣持を胸一ぱいに膨ませてゐた。

金治は、弟の不意の訪問に驚いた。見れば、長刀を挾み、風呂敷包みを斜に背負ひ、素足に草鞋穿きといつたもの〳〵しい扮裝なのである。

『どこへ行く……？』

『城下へぢや。』

『何用があつて……？』

『坂本龍馬のうちへぢや。ちくと話があつてな。』

『さうか。城下へ行つたら、ようく見て來い。吉田東洋の建てよる文武館（後に致道館）は、千三百坪の大きなものぢやから……』

『そんな藩校をこしらへて何を敎へるのぢや。フフン……』

那須は、何といふことはなく、おさへ難い憤りがむら〳〵と胸先へこみあげて來た。

吉田ゐらい奴頭もこくが、越後透矢で伊達もこく、――と歌つた奴があるが、今度は、おれたちが頭をこいてやるぞ、といふ腹なのである。吉田は、容堂公の寵臣であるが、江戸在府中に公の面前で、酒の上とはいへ、山内家とは姻戚關係の旗本嘉善の頭を毆つた爲に謹愼を命ぜられ、國に蟄居してゐたこともある。それと、彼が豪奢を好み、越後透矢を身にまとふことを好んだの

を結びつけて、無名の諷刺家が歌つたものである。一旦、卻けられた吉田は、間もなく參政に返り咲きして公武合體、開國主義の容堂の協力者となつて、今や、土佐勤王攘夷派の目の敵にされてゐるのである。

那須は、兄のところを早々に辭して、城下に入ると、武市の門をたゝいて、吉田の成敗斷行を迫つた。『吉田參政は、何といつても、わが藩の一人物であつて、現に要職にあつて藩政の改革に着手し、人材登庸の道を開かうとしてゐる。それを暴力を以て倒すといふことは忠君の道とは申されぬ。』といふのが、武市の持論であつた。

ところが、會つて見ると、前とは大分樣子が違つてゐるのが分る。

『…痣(龍馬)は、どういつてゐたかね。』

武市は、長い顎を撫で廻した。

容貌雄偉、身の丈六尺にも餘りさうな那須が、半身を折るやうに前に曲げ、顏だけは昂然と鎌首のやうにもたげ、

『坂本ですかい?』

と、睨めつけるやうな眼光をして、

『わしが會ひましたことは、もう御存じで……』

『天知る地知るぢや。大抵のことは分つてゐるよ。』

『ぢや、申しあげます。初松魚は早く料理つて食べいよ、――唯、この一語をくりかへして居りました。ハハハッ……』

『なる程、もう、その季節が近づいたのう。』

『さうです。坂本は、しゆんを外すなといふんでせう。薩長の下風に土州藩が立たせられるやうなことになつては、とり返しはつきませんぞ!』

『しかし、坂本自身は、しゆんの味を試みずに逐電いたすとは合點が行かぬ話ぢやないか。』

武市の眼は、怪しくぴかりと光つた。

『おれは、先を急ぐから、諸君御自由に、――と申しました。邪魔になつてはいかんといふのでせう。人それ〴〵の役目があるとも申しました。』

『怪しからん! まるで、無責任な放言ぢやないか。』

『武市先生! 松魚の料理は、土地にゐる漁師にでも結構出來るぢやありませんか。われ〳〵の目的は、一日も早く柏章旗を京師に推したてることでせう。坂本等は、いつて見れば、その先鋒

隊でせう。――やりませうか、いや、斷然、やりますぞ！』

那須は、ぢり〳〵と長い膝を進めた。

武市の眉間には、名狀し難い苦悶の色がにぢみ出た。しかし、それが、見る〳〵影をひそめると、

『…よろしく、よろしく賴む！』

と、一言力づよくいつた。

『では、先生も御決心が…』

那須は、半信半疑で、武市の顏をのぞきこんだ。

『叱ッ！』

武市は、屹とたしなめて、

『よろしく、よろしきやうに…』

と、急に晴れ〴〵とした面持になつてつぶやいた。

『はッ…、はッ…』

那須は、かう答へると、早くも、歡喜に輝く顏に會心の笑みを浮べて、後退りしながら歸り支度になつてゐた。

明八日の夜四つ時（十時）、吉田東洋は、御前講義で、『日本外史』の本能寺の條を終へて下城するから、その歸途を要して一擊を加へようといふのである。一擧藩政を改革して、一藩勤王攘夷の實を擧げるには、これをおいて外に道はないといふのである。

尤も、第一組の二人が狙つた時は、機會を失ひ、第二組の二人も、苦心したが徒勞に歸したので、明夜は、第三組として、那須信吾、安岡嘉助、大石團藏の三人が當ることになつたのである。

那須は、何食はぬ顏で、本町の龍馬の姉を訪ねて行つた。乙女は、龍馬が無事に國境を越したかどうかを案じてゐた際なので、非常によろこんで、ひきとめ、根掘り葉掘り訊くのである。

那須は、心が落ちつかず、上り框に腰をかけたまゝで、どう勸められても上らうとはしない。

『那須さん！　あんたも怪しいやうだね。』

『何がです？』

『どうして、龍馬と一緒に行かなかつたの？　尤も、あんたは、奥さんや、小さいのがあるから…』

『女房子供のことなんかどうでもいゝとして、故郷の松魚を食べんことにはな。死んでも死にきれませんぞ。』

『かつを……？　今晩は、うちにもありますぞ。御馳走しませうか。』

『いや、生きた奴を、トンと頭を刎ねて、料理せんことにはうまくないのです。』

『ぢや、松魚をたべたら飛び出すんですね。』

『えゝ、まア、さうでせうな。そのうち、龍馬さんに追つゝけるでせう？』

『あんたの脚なら大丈夫！　ホホホ……』

『いや、全く龍馬さんは、ゑらい人ですね。わしは、あの人は種を播いてくれる人だと思つてゐますよ。わし等は後からの刈り役ですな。尤も、あの人の姿を見失ふと、わし等は、五里霧中になる恐れがある。だから、聯絡だけはとつておかねばならんと思つてゐるんですが……』

『……龍馬がきいたらよろこぶでせう。』

『いや、そんなことをきかないでも、こんなに鼻を高くしてゐますよ。』

那須は、自分の鼻先へ、二つの握り拳を重ねて見せた。

『ホホホ……。那須さん、そんな端近ぢや何ですから、お上りなさいよ。ゆつくりしてゐてもいいんでせう。今に、兄や、精次郎もかへつて來ますから……』

『さうもして居れんのです。』

『では、澁茶なりと……』

『お冷がいゝんです。なるべく冷つこい奴を……』

『醉ひざめですか。』

乙女が起つて、並み〳〵と天目茶碗に入れて來た。

那須は、口へもつて來ようとして、芳烈な香がプーンと鼻を衝いたので思はず眼を細めた。

『ほ、ほう、これは〳〵……』

『分りました？　お冷は、後でいゝのでせう。』

『……忝けない！』

那須は、ちよつと推し戴いて、ごくり……ごくり……と、咽喉を鳴らして呑み始めた。

『もう、お一つ如何……？』

那須は、口を拭いて、手を振つて斷はり、

『今晩は、知らぬ間に、ふら〳〵つとこつちへやつて來たんです。龍馬さんは、もうゐないこと

を知りながら、何となく會へさうな氣がしましてな。』

『わたしが、龍馬の代りになりますよ。』

『いや、お邪魔いたしました。まだ、行かねばならぬところがあります。御免！』

『あッ！　那須さん！』

那須は、もう外へ飛び出してゐた。

乙女が、暗い外を透して見ると、那須の長身は、既に消えて、どうやら絹糸のやうな小雨が音をたてずに降り出したらしく、闇に織りなす白線が眼に沁みた。

『あら、もう梅雨が來たのか知ら？』

乙女は、茫然とつゝ立つてゐた。

激動の巷へ

大阪へ出て來た龍馬は、長州で別れて先發した澤村總之丞が、うまく行つて、三條家の一門で世々神樂の家柄で、百五十石の公家である河鰭家の青侍に住みこんだことを知つたので、一と安心したが、攝海防備の爲におかれた土州藩の住吉陣營には、虫の好かぬ小監察の福富建次が詰

めてゐるし、脫藩の身となつては、迂濶に近よれない。しかし、國許の消息を知るには、一番便利なわけである。

龍馬の足は、自然と住吉の方向に向つた。

國境を越えてからの一ヶ月、龍馬にとつては、全く南船北馬の旅であつた。長州から九州へもわたつた。馬關では、勤王商の評判をとり、薩摩の御用達をしてゐる白石正一郎兄弟の厄介にもなつた。吉村、宮地は、すでに上方へ上つた後であり、澤村とも別れた後は、飄々乎たる獨り旅ではあつたが、旅費がつきて、刀の緣頭をはがして賣りとばしたやうな今から考へれば、滑稽な思ひ出ももつてゐた。

いつしか、住吉神社の前へさしかゝつてゐた。すると、二人の武士がやつて來るのが、どうもお國風に思はれる。だん〳〵近くなると、果して、陣所詰めの安岡覺之助と檜垣清治の兩士であつた。

向ふでも、龍馬の旅塵にまみれた姿に氣づいて、につこりする前に、驚きの眼を睜りながらやつて來た。

『いよう！　御兩所だつたのか。これが地獄で佛といふのかな。いや、御健勝で何より……』

龍馬は、持ち前の磊落さで挨拶した。

『坂本さん！　わし等は、もう佛でなくて鬼かも知れないよ。』

安岡は、當惑さうにいつたが、檜垣が何やら目くばせしたので、それに從ひ、人目を避けた境内へと二人は龍馬を誘つて行つた。

『御兩所！　何かあつたのですか。』

龍馬も、いさゝか不安だつた。

『坂本さん、あんた危險なことを御存じか。』

檜垣が、なぢるやうにいつた。

『はゝん、それは、脫藩のことかな。』

『いや、脫藩は勿論ぢやが、吉田參政下手人の一味としての嫌疑がかゝつて、その知らせが來とりますぞ！』

『ゑらいことをやつてのけましたよ。』

安岡は、感慨無量の體である。

『ほう、吉田參政がやられたか。』

龍馬は、驚きの表情でき〻かへした。

『あんた、本當に初めてきいたか。』

檜垣は、眞にうけてゐるらしい。

『如何にも！　わしが國を出る時は、そんなことは氣ぶりにもなかつた。武市が動かぬ以上は、そんなことはない筈だが……？』

『ぢや、寺田屋の騒動も知つてゐなさらぬか。』

『伏見の寺田屋に……？　わしは、何んにも知らんぞ。』

『吉田參政の暗殺事件は、四月の十日、寺田屋の騒動は、つい一昨日の二十九日の夜のことぢや、この方には、吉村虎太郎、宮地宜藏、吉村緣太郎が關係してゐるらしいが、まだ、詳しいことは分らん。』

檜垣は、ぷり〳〵した調子である。

『そんなわけぢやから、坂本さんも、どつかへ行つてかくれて下さい。危險ぢやから……』

安岡は、あくまで庇ふ氣持である。

『ありがたう。ぢや、伏見から、京都へ參らう。』

龍馬は、びくりともしてゐない態度である。

『それは一層危險ではないかな。』

『いや、長州屋敷にも用事があるし、伏見一件の眞相も確めたい。――はゝん、さては、島津久光を擁して起つ企ては破れたかな。』

『さうです。同志討ちだともいふし、久光公の鎭撫使との爭鬪だともいふし…』

龍馬は、ふかくうなづいて、

『さうだ。機熟さぬ時に、早まつたからだ。いや、久光公を信じ過ぎたのか。――伏見には、西鄕吉之助が居り、京都には久坂玄瑞等がゐた筈だが、あれらはどうしたかな。』

と、自問自答するやうにいふ。

『坂本さん！　吉田參政亡き後の土州藩はどうなるでせう？　御意見を承りたい。』

檜垣が、口を尖らせた。

『ちよつと待つてくれ給へ。旅のつかれで腰がだるい。』

龍馬は、とん〳〵と自分で腰骨を叩きながら、燈籠の臺石に腰を下ろした。

二人も、しやがみこんだ。

空は、五月晴れで、頭上には、銀杏の若葉が爽やかな音をたてゝ鳴つてゐる。少し離れたところには、鳩に餌を投げなどして興じてゐる子供や、子守の群れがゐた。

『一體、吉田の下手人は…？』

龍馬は、はだけた懷ろへ、右手をさしこんだまゝ、ゆつくりと訊く。

『…那須信吾、安岡嘉助、大石團藏の三名のものが、その夜限り亡命して行方をくらましてゐるので、直接の下手人は、專ら、この三人と見こまれてゐるやうです。一味徒黨は、土佐勤王派にどつさりある見當で、つまり、それで、坂本さんや、吉村君等も睨まれる所以なんです。』

安岡が、かいつまんで說明を試みた。

『なる程な。しかし、東洋先生も考へて見れば、氣の毒な人だ。野中兼山以來の傑物だ。江戸では、藤田東湖先生との交際もあつた筈だ。あの安政の大獄が起された時は、わが老公の御身邊さへ危ぶかつた。それを、いろ〳〵周旋して老公は御隱居となり世嗣公が受けつがれ、山內家の社稷は安泰を保ち得たのだ。――こんなことは、とても凡庸の器には出來んことだ。それに東洋先生は橫濱の新聞なんかにも眼を通して、海外の事情にも詳しかつた。今に、汽船の四五隻も買ひ入れて、無人島の探檢位しかねまじい勢ひだつたと聞いてゐたんだが…』

龍馬は、妙にしんみりと語り出した。

吉田參政暗殺の一味と睨まれてゐる當の龍馬の口から、このやうな禮讃追悼の言葉をきかされようとは夢にも思はなかつた二人は、さすがに顏を見合はせた。檜垣は、吉田の一子源太郎は、まだ十三歳の小わつぱながら、父の横死の知らせに接すると、追つとり刀で、仇討ちに馳せつけようとして、母親にひきとめられたといふ健氣な噂まで語つてきかせた。

『ほゝう、さすがは東洋先生の遺兒だけのことはある。天晴れな子供だ。』

龍馬は、心から感じ入つた。

・

『さア、さつきの問題、藩の今後についての御意見は……？』

檜垣は、話を元に戻してきいた。

『さうだな。雨降つて地固るとゆけば結構ぢやが……』

龍馬は相變らずの調子である。

『いや、確乎として建てるべき、今後の方針ですよ。』

安岡は、突っ込むやうにいつた。

『困つたなア。しかし、これだけのことは申してもよからうな。公武一和といひ、勤王討幕といひ、佐幕開國といひ、時代を進める齒車の廻り方が、亂れがちではあるが、だん〳〵急調になつて來たことは爭はれんな。そこで、われ〳〵は、――いや、諸君は、かうして、攝海防備の爲に日夜辛勞してござる。これは、何も幕府の爲でもなければ、もちろん、土州や、薩長の爲でもない。草莽の臣民が、皇國を護る爲にやつてゐることだ。これが臣民の道だ。われ〳〵の進むべき道は、これより外には斷じてないわけだ。だから、この炳乎たる道に照らして、邪魔になるものは、片づけて行かねばならん。わしは、唯、かう簡單に考へちよる。』

茫漠として、つかみどころのないやうな話に、二人は、又しても顏を見合はせた。

『然らば、伏見事件に加擔してゐる筈の義擧の面々に對しては、贊成なさるか。』

檜垣が、勢ひよく質問した。

『おんし等は、どうなんぢや。ハハハ……』

『國からの知らせによりますと、どうやら勤王黨の天下になるらしいです。吉田參政の一派は退けられて、小南五郎衞門殿が返り咲きで、武市先生の進言は盡く容れられざるなしといふこと

です。』

安岡は、ひどく興奮してゐる。

『しかし、市原八郎衞門一派の守舊派の向背が分らんが……』

檜垣が、捻ぢこむやうにいつた。

『いや、澎湃たる時代の波濤は拒ぎきれんから、これから小波瀾は、度々くりかへされようが、やがては、行くべきところへ行きつくよ。だから、その大眼目を忘れないで、一波一瀾に一喜一憂してゐてはいかん。』

龍馬は、力をこめていつて、

『わしは、兎に角、京都へ急ぐことにしよう。伏見の一件は、既に大事去つたかと思はれるが、眞相を知つておく必要がある。吉村、宮地の安否も知りたい。こつちへは寄つて行かなかつたかな。』

『いや、やつて來ました。』

檜垣は、待つてゐたといはんばかりで、當時の模樣を語り出した。

吉村と宮地は、義擧に加はるべく長州方面から上阪した時は、住吉陣所を訪問し、『島津久光公は、江戸へ下ると稱してゐるが、實は、內勅を奉じて、日ならず入京し、所司代酒井若狹守を排斥し、勤王の大義を天下に唱へんとしてゐる。自分儀は脫藩の身ではあるが、舊誼を重んじて、かくは、報告に及ぶ次第である。既に六百に餘る志士浪士は、京攝の間に集つて來つゝある。一體、住吉陣所の諸君は、この期に及んで如何進退なされる所存か。』と、質問したのだつたが、こちらは劍もほろゝのあいさつで擊退してしまつたのである。

それのみか、脫藩の身をもつて、不行屆至極だ。早々に召捕るべしといふことになつて、翌朝、宿屋へ捕縛に向つたところが、前夜のうちに密告したものでもあつたのか、吉村は、塀をとび越えて逃げ去つた後であることが分つた。それきりで、一切不明だといふのである。

『ぢや、わしも、危ないとこぢやな。』

龍馬は、苦が〳〵しげにつぶやいた。

『……われ〳〵の志ではなかつたが、如何ともし難かつたのです。』

安岡は、嘆息と共にいつた。

『那須信吾たちの行方は分らぬかな。』

『吉田參政の下手人が、住吉陣所へのこ〳〵顏を出す筈はありません。』

安岡は、龍馬の呑氣(のんき)な口吻に笑ひ出した。

『さうか。なる程・・・・』

龍馬は、苦笑しながらいつたが、ぽん〳〵と袴の膝を拂つて起ち上つた。

『おゝ、坂本さん、大石彌太郎が江戸からのかへりに河原町の宿で、病氣して寢こんでゐるといひますぜ。』

檜垣が、ふつと、思ひ出したやうにいつた。

『ほう、大石君が、それは、可哀相に・・・・。京都へ行けば、どうさり友達はゐるな。』

『しかし、道中くれ〴〵も警戒が必要ですぞ。』

『河船は、關所がどつさりあつていかんでせう。』

二人は、親情をもつて見送つた。

香美郡の鄕士大石彌太郎は、藩命によつて、砲術修業の爲に江戸へ行き、勝麟太郎の門に學んでゐた筈である。龍馬は、それを思ひ出すと、無暗と早く會ひたくなつた。

八軒屋から船に乘ることを斷念した龍馬は、路を淀川堤にとつた。初夏の川風に葭(よし)の茂みがそよぎ、よしきりがとび立つ風情は、如何にも快いが、ちよつと茶店へ寄つても、迂散くさい人間がゐたりするので油斷は出來ぬ。

だが、幸ひなことには、途中から道づれになつた宇治の茶商人から、伏見一件のあらましをきくことが出來た。

何でも數十人といふ浪士の一隊が幾組にも別れて、刀槍や、鐵砲を菰包みにして船で運び、伏見の寺田屋へ集り、密議を凝らしてゐるところを、密告するものがあつて、島津公には事前に鎭撫すべしとの命令で、奈良原喜八郎等腕利き八人が押しかけたところ、上意に從はぬので、有馬新七等六人を斬つてすてるといふ慘事を演じ、餘累は、ぞく〳〵と召捕られてゐるといふのであつた。

龍馬は、それ程の大事件とは思つてゐなかつたので、驚きを新たにし、吉村や、宮地もどうせ無事ではあるまいと思ふと、うはべは平靜を裝つてはゐても氣が氣ぢやなかつた。

疑つて見れば、この茶商人も伏見町奉行あたりの放つてゐる探偵ではないかといふ氣もする。

いや、ずつと後方から見えかくれに踉(つ)いて來る奴も、どうやら、うさん臭(くさ)い。

『あんたは、矢張、京都へ……？』

茶商人が、横合から、ぢろ〳〵と見てゐる眼が小狡るさうに光つてゐる。

『はア、その友達が江戸からの戻りに病ひついて居るのでね。見舞ひやら、介抱やらで……』

『物騒な時に御苦勞ぢやな。』

『何に、わたしのやうな伊豫の田舍侍には、天下の大事は何のかゝはり合ひもありませんからな。』

『いや、さうでもないて。この先の淀では見張りがきびしいといふ評判ぢやぜ。』

『では、橋本から山崎の方へ出ますかな。』

『さてな？　これから男山八幡へ參拜して、わしと一緒に宇治へお出なすつたら……』

『そりやいゝですな。茶畑の眺めがいゝでせう。きれいなねえさんの茶摘み歌でもきければいゝな。それから、平等院、鳳凰堂……』

『なか〳〵詳しいね。』

『いや、話にきいたことばかりで……』

龍馬は、から〳〵と笑つた。

するうち、傍らの農家から呼びかけるものがあつて、商人は、そちらへ行つてしまつたので、龍馬は、この時をとばかりに、すた〳〵と歩みを早めた。

後ろからついて來てゐた筈の男も、いつの間にか見えなくなつてゐた。

『伏見の一件が噂の通りだとすると、土州勤王黨も糠よろこびになりはしないだらうか。寵臣吉田の横死をきかれたら、江戸の容堂公の逆鱗は、どんなものか計り知れない。惡くすると、安政の獄を小さくしたやうなことが高知城下に起らぬとも限らぬ。ところで、一方、島津久光公が義擧の一味に思ひきつた彈壓を加へたとなると、とても、長州の連中は承服しまい。久坂等の激昂が思ひやられる。これで、薩長の同志の間にもひゞが入るかも知れぬ。』

龍馬は、一人になると、次ぎ〳〵とこんな風に考へるのであつた。

龍馬は、とうとう山崎の方へ進んだが、そつちにも怪しい人間がうろついてゐるのが、ちよいちよいと眼についた。野良犬までが吠えたてる。しかし、激動の巷へ一歩々々近づいて行く氣持は、何ともいへぬ緊張したもので、決して、わるいものではなかつた。

病友の宿で

『どうぢや、お加減は……？』

かう言葉をかけながら、河原町の宿にゐる大石彌太郎の部屋へ這入つて來たのは、澤村總之亟であつた。

『もう大丈夫ぢや、酒も少々はいけるやうになつた。』

大石は、元氣に答へた。

茶碗にうつした煎藥が、盆の上にほこりを浮べたまゝ薄茶色におどんでゐる。

澤村は、公家河鰭家の青侍となり、名も大河原刑部と變へてゐるだけに、身なりもさつぱりとして、龍馬と一緒に脱藩した時とは別人のやうになつてゐる。

大石は、江戸から歸り途で風邪をこぢらせ、寢こんだわけだが、可なり永い熱の患ひで、窶れてはゐるが、もう眼の色にも健康さうな光をとりかへしてゐた。だが、寢床は、敷きつ放しで、その上に瘠せた膝を抱へて坐つてゐる。

『無理をしないやうにな。』

澤村は、友情をこめていつて、

『時に、那須信吾の噂をきいて來た。』

と、聲を潜めて囁いた。

『ほう、さうか。』

『何でも、吉田東洋の首をとつて同志にわたすと、その場から逐電して三田尻へとび、それからこちらへやつて來たらしいが、久坂玄瑞等が來てゐるので賴つて行つて、暫らく長州屋敷にもぐつてゐたが、詮議がきびしくなつたので、今度は、薩摩屋敷へ移つて無事でゐるさうな。』

『さうすると、今度の寺田屋一件とは、どういふ關係になるのかな。』

『さうだな。薩摩屋敷では、どうごまかしてゐるのかな。吉村、宮地は伏見へはおくれてかけつけた組だから、まんまと艮にかゝつて、體よくこちらへ引つ張られたさうだが、追つゝけ住吉陣屋へひきわたされるらしい。』

『さうか、龍馬がゐたら、矢張、ひつかゝつたかな。』

『さア……。さういへば龍馬先生、どこをどううろついてゐるのやら、のんき屋さんにもあきれるよ。』

『のんき屋もいゝが、今や、京都は政治の中心にならうとしてゐるのだ。龍馬なんかゞ飛躍するには持つて來いの潮時ではないかと思ふが……』

『わしも、さう思ふ。しかし、あの先生は、一體、何をしようと考へてゐるのか、ちよつと、凡慮には計り難いところがある。』

『武市と、そりが合はんからだらう。』

『そこもあるが、といつて墨龍先生にぶつつかつて行つて喧嘩をするわけでもないし……』

『うん、彼は、妥協の道を心得てゐるところがある。しかし、今に、何かやるだらう。でなければ脱藩の意味をなさんからな。』

夕刻近くなつたので、二人は、廻りを片づけて食事をいひつけ、序でに小酌の用意をも頼んだ時であつた。宿の小女がやつて來て、來客を傳へた。

『誰ぢや?』

大石が、うるささうに訊いた。

『背の高い、ちよつと風變りなお侍さんどす。』

『それだけぢや分らん。名をきいて來い。』

『それが、何べんきいても、さいたにやのせがれぢやといへば分るといやはるんどすえ。』

『お前のいふこともけつたいぢやが、耳がわるいのぢやないのか。』

『いゝえ……』

小女は、唯、ゑへら〳〵笑つてゐる。

『大石君!』

澤村は、何か悟り得たやうに歡んで、

『坂本に相違ない。通して貰はう。』

『何に、坂本か。』

『うん、さいたにやのせがれといや分るぢやないか。』

『なる程、本町の才谷屋のことか。』

『龍馬らしいことをいひ居るわい。』

澤村が、起つて廊下へ出ると、もう、のつし〳〵と龍馬がやつて來るところであつた。

『噂をすれば、影とやら……。しかし、いゝところであつた。』

澤村は、餘りの意外さに茫然となつたが、歡びの色は包みきれなかつた。

『いよう! 澤村さんか。こりや、どうも、すつかり見違へたぞ。』

『河鰭家の大河内刑部と申すもの。以後、氣をつけて貰ひたい。ハハハ……』

『青侍に化けるとは、おんしも凄いところがあるぞ。』

龍馬は、澤村の肩に手をかけて戯談をいつてゐると、部屋から大石が、『何をしとる？　早く顔を見せろやい！』と、怒鳴るのがきこゑた。

『大石君は、もういゝさうぢやな。住吉陣屋の安岡たちに會つてきいたのだが、――うむ、國元の騒ぎ、寺田屋の騒ぎ、みんなその時にきいた。』

龍馬は、口早に、いひながら、ぬつと這入つて來た。

『おゝ、坂本君、お久しぶりぢや。朋あり遠方より來たるとはこのことぢや。うれしいよ。――時に澤村君、矢張、警戒はするといゝぜ、な、たのむぞ。』

大石は、そわ〳〵と落ちつかず、

『酒は、まだか、行燈に灯も入れねば……』

と、病後の不自由さに、氣ばかりいらだててゐる。

『これは、御兩君！　お久しう、こんなうれしい奇遇は滅多にないことぢや。』

龍馬は、兩手をついてお辭儀をした。

『坂本君、一體どこをどう歩いて居られた？』

澤村は、ぐつと盃を干して獻した。

『旅の話は、いろ〳〵あるが後廻しぢや。ところで、平井の加尾子さんには會つてくれたか。』

龍馬は、氣になるらしく訊いた。

『その經緯も何れ後刻としませうかい。いろ〳〵世話にはなつた。』

『さうか、それさへ聞けば安心だ。』

『龍馬さんは、顔を出さぬ方がよささうだ。』

『三條家へか。勿論、わしは、そんな資格はないからのう。平井隈山にもわるいから……』

龍馬は、しかし、何となくわびしさうな表情を浮べた。

三人は、獻しつ獻されつ天下の形勢の變化について語り合ふことになつた。

――寺田屋事變によつて一應志士の暴發を未前に封じ、煽動者と見られた西郷吉之助は無實の罪で退けられたが、島津久光は、今度の經驗によつて公武一和の開國論などは到底いかぬことを悟つたらしい。で、この際どうしても幕政に一大改革を加へ、朝權を伸張する名目の下に、攘夷

の實行は輕忽には出來ぬといふことを諷示するに止め、『公武合體、上下一致の上、異人の御取扱は天下の公論を以て永遠に貫徹すべき明制を定められ、皇威諸蠻に輝き候樣致度候事』といふ宣言によつて、勅命を奉じて江戸に下向する大原重德卿の一行に扈從して既に出發したといふのである。

こんなことも、澤村によつて語られた。

『中岡の光次がのう。ひどく憤慨して、短刀を懐ろに呑んで久光公をつけねらつたといふぢやないか。』

大石が、口を入れた。

『ほう、あの庄屋どんがか。あれのやりさうなことだ。中岡がゐるなら、他の同志とも一度顏合はせをしたいもんだが……。わしが、あれに會つたら、もつと、氣永に考へて、島津公を殺すより、利用せいと敎へちやるのぢやつたが……』

龍馬は、したり顏にいつた。

『それもよからう。』

澤村は、合槌を打つたが、

『大石君から江戸の話でも、うんと聞いておいたらどうぢや。』

『さうとも！』

龍馬は、氣のりのした調子で、

『おんしは、砲術修業ぢやさうなが、勝麟太郎に就かれたのか。』

『勝麟太郎は、確かに、講武所砲術指南役にはなつてゐる。しかし、本當は、名目だけぢやないかな。わしは、いつか、あれが勝先生ぢやと敎へられて、ちらと姿を見たことはあるが、大變な海軍擴張論者で、大がゝりな國防計畫を目論んで、六つの艦隊をつくらうといふわけだから、途徹もない企てらしい。』

大石は、とろんとした眼をして、どもり〳〵いつた。病後の身體に、相當酒が利いたらしく、息苦しさうである。

『しかし、それは誰がつくるのかな。まさか、幕府の力でつくれるとは思つてゐまい。』

龍馬は、ぐん〳〵とひきつけられるのを覺えた。

『まだ、そこまでは考へてゐないのではないかな。』

默つてきいてゐた澤村が、龍馬の膝をたゝいて、

『龍馬先生の考へさうなことぢやないか。』

『いや、違ふ！　わしは、幕府をそのまゝにして置いて、艦隊をつくつたつて仕様がないと思ふ。これを、薩州一藩、長州一藩と變へて見たところで矢張同じわけになるが、勝のいふのは、體のいゝ開港條約の擁護論ぢやないかな。』

『海軍建設論をたてゝごまかさうとしてゐるわけか。』

澤村は、皮肉にいつた。

『何といふても、勝先生は、二ノ丸留守居格軍艦操練所頭取とかいふんだからな。いや、今ぢや、軍艦奉行ぢやつたかな。』

大石が、思ひ出し〳〵いつた。

『勝は、メリケンまで船で行つたこともある御仁ぢやが、幕臣の立場から、すべてをいふのであつたら、眉に唾をつけてきかねばならんと思ふな。』

龍馬は、不信の語氣でいつたが、

『わしらの手で、海軍がつくれんかな。土州は、海の國ぢやからな。』

龍馬が、何か思ひつめて考へこんでゐるらしいのに構はず、大石は、ひとりで江戸での見聞を

語りつゞけた。和宮様御降嫁の際の騒ぎや、安藤對島守が坂下門で襲はれた時の動搖や、つぎつぎと話題は果てしがないのである。

『わしも、いつそ、大原勅使の後を追ふて江戸へ行けばよかつた！』

龍馬は、突然、殘念さうにいつた。

二人は、あまり突拍子もないことなので、びつくりして、その顔を眺めた。

『いや、矢張、京都に踏み止まることにするか。』

直ぐ、龍馬は、打ち消すやうなことをいつた。

『坂本君！　今日入浴したばかりで、何をいふてゐるのぢや。』

澤村は、むきになつてなじつた。

『何か、夢でも描いてゐるのぢやないか。』

大石は、むしろ、これが龍馬の愛嬌のやうに思はれた。

『わしを殘しておいて逐電すると承知出來ないぞ。』

澤村は、戯談に怒り出した。

『……御免！　御免よ。わしは、悪るい氣でいつたのぢやない。一つ勝安房守に會つて、大論判

をやつて見たうなつたからぢやよ。ハハハハ……』

龍馬は、わざと慇懃に盃を澤村に獻し、

『まア、怒るなよ。いざ、これからが拙者の旅の物語の始まりぢや。隨分、面白いことがあつたよ。長州、九州、中國筋を跨にかけ、住吉では、うつかり陣所に囚はれるところだつたぜ。淀川堤にはゴマのハイに……』

『ゴマのハイに……？　そんな盗まれるものでもつてゐたのか。』

澤村が冷かした。

『今に見せちやる。實は、刀の緣頭をはぎとられた。ハハハハ……』

龍馬は、またしても、ひとりで笑ひを爆發させるのであつた。

第三章

恩人の遺族

いさやこら劍とりはきあづさ弓
靫取り負て京にやゆかん
—久坂　玄瑞—

東山一體は、濛々たる煙雨にこめられて、まるで、破墨山水畫そつくりであつた。新綠は過ぎて、やゝ黑ずんで來たが、雨に洗はれた木々の若葉の色は眼の底まで沁みるやうに鮮やかであつた。

加茂川べりを蛇の目をさして歩いて來ると、綠髮のやうな柳の枝が風に飜つて、傘の上をばさりと撫でゝは生きものゝやうに刎ねる。

龍馬は、旅の汗と垢にまみれた身裝を改め、身體もきれいに淨めたので、昨日までの風來坊とは、まるで變つてゐた。

つい、眼の先をツーイ〳〵と燕が掠めて飛んだ。舞ひ上りさま見事な宙返りをやつてゐる。何を見ても、快く雅びた眺めであると、龍馬は感心するのである。この京都が、時代の嵐の中心にならうとしてゐるとは、どうしても考へられないやうな風趣であつた。

いつの間にか、東洞院錦小路の方へ來かゝつてゐたのに氣づいたが、薩摩屋敷へ行くのでなかつたと思ひかへし、少し足を早めて、柳馬場三條下る楢崎將作の舊邸のある方へと向つた。

來て見れば、外觀にも何かよそ〳〵しいものが感じられ。前栽の老松のみがありし昔を語り顏に仰がれた。

楢崎は、一介の町醫者に過ぎなかつたが、勤王の志深く、梅田雲濱や、頼三樹三郎等の志士との交りもあつて、自然出入りしてゐる公卿との仲介者ともなり、水戸藩士との間にも默契があつた嫌疑で、井伊大老の彈壓にひつかゝり、ひかれたまゝ空しく恨みを呑んで牢死を遂げたのであつた。

さうなれば、一家は沒落の運命を辿るより外はない。勤王浪士の爲にも可なり產を傾けてゐたらうし、幕府のお咎めをうけた人の遺族とあつては、大抵の人は、自然とうと〳〵しくなつてしまふのが世間であつた。同志といへば、みな同じ境遇につき落とされた人が多いのだから救はう

にも手だてはなかつた。

龍馬始め土州の諸生たちは、隨分厄介になつたものである。好んで青年を迎へた楢崎は、江戸への往きかへりに訪ねる龍馬をひきとめて、特に目をかけてくれたものであつた。

去年、京都へ來た時は、まだ、舊邸に遺族は住んでゐたが、隨分、窮してゐるのを見かねて、龍馬は、なけなしの財布をはたいて若干金を贈つたが、その後は、どうしたであらう？　いや、移轉先は心當りで調べて來て分つてゐるのだが、龍馬は、ずつと、その方へ行かないで、何かにひき寄せられるやうな心持で、つい、ふら〳〵と舊邸の前へと來てしまつたのである。

楢崎先生の御魂が、まだ、この家にとゞまつてゐてひきよせたのかも知れないと、迷信嫌ひの龍馬にも、何故だか、そんな氣がしてならないのである。

立ち去り難い氣持をふりきつて、龍馬は、そこをはなれて、今、楢崎の遺族が住居してゐる粟田青蓮院の末寺である知足院を指して行きかけたのであつた。

楢崎の未亡人と娘や子供たちは、恩を仇にかへす不屆者や、弱味につけこむ惡漢の爲に、だまされたり、掠められたりして、とうとうやりきれなくなり、知足院の境內にある寺男のゐたあばら家にうつりみぢめなその日ぐらしをつゞけてゐる。遺族のものは一時、楢崎の友人で丹波の加

藤省吾といふ人にひきとられてゐたが、その弟がこの知足院の住職なので、今は、こゝへ佗び住居を移してゐるのであつた。

末つ兒の五歳になる太次郎は、ある御寺へ預けられ、十五歳になるおとみは他家に頼り、十九歳になつた太一郎は、大切な世嗣ぎであるが、意志が弱くて、のらくらして居り、近頃では、やけ氣味にでもなつたのか、殆ど家をあけて友達の家などをわたり歩いてゐる有様であつた。

だから、母親のお貞とくらしを共にしてゐるのは、總領娘のお龍と、十一歳の君江のみである。お龍は、いつか二十二歳の娘盛りになつたが、茶の湯だの、活花だの、お琴だのといつた遊藝三昧の昔の榮華からはぷつゝり縁をきつて、お針の賃仕事もやれば、すゝぎ洗濯もやるといふ健氣さ、母に代つて金策にも出かければ、他人との應待も自分でやるといつた調子で、生來の才氣と、男まさりの氣性から、一家の柱のやうな役目をつとめてゐるのであつた。しかし、育ちは爭はれないもので、お俠な町娘のやうには見えるが、どこかに自づと備はる品位と、教養は十分に感じられた。

龍馬は、さうした遺族の人々の面影を一人々々まぼろしに描きながら、珍らしくしみ〴〵した氣持になつて、歩一歩、さびしい通りを知足院へと近づきつゝあるのであつた。

庫裡の裏手にある佗住居は、古ぼけた小屋に手を入れたもので、玄關もなければ、表からすぐ鍋釜のおかれた臺所が見られようといふ殺風景なものであつた。

とつゝきの一室の濡れ縁から、直ぐ石の多い庭に面してゐた。そこから客など出入りするやうになつてゐた。

未亡人のお貞は、氣分がすぐれぬといつて、次ぎの間にふせつて居り、お龍一人が座敷に一ぱいひき散らかして、手おくれの夏物の整理などしてゐた。

さすがにお龍は、身嗜みだけは忘れないで、一絲亂れぬ高島田に結ひあげて、紫がゝつた袷は、相當いたんでゐるけれど、きちんと着こなして居り、色はくつきりと白く、きれ長の眼はぱつちりと涼しく、口許には、勝氣らしいしまりを見せてゐる。京育ちとしては、氣性の然らしめるものか、起居や、仕草にもテキパキとしたところが認められた。

細雨にしつとりと濡れた石が、綠苔に蔽はれてゐるが、そこに同じ色の雨蛙が一疋ゐて、ぴよんととんでは傍らの海棠の枝に這ひあがつて行く。

ふと、塀際の竹林の影が音をたてゝ揺れ、婆娑と落ちたやうな氣配がすると、聽いお龍は、ひよいと物尺をもつ手をとめて、

『誰か來たやうだわ。』

と、つぶやき、ぱつちりと睜つた眼を向けた。

それは誰かゞ庭石を傳つて來る下駄の音であつた。

やがて、お龍の視線の中に、雨傘が現はれ、その傘が心持ち片方に傾ぐと、そこに逞しい一個の偉丈夫の姿が、まるで、舞臺に出て來た役者のやうに、ぬッと眼の前一ぱいになつたのである。

『あ、坂本さん！』

お龍は、物尺も、布地も一ぺんに投り出して、

『お母さん、お珍らしい方が……』

と、頓狂に叫んだ。

龍馬は、にやりと笑つて、眼顔であいさつしながら、敢て、近づかうともしないで、少し、はにかんでゐる表情である。

お貞も、娘の聲に驚いて、がさ〳〵と這ひ出して來た。そして、龍馬であることを確めると、

『これは〳〵本當にお珍らしい。さア、どうぞこちらへ……』

と、はしやいでいつた。

座蒲團だ、お茶だといつて騷ぐ中を、お龍は、瞬く間にちらかつた物をきれいにとり片づけ、わざと、おづ〳〵と緣側へ寄つて來る龍馬に向つて兩手をついてあいさつをした。

『いや、御無沙汰ばかりで恐縮です。皆樣御變りもなくて祝着の到りです。わたくし、やつと兩三日前に參りましたやうな次第で……』

龍馬は、かうあいさつをしてから、刀を脫して座敷へあがつた。

『よくお訪ね下さいました。近來は、もう昔お馴染みの方は、どなたもお出でになりませんし、世の中は、騷がしくなる一方で、本當に心細くなるばかりでございますよ。』

お貞は、なつかしげに、龍馬を眺めながら、早や眼には一ぱい涙をためてゐる。

『……また、お母さんのおはこが始まつたわ。』

お龍は、上氣した頰を、いよ〳〵赧らめながら、かういつてお茶を淹れなどする。

『お嬢さん、大きくなつたなア、去年とは又格別……』

『あら、一年たてば、誰だつて、一つ年をとるわけですわ。ホホ……』
『坂本さん、この娘はもう二十二ですよ。』
『お母さん、餘計なことおつしやらないでもいゝでせう。』
『坂本さん、ちと大きくなり過ぎましてな。』
『さうですかなア。わたくしは、まだ十九か二十位と思つてゐたんですが。全く、それ位にしか見えませんよ。』
『ほら、何か御馳走でもしなければ……』
『ハイ、ハイ……』
お龍は、白い眼をする。
『皆さん、今日はお留守なんですか。』
龍馬は、あまりにひつそりしてゐるのに氣づいて、あたりを見廻しながら訊いた。
『今に君江が歸つて參りませう。』
お龍は、かういつて、又立つてゆく。
お貞ははしやぎ、お龍はそわ〳〵して、ちめ〳〵と陰氣だつた日陰の佗住居も、急に陽氣になり、明るくなつて來た。

少し落ちついて來ると、お貞は越し方、行く末のことについて、ぼそ〳〵と話し初めた。龍馬は、老人の愚痴だから無理もないと同情して、神妙にきいてやる。
ふと、傍に默つて坐つてゐたお龍に氣づくと、龍馬は、矢張、年だけのことはあるなと思ふ。急に女らしく幅も出來て來たし、苦勞したせいか、以前の小娘らしいところはどこかへ消えてしまつたやうである。そして、勝氣なところが、急に、劍のある表情となつてちらつくが、それらを蔽ふて餘りある成熟しきつた女性の豐麗さも、ずつと眼について來た。
『……お龍さん！　わたくしが國許を出發いたします際、姉がくれ〴〵もあなたによろしくお傳へしてくれと申しました。これだけは、忘れぬうちに申しあげておきます。』
龍馬は、如何にも眞實のこもつた調子でいつた
伏眼がちに、默つてゐたお龍は、はツと彈かれたやうに顏をあげ、
『まア、坂本さんのお姉樣が、どうしてわたくしのことを御存じなんでせう？』
と、くる〳〵とよく動く瞳を輝かせる。
『そりや、あなたのお噂は、國の奴でこちらの先生や奥樣に御厄介になつたものがどつさりゐる

筈ですから、誰からでもきいてゐますよ。』

『おや〳〵、お前さんはしやはせものだね。』

お貞は、何をきいてもうれしいらしい。

『でも、わたくしなんかのことを……？』

『まア、いゝぢやありませんか。天下に名が知れわたるといふことは悪いものぢやありません。ハハハ……』

『まア、天下だつて、御戯談ばつかり……』

お龍は、思はず、子供の時のやうに、手をあげて打つ眞似をしかけて、はッとしてひつとめた。

『いや、以前にははよくあなたにからかはれましたね。坂本さんは、袴の膝をぴか〳〵させてゐるのは、洟をこすりつけるからだらうなんて嫌がらせをいはれたもんでした。』

『本當に、この娘は、お轉婆でしたからね。』

『そんなに、わたくし一人を眼の敵になさらなくつてもいゝぢやありませんか。』

お龍は、昔の無邪氣さにかへれたうれしさに、やつと、隔てのない口が利け出した。

すつかり元氣づいたお貞は、さつきまでの身體の不加減なんかけろりと忘れたもの〻やうに、

『坂本さんの好物のしやものすき燒きでもして食べて頂きませうよ。お酒も上等のをとつてね。』

と、そゝくさと買ひ物に出かけてしまつた。

龍馬が、ひきとめる聲など、てんで耳に入れようとはしなかつた。

『……今度は、こちらに暫らく御逗留ですか。』

お龍は、少し照れ氣味に、さゝやくやうにいつた。

『えゝ、さうしたいと思つてゐます。』

『でも、こんなところに、とても、ぢつとしてはおいでになれないのでせう？』

『さうでもありません。わたくしもこれまでのやうに呑氣にしてはゐられませんよ。故先生の御恩に報ゆる爲にも、大いに奮鬪せねばならんと覺悟を定めて居るんです。だから、今度の旅では長州や、薩摩の同志を訪ねて來たやうなわけなんでして……』

『では、先日の伏見や何かの騒動にも御關係がおありなのですか。』

『いや、あの事件は、やつと大阪で知つたやうなわけですが、同志の中には行動を共にしたもの

はあるやうです。國許にもいろ〳〵事件は起つてゐるやうですし、どの道、わたくしなども、無事にはすむまいと思つて居りますが……』

『うんと、お働きになるといゝわ。わたくし男だつたら後から食つゝいて行くんですけれど……。ホホ……』

『男つていふと、あの弟さん、――太一郎さんは、どうなさいました？』

『あれは駄目なんです。意氣地なしで……。甘やかされて育つたからでせう。』

『しかし、女のあなたが、それ程の元氣があるんだから太一郎さんなんかは、大いに奮發しなければいけないですな。』

『坂本さん、弟を仕込んでやつて下さらない？』

『それは、ことによりましては……。しかし、わたくしのやうな風來坊は、いつどこへとんで行くか分りませんから、あてにはなりませんよ。然るべき先生について、みつちり勉强なさるのがいゝと思ひますな。』

『さうでせうか。でも、せめて、こちらにお出で遊ばす間だけでも……』

『ひよつとすると、わたくし江戸へ下るかも知れません。』

『では、江戸へ連れて行つて下さいよ。』

お龍は、眼の色を變へていつた。

いつしか雨はあがつて、夕陽の光が黄金色に射し、庭石の苔にあたつて、ちか〳〵と眩しい。

折柄、お貞がかへつて來たらしく、勝手元でごと〳〵してゐる物音がきこゑた。

お龍は、すぐ起つて行つた。

龍馬は、ふと、自分が脱藩をしてゐる危險な人間だといつたら、お龍たちは、どう思ふだらう？　それは兎に角、一風變つた女だから、平井の妹の加尾子にひき合はせ、いろ〳〵知慧をつけてやれば、ある働きが出來やしないかと考へたりする。

龍馬は、ぽつねんと腕を拱いて、そんな空想に耽つてゐた。所在なさに、ごくりと冷めた茶を飲みなどしながら。

するうち、裏口からでも這入つて來たのか、突然、少女の無邪氣で、滑らかな美しい話し聲がきこゑて來た。それは、どうやら君江らしい。

『坂本の小父さん知つてゐるでせう。御あいさつにいらつしやい。』

お貞の聲である。

『怖いものですか。面白いお話をして下さるわ。』

お龍がたしなめてゐる。

果して、君江であつた。次ぎの室との閾際に音もたてずやつて來た君江は、にや〳〵しながら兩手をついてお辭儀をしてゐる。

『おゝ、君江ちやんか。――今日は、久しぶりでしたね。』

龍馬は、あふれるやうな溫情を見せていつた。

『小父さん、又、いつかのお話をして頂戴！』

君江は、お龍に敎へられたらしく、はにかみながらも、ハキ〳〵と口を利いた。

『……何のお話でしたかな？』

『テングタイジのお話……』

『あ、天狗退治、よく覺えてゐましたね。ハハハ……』

それは、龍馬が少年の頃、『天狗の使ひ』と稱する怪行者が高知へやつて來て、人々をまどはしてゐたので、その假面をひつ剝いで、多くの被害者を救つたといふ龍馬の武勇傳であり、自慢話の一つなのであつた。

勝手の方からは、二人の高らかな笑ひ聲がきこえて來た。

だん〳〵とこちらへ膝を進めて來る君江の顏を見ると、これは少女ながら典型的京美人の素質らしく、にほやかで、品高く、皮膚を透して、眩しいやうな麗しさが現はれてゐる。

『さア、そろ〳〵お話を始めようかね。』

龍馬は、改まつて居住居をなほしたが、昔のやうな氣持で、そんな馬鹿くさいことを語り出す氣にはなれなかつた。

愚圖〳〵してゐるうちに、御馳走の支度が出來たといつて、お龍が、いそ〳〵と焜爐や、杯盤などを運んで來た。お貞も手を拭きながら出て來た。

何となく、なごやかな家庭のやうな空氣である。母のない、又、妹の味を知らない末つ兒に育つた龍馬は、かういふ雰圍氣につゝまれて見ると、矯激で殺伐な仲間にもみつもまれつしてゐる中から、しばし、逃避してゐるやうななごやかさがしみ〴〵と感じられるのである。

やがて、お燗の出來た德利が、眼の前におかれた。

志士の會合

龍馬は、ひそかに長州屋敷に久坂玄瑞を訪ねて昨今の情勢を探らうと考へた矢先に、江戸から長藩の世嗣定廣の一行に從ふて、桂小五郎が入洛したことを聞き込んだ。

『どうもをかしいな。』

龍馬は、かうつぶやかずにゐられなかつた。

薩摩の久光公が大原勅使に扈從して、幕政の改革を行はうといふゑらい意氣ごみで東海道を下ると、その反對に長藩主慶親はまだ在府であるにしろ、世嗣公が慌しく反對の道をとつて京都にのぼつて來る。そこに何か双方に魂膽がありさうに思へるのだ。

しかも、毛利慶親は、公武一和、航海遠略の家臣長井雅楽を使つて朝幕の間を周旋させてゐるのに、久光は、家臣の暴發組を彈壓はしたが、慶親より一歩を進めて、幕政の改革にのり出したわけではないか。その爲に朝廷の御覺えも目出度く、聖上の御感斜めならず、建武の昔の忠臣兒島三郎高德の三郎をとつて、島津和泉（久光）に賜ふたとさへ洩れ承る。かうなると、慶親は、ちよつと、久光の爲に鼻をあかされた形になるわけだ。しかも、長州の下士階級の尊攘黨は、長井を仇敵視してゐるといふ。

先に、長井雅楽は、議奏三條實愛の手を經て毛利家上洛を望み給ふ御内勅をうけてゐたので、

慶親は、何をおいて上洛すべき筈なのを、久光が江戸についた後は、身分はとゞまつて世嗣公を上洛させたのだから、よほど久光の江戸に於ける行動を氣にしてゐるのに違ひない。いつて見れば、兩方の勢力の消長に關する暗鬪のやうな印象をうけるのである。

龍馬には、さういふ微妙な經緯がピーンと來てゐるので、ある夜、桂小五郎等の一味が東山の曙亭で會合してゐるのを嗅ぎつけると、わざと體よく大河内刑部實は澤村總之亟をひき具してのりこんで行つたのである。

桂とは江戸以來の知合であつたから、よく覺えてゐて快く會つてくれた。

『…桂さん！　暫らくでした。御健勝で何よりです。こちらは、三條家の大河内刑部と申す同志ですからよろしく……』

別室に通されて、桂一人が應接したわけだが、龍馬のやうな一介浪々の身とは違つて、長藩の大立物桂小五郎は、威儀を正し、堂々たる態度であつた。

『ようこそ…』

桂は、一揖して澤村の方をぢろりと見たが、山内家と三條家との間柄も知つて居れば、毛利家と山内家とは、姻戚の關係であるから、何の疑惧もあるわけはない。

『實は、宴席の方へお招きしたいのは山々ですが、唯今、同志協議中ですから、暫時、こちらで御猶豫を願ひたいのです。』

桂は、一室位隔てゝきこゑる談論の聲を氣にしながら、丁重にいつた。

『かしこまりました。今晩は、どういふ方々の御會合でせうか。むろん、久坂君は御出でゝせうな。後で、お取次ぎを願ひたいものです。』

龍馬は、ふと久坂らしい聲をきゝつけたのである。

『心得ました。久坂も歡ぶでせう。——貴殿故申し上げるのですが、福原乙之進、寺島忠三郎、堀眞五郎、野村和作などの面々の集會ですが。ハハ……』

『それは、お歴々揃ひで……』

龍馬は、氣輕にいつて、

『弊藩の同志のものが、先般來種々と御面倒をおかけしたさうですが、御一同に篤と御禮も申しあげたいと思ひましてな。』

『ようく傳へることにいたしませう。——義擧の挫折は如何にも無念ではあらうが、大局から申せば如何なものか、今のところは何ともいへますまい。』

桂は、冷たい微笑を唇邊に漂はせ、

『承るところによると、貴藩の吉村君等の密使の合圖によつて、久坂等は一隊を率ゐて二條城の北を指して所司代屋敷の襲擊に當り、他の一隊は浦靱負が率ゐて御所に走せつけ、禁門の御警備に當る手筈になつてゐたとか、——これは、野村和作からきいた話ですが、何しろ旺んなことですよ。』

桂には、ちよつと無謀の擧を皮肉くるやうな調子があつた。

『ほう、さういふ軍略であつたことは、初めて承ることで……』

『それは、わたくしも耳にして居りました。密約が洩れたのでせう。』

澤村が、靜かにいつた。

龍馬は、この桂の調子から察すると、長藩の青年志士の間にも、二派に別れて軋轢が始まらうとしてゐるのではあるまいかと察せられたので、

『桂さん！　一藩勤王の同盟が割れては困りものですが、さりとて、薩長の雄藩が相反目するやうなことになつてはいけませんぞ。これは、どうしても、あんたの御配慮を待たねばなりません。』

と、透かさず、きりこんだ。

『いや、それは、坂本君、貴殿の如き立役者が、適り役ではありませんか。貴藩の方も何とかして貰はねば、――ちよつとお待ち下さい。酒でも運ばせねば、話にも風情がありません。』

桂は、如才なくいつて、ついと立つて行つた。

龍馬は、慌てゝとめようとしたが、間に合はなかつたので、

『…桂小五郎！　彼の方がわしよりも相當な役者らしいぢやないか。』

と、澤村の方を向いて、浮き〳〵した調子でつぶやいた。

『うむ。鬼に角、大人だな。』

澤村が、考へ深さうにいふ。

『いや、あれで吉田松陰流の精神家でもあるんだ。――おゝ、又、大論判が始まつたらしいぞ。愉快〳〵、どうやら、長井雅樂討つべしの議論らしい。』

『遂に、吉田元吉の二の舞か。』

澤村も、全身を耳にしてきいてゐる。

そこへ、仲居が杯盤を運んで來た。

『これは〳〵恐れ入ります。』

龍馬は、飄輕な身振りで早速、手酌で盃につぎ澤村にも獻しながら、

『長州の志士連は、いよ〳〵攘夷に一決か。』

と、吐き出すやうにいつて、

『澤村君！　わしは矢張江戸へ下らうと思ふがどうぢや？』

『よく江戸々々といふな。』

澤村は、不服らしい。

『あの安政の開港條約以來、幕府は七八年か十年後の攘夷を朝廷にお約し奉つてゐる。しかし、外國を恐れ、内に信を失つた幕府に、その力はあるまい。だから、今後の幕閣有司その他の行動が見ものであり、監視する必要があるが、わしは、こちらの仲間うちで、がや〳〵騒いでゐるよりも、越前の松平春嶽侯その他の有力者に、腹臓のない意見を叩いて見たいのぢや。それに大石にきいてから、是非、勝麟太郎に會ふて見たうなつたな。彼の海軍主義もきゝたいが、一つ開國論をつきとめてやりたいと思ふ。開港か、攘夷かぢやない。攘夷卽開港とまでのして行くのでなければ、どだいなつちよらんからな。どうだ、わしのいふことは、腑に落ちぬかい？』

『うん、どうもちと何んだな。』

澤村は、眉をしかめて、一々反趣するやうに愼重にきいては、頭を傾げてゐたが、かうつぶやいた。

いつか、宴席が靜寂にかへつてゐるのに氣づいた。『こりや、桂に一ぱい食はされたかな！』との疑問を龍馬は抱かずにはゐられない。

ところが、のつし〳〵と足音がして、襖を開いたのは、久坂玄瑞であつた。

『おゝ……』

龍馬と澤村は、萩の城下で會見した間柄なので、無雜作なあいさつは、すぐすんでしまつた。

『……まことに恐縮ですが、桂は、世子公に扈從の身なので、この際は、謹愼いたし御遠慮申しあぐべきだと申して、他の一同と一緒にひきあげましたから、どうか、あしからず御諒承願ひます。』

久坂は、明晰な口上であつた。

『さうでしたか。それも止むを得ないことです。時に、高杉君は、まだですか。』

『まだです。清國上海に逗留中ですが、もう二三ケ月もすればかへりませう。どつか外國へ高とびするやうな風說もありましたが、さうでもなさゝうです。』

『うらやましい境涯ですな。』

高杉晉作は、江戸で航海術修業をしてゐた時に外國行のお暇を賜はつてゐたのである。

『いづれ高杉が歸國いたせば、外國の事情も相當分るかと思つてゐる次第です。――それはさうと貴藩では大變でしたな。』

『はい。丁度、わしらが脫走した後で、ぱつさりやつてくれましたわい。何事もかう行くと手がかゝらんで樂ですが……』

『坂本さんは、お人がわるい！』

『しかし、わしは、狡くて逃げたのぢやありませんぞ。後でみんなが龍馬までがあいそをつかして逃げ出すやうぢや、早くやらねばいかんといふ氣になるでせうからな。ハハハ……』

『そんなことといふと一層狡いことになるよ。』

澤村が、交ぜつかへした。

久坂は、まだ二十四五歲の若者だが、はつきりとした眼鼻立ちで、濃い眉と、ぱつちりとした

眼つきと、きりつとした厚い唇と、すべての造作が如何にもしつかりしてゐて、頼もしげに見える。

『ぢや、「春秋」の筆法を以つてすれば、坂本龍馬先生、吉田參政を誅すですか。ハハハ……』

久坂は、朗らかに笑つた。

『久坂君！　そろ〳〵嵐があつちでもこつちでも起り初めました。御藩にも、そろ〳〵その氣配が初まつたやうですな。』

龍馬は、探りを入れるやうな眼付をしていつた。

『さうですよ。とても無事には納りますまい。』

『ところで、わしは、吉村虎太郎や、那須信吾に會ひたいのですが、何とかうまく行きませんか。』

『僕は、薩摩屋敷に眞木和泉殿を訪ねましたからそれは……』

『さうですか。ぢや、わしらも何とかなるでせうな。』

『行つて御覽なさい。實は、かういふ僕も、今に吉村君や、那須君と同じ運命に陷るかも知れませんが……』

久坂の眉宇には、ちらつと殺氣が閃いた。

龍馬は、だん〳〵と切迫した氣運を察し、

『世嗣公初め桂さんの御入洛、――いろ〳〵と、お骨の折れることでせうな。』

『實を申すと、先に楢崎彌太郎その他三人を江戸表へ送りましてな、長井雅樂殿の非行を殿様の御前で演述させたり、京師の事情をも具さに報告させた爲なんです。さて、これからどうなるかです。』

久坂は、氣遣はしげに溜息を洩らした。

雨が降り出したらしい。その中を遊里のさんざめきが三味線の音と一緒に遠く近く傳はつて來て何ともいへぬ情趣に浸らせてくれる。

『久坂君！　もう時事論は止めて、一つお得意の詩吟を拜聽したいもんですな。』

『……所望！　所望！　全くいゝからなア。』

澤村は、小躍りするやうにいつて、久坂に盃をつきつけた。

『詩吟より、これはどうでせうな。抽作ですが……

あやめ草あやめもわかぬ五月雨、はれて夜すがら啼く聲に、妻戸おしあけ出て見れば、アレあの、山の端の、月が啼いたか杜鵑……

ものになつてゐますか。これで、夕暮れですよ。ハハハハッ……。』

いゝ聲であつた。節廻しもうまかつた。遠くから聞える三味線と、雨滴の合奏もふさはしかつた。すんなり立つてゐる美女の姿が、そこに浮んでゐるやうに思はれた。

二人は、感嘆して手をたゝいた。

『英雄閑日月ありですか。桂さんにしても、高杉君にしても、わけて久坂君、――實に多藝多才ですな。』

『そして、多情多恨か。』

澤村が、囃したてた。

吉田松陰に愛されて、その妹を妻にしてゐる久坂玄瑞は、双壁といはれる高杉晋作とは又違つた魅力の持主であつた。

父恩に哭く

洛西の妙心寺を訪ねた龍馬は、相變らず飄々乎として、寂びのある庭を逍遙してゐる。この古刹は、等持院や、仁和寺から南の方に當り、閑寂な一廓であつた。

めつきり夏めいて來た烈しい日射しが、一とし濃くなつた楓の若葉を、きら〳〵と燃えたゝせてゐる。

『ふーむ、こりやいゝ。こゝなら申し分あるまい。』

龍馬は、小手をかざし、眩しさうに眼を細めて見廻しながら獨語してゐる。

河原町の土州藩邸は、遊里や、歌舞の巷に接近してゐるから、藩主入京の日に備へる爲に恰好の場所を求める必要から、妙心寺あたりがよくはなからうかといふ話が、在京中の同志や、留守居の間に出て、龍馬は、大石等のたのみによつて窃かに下檢分にとやつて來たのであつた。

土州藩主の入京は容易ならざる事體の推移を物語つてゐるのであつた。

討幕攘夷へ！――今や、長州は、長井雅樂を排斥し、久坂等は、長井の後を追跡してゐるといふし、桂小五郎を初め、長州の在京諸士も、斷然攘夷説貫徹に邁進するといふ。

これは、意氣揚々として江戸に乘りこんだ島津久光を出しぬいて、その上を行かうといふ毛利慶親の急轉廻を語るものであつた。事實、慶親は、久光と江戸で會ふのを避けて、世嗣公の後を追ふて急遽道を中仙道にとつて入京したところ、上下に漲る討幕攘夷の盛んな勢ひに魂消てしまひ、初志をなげうつたらしい。そして、獨立して奉公の誠をお盡し申さんとの建白書を奉つたの

で、叡感斜めならずといふ、昨日に變る榮譽に輝く身となつたのである。

慶親と久光とのいたちごつこ！　果して、久光は、今後、どうして、自己の立場をつくらうとするのであらう？　意地づくから、長州派に反對をうつ恐れなしとしない。そこへ、又、土州は如何にして割りこんで面目を保たうと計るであらう？

こゝで、俄然、頭角を現はし來たつたのは、三條中納言實美である。まだ二十七歳の若き公卿の一人であり、これに反し、威望隆々として堂上を壓し、久光と行動を共にしてゐた公武合體の岩倉具視は、急に影が薄くなつてしまつたのである。

そこへ、中山大納言忠能卿が、主上の御内旨を奉じて、三條家に對し、土州藩主に上京せよとの御沙汰を下したのである。それで、これまで、因循決しなかつた豐範公は、江戸にある容堂公の意向如何にかゝはらず、いよ〳〵高知城を發することになつたのである。まだ、十七歳といふ若年の藩主のことだから、侍臣や、勤王黨の斡旋よろしきを得た結果であることはいふまでもあるまい。

かくて、龍馬の妙心寺出張となつたわけであるが、さればといつて、龍馬は、このまゝ京都に留つて、同志と共に劃策しようといふ腹もないのであつた。京阪の事情は、自分の神出鬼沒の活

動によつて分りつくしたといふ理由もある。澤村等にすべてをたのんでおけるといふことも一つの理由にはなる。だが、お龍たち一家のことも心配になり、離れがたい氣持も一方にはあるのである。更に、薩、長、土の角逐もすておき難い近き將來の大問題だから、止つてゐたいやうな氣もあつた。さうかと思ふと、脱藩と、嫌疑（吉田暗殺の）との爲に、うろついてゐてへまをやりたくないといふ考へも起る。そんな風に普通の人間と同樣に、惱みもし、迷ひもするわけなのだが、龍馬といふ男の眼は、矢張、先々の方ばかり凝視してゐて、時とすると、驀進せずには、或は漸進せずにはゐられない氣持に驅りたてられるのである。卽ち、今の龍馬は、只管に江戸へ江戸へと心を走せてゐるのであつた。

今も、そんなことを考へ耽りながら、妙心寺塔中大通院の前を離れようとして、ふと横合に人影の忍び寄るのを認めて、ふりかへると、

『どうして、こんなところへ！』

と、いつてびつくりして眼を睜（みは）つた。

『後をつけて來たのですわ。』

お龍であつた。前よりは、だん〳〵慣れ〳〵しくはなつてゐたにしても、これは意外であつた。

『油斷大敵！　これだから、いつ誰につけられてゐるか分つたものぢやない。』

龍馬は、不服げにいひながらも、なつかしさうに見守つた。

『……邪魔者が現はれて、うるさいと思つてお出でなんでせう？』

お龍は、すねたやうな表情をして、わざとうつ向いてしまふ。

『どういたしまして！　あんたならうれしいわけなんですがね。』

『お口先ばつかり……』

お龍は、よほど急いだものと見え、ほてる顏を長い袂であほいでゐる。眼はうるみ、唇は赤く燃え立つやうな色をしてゐる。

『お龍さん、一年か、半年したら江戸からかへつて來ます。いや、それより早いかも知れません。それまで何とかして辛棒してゐて下さい。微力ながら、わたくしも力になつてあげますから……』

龍馬は、眞情をこめていつた。もう、脫藩の身であることも、江戸へ下る決心であることも、すつかりうちあけてゐるのである。お龍は、澤村の手びきもあつて、三條家にゐる平井の妹の加尾子に、土州のものだと僞つて會つたのであつた。それは、忽ち、觀破されて、加尾子との間は

割に、うまく行つたらしいのである。しかし、加尾子が、しきりに龍馬のことをきくので、妙な嫉妬心が起り、度々あてつけがましいことをいつて困らせたが、龍馬が江戸へ行く決心をうちあけると、別れるのはかなしかつたが、加尾子と遠ざかることに、何か知ら、一と安心を覺えたらしかつた。

しかし、今日、わざ〳〵後をつけて來たところを見ると、たえず、龍馬の身邊を監視してゐたい氣持が働いてゐるのかも知れないのである。

龍馬の親切な言葉をきくと、さすがに、お龍は、涙ぐんで、

『ありがたうございます。大丈夫ですわ。そのうち妹達も何とかなるでせうから……』

と、眼をしばたゝいた。

『あんたは、しつかりしてゐるから、その點は安心ですがね。』

『えゝ、自分では、しつかりしてゐるつもりですわ。世の中を恐れてゐたら駄目だと思つてゐますから……』

『さうでなければいけませんね。その癖、加尾子さんのことを氣にするなんて、あれは、どうもお龍さんらしくない醜體だつたな。』

『でも・・・』

『あの女は、わたくしが、泣き蟲だの、洟垂れだのといつてからかはれてゐた頃の幼な馴染の友達の妹ぢやないですか。』

『あら、坂本さんは、そんなに泣き蟲だつたのですか。』

『えゝ、さうですつてさ。』

『まア、不思議ね。』

お龍は、くすぐつたさをこらへる氣持で、しげ〳〵と龍馬の顏を穴のあくほど眺めてゐる。

『どうです。わたくしの顏に泣きぼくろでも探してゐるのですか。』

『いゝえ、――運勢のいゝぼくろ、人情に厚いぼくろと、それから男らしい・・・ホホホ・・・』

『いやだなア、そんなに人のぼくろを數へちや・・・』

箒木を提げた納所が、變な顏をしてぢろ〳〵見ながらすぐ二人の傍を通り過ぎた。

『あ、忘れてゐました。那須信吾さんのかくれ家を澤村さんからきいて參りましたの。』

お龍は、坊主を白眼で見送りながら、慌てゝいつた。

『そりやよかつた。ありがたう！』

『わたくし、そのことをお知らせしたくて來たのに、すつかり忘れてしまつて・・・』

『ぢや、これから參ることにしませう。』

お龍は、こつくりうなづいて、住所書きを手渡したが、直ぐ、お辭儀をして、ぱた〳〵とひとりで行きかけた。

『お龍さん！　どうしたんです。そこまで一緒に行つては・・・？』

『だつて、きまりがわるいんですもの。』

お龍は、そのまゝ小走りにかけ出してしまつた。

龍馬は、あつ氣にとられてゐたが、大跨に歩いて後を追ふと、お龍は、巧みな足どりで、とんとんと石段を降りて行くところで、ふりかへりもしないのであつた。

吉田東洋を倒して亡命した那須信吾は、今、薩摩屋敷の近くのかくれ家に潜伏してゐるのであつた。

そこへ、龍馬はこつそりと訪ねて行つたのである。

『いよう、これは〳〵……』

那須は、日蔭の身となつて、顏色は蒼ざめ、髯は蓬々とのび、まるで、獄囚のやうな風貌に變つてゐた。しかし、稜々たる氣骨は、その爲に一層鋭くむきだしになつて、聲にも鏗々と響くやうな力があつた。

『どうもすまなんだ。わしは、薩摩の諸公とはあまり近づきがないので、つい、訪ねることが出來なかつた。――樗原村の貴公の宅に厄介になつて以來だが、後の烏が先になるとは、おんしのことぢやらうな。』

『そんなことは、どうでもいゝよ。いつの間にか、長州派が、すつかり勢力を張つたといふぢやないか。』

『うん……』

『土州藩は、どうしてゐる？　一向はき〳〵せんのう。』

『いや、殿樣も、いよ〳〵御上洛と定つたやうだ。それで、今日は、諸隊の宿舍に妙心寺へ下檢分に行つて來たわけだ。』

『何でも、まめにやるのう。』

『妙心寺は、わしの見たところでは及第だな。位置もいゝし、境内は廣いし、墻壁も高いと來てゐるからのう。』

『さうか、しかし、江戸にござる老公（容堂）の心境は、相變らずぢやらうが……』

『それも、わしは江戸へ出て探つちやるつもりだ。』

『ふーん、江戸へ行くのか。』

『いゝだらう。こちらのことは、瑞山あり、隈山あり、貴公あり、多士儕々で敢て龍馬輩を要せんぢやらうと思ふ。』

『おれは、あくまで討幕と攘夷で行くぞ。既に、中山卿御兄弟から御内々の御沙汰もおうけしてゐる。事前に挫折した同志も腕を扼して待ち構へてゐる。――坂本、おんしは行くなら敢然と去れ。その代り、江戸で大いにやつてくれよ。』

那須は、さつぱりとあきらめがよかつた。國許で、龍馬の脫藩行をよろこんで見送つたやうに、今、又、淡々たる氣持で江戸行を見送らうとしてゐるのである。那須は、吉田東洋暗殺の始末を語り出すと、沈痛な表情になり、言葉も、さすがに吃つた。河野萬壽彌の筆になつた吉田誅殺の罰文には、政見の相違によるものであることを明記しなかつたのは、藩主に累を及ぼす恐れがあ

るのを避けた爲で、苦心の存する所以であることを語つた。

龍馬は、那須の切々として語る述懐にひどく心をうたれた。親を、妻を、二人の子供を捨てゝおいて大義に殉ぜんとする那須の純情で、悲壯で、激烈な精神には、火の玉のやうな力が感じられるのであつた。

龍馬も、ほろりとなつた。そして、

『家郷の便りはないか。』

と、しみ〴〵とした氣持で訊いた。

『おい、坂本！　おれは、國のをやぢの自慢がしたいよ。おやぢは、ゑらい人ぢやよ。』

那須は、潛然たる體で、

『貴公も知つての通り、おれは養子の身で、散々、わがまゝを働いて來て、今度の事件も何一つうちあけずにやつて來たぢやらう。おれは、心の中で、ほんとに〳〵相すまぬと、日夜忘れる暇もなく、親ごにはあやまつてゐた。ところが、そのおやぢさまがあきらめてくれたばかりか、——おい、どうぢや、おやぢさんが土佐の勤王黨に加はつて下さつたといふ便りがあつたぢやないか。』

那須は、鬼のやうな拳で、はふり落つる涙を拭ひながら、

『おい、坂本！　それだけぢやないぞ！　おれの妻子のことは、露いさゝかも心にかけず、更に奮つて一命を、畏れ多いか、天子様の御爲に捧げよとの傳言があつたぞ。おれの村の中平保太郎といふものが上京する時に、『槍術皆傳』の一卷を添えての傳言ぢや、——おれは、それを見て幾度泣いたか知れんぞ。それに何と答へたらいゝのだ。『家書を作らんとして意萬里』ぢや。これで、どうして、おれが大義に死なずにゐられようか。』

那須は、聲涙共に下る調子で、かういつたかと思ふと、龍馬の手をぎゆつと力一つぱい握りしめた。

龍馬は、一言の返すべき言葉もなかつた。自分には兩親はゐない。しかし、那須は、養家の父親に對して、このやうに感謝してゐるのだ。何といふ崇高な親子の情であらう？

『坂本！　一緒に泣いてくれ、よ……よ……、かういふをやぢさまは、おれ一人のをやぢさまにしておくのは勿體ないぞ。おい、泣いてくれ！』

『この父にして、この子ありだ。わしには、涙以上だ！』

『……吉村虎太郎等も、そのうち、どうかなるだらう。薩摩侯が足踏みしてゐても、伏見の一條

で藩主の罪を得て島流しに會つた西郷吉之助も、赦免になる時期が來るだらう。わが容堂公にしても、大勢には抗することは出來まい。——おい、坂本、おれは死ぬぞ、屹度死んで見せるぞ！』

『よし、分つた！　分つた！　わしのことを要領を得ん奴ぢやとおんしは思ふかも知れんが、これでも期するところはあるのだ。わしには、わしの考へもあるから、まア、安心して任せておいてくれ。たのむぞ！』

『何でもいゝから、うんとやつてくれ！　おれの性分として、他人のやつてゐることを懐ろ手をして見ては居れん。その代り、間違つた道に進むやうなことは斷じてしないから、その點は安心してくれ。』

『安心するもしないもないぢやないか。わしとても同じことぢや。先に死んだものが、骨を拾ふことにしようよ。——ぢや、今夜は、別盃といきたいのう。ハ、、、。』

龍馬は、氣持を變へて磊落に笑つた。

『さうぢや。こゝでも酒の支度位は出來るから、まア、待つてくれ。』

那須は、よろ〳〵しながら立ちあがつた。

第四章

刺客豹變

士生ニ無事世一　動作ニ不平一鳴
自言生ニ戰國一　唾レ手取ニ功名一
誰知眞英雄　智計隨處生
太平善聚レ財　亂世善用レ兵
—日柳　燕石—

龍馬は、單身東海道を下り、江戸に向つた。秋風やうやく身に沁む九月のことであつたが、前の時とは違つて街道筋の物價が諸事高値になり、人馬、川場の賃錢が騰つてゐるのに驚いたり、諸大名の參覲の制が廢せられ妻子の歸國を許すやうになつたので、その一行にも出會つたりした。

上下質素儉約の令が下つて、足輕、仲間、女中などには暇を出し、それ〴〵故郷にかへつて生業につかしめることになつたので、それらしい男女の旅人にも出會つたものである。

京都では、天誅といふ血腥い事件が續發して九條家の島田左近が殺されたり、越後の浪士本間精一郎がやられたり等々で、いよ〳〵物騒な情勢であつたが、龍馬は、その中をするりとぬけ出したやうな恰好で、獨り旅をつゞけたのであつた。しかし、龍馬にとつては、のんきなわけでも、逃げたわけでもなく、江戸には何かゞ屹度彼を待ちうけてゐるやうな豫感がしてゐるのであつた。

龍馬が、草鞋の紐を解いたのは、鍛冶橋外は桶町千葉貞吉の道場であつた。これは、お玉ケ池の千葉周作の弟で、小千葉とよばれた劍客であるが、文武の才に秀で、よく兄を扶けて劍名を轟かせた人物である。

前年、龍馬が二度の出府も、專ら、この道場で劍技を磨いたわけで、土州藩の上屋敷は鍛冶橋にあり、控屋敷は築地にあつたので地の便があつたことも原因してゐたのであらう。

龍馬は、貞吉の息子の重太郎といふ、これも劍客であるが、それと大變仲がよかつたので、前には、道場に宿泊してゐた關係もあり、萬事好都合であつたが、重太郎の方でも、心から歡迎してくれた。

お玉ケ池の方にも異變があつて、周作は既に故人となつてゐたし、殊に驚いたのは、その次男の榮次郎が、この正月に亡くなつてゐたことである。千葉の小天狗と謳はれ、實力は、父を凌ぐ達人であつたし、龍馬は、この榮次郎とも昵懇であつたので、ひどくがつかりさせられた。そんなことから、一層、重太郎の健在がうれしく、力づよく思はれたのである。

龍馬は、千葉家の食客のやうな恰好で、そこで、同郷の近藤長次郎の來訪をうけたりして、至極のんきに構へながら、江戸の情勢を窺ひ知ることが出來たが、日がたつにつれ、重太郎の慷慨悲憤の並み〳〵ならぬことが、やうやく分つて來た。すつかり水戸かぶれでもしたかと思はれるやうな頑固一徹な攘夷黨になつてゐるのである。どうかすると、龍馬の方が、たぢ〳〵となる位の强硬な議論をふつかけて來た。

『坂本さん！』

ある夜も、龍馬が家郷への便りを認めてゐると、そこへ、重太郎が、聲をかけながら、ぬツと這入つて來たのである。

『やア、どうぞ。』

龍馬は、如才なくいつて、ふりかへると、重太郎は、既に一杯やつて來たと見え、顏を眞つ赤にしてゐる。

『ちび〳〵やりながら、大いに談じませう。』

重太郎は、弟子の一人を從へてゐて、杯盤などを運ばせて來たのである。盆には、銚子や、干物がのせてあり、片手に貧乏徳利を下げてゐた。

『結構ですな。ハハ……』

龍馬は、傍らの鐵瓶のかゝつた火鉢を動かしながら、うれしさうに笑つた。

重太郎は、弟子をかへして、どつかりと坐りこみ、

『これで大丈夫でせう。おゝ、鐵瓶の湯もいゝ加減にわいてゐるし……』

と、早速、銚子を入れた。

『わしも、一杯やりたいなと思つてゐたところだから、ありがたいです。』

『大方、そんな時刻だらうと察してゐましたよ。それは、さうと、わたしは、さつきから、いろいろ考へてゐるうちに、ぢつとして居れなくなつて來たんです。』

重太郎は、急に眞劍な顏付になり、

『坂本さんなら、必らず賛成してくれると思つて、實は、その相談にやつて來たんだ。そのつもりできいて下さい。』

『何んですか。そんなに改らないでもいゝでせう。』

龍馬は、器用に干鰈をあぶりながら、うまさうな臭ひに鼻をひこつかせてゐる。

『坂本さん、驚いちやいけないよ。いや、あんたなら、屹度、同感してくれると思ふが……』

『賛成しますよ。わしは、何んにでも賛成する人間ですからなア。ハハハ……』

『いや、さうでもないて……』

重太郎は、龍馬が注いでくれたのを一口に飲んでから、

『そりや、わたしは、あんたを信じては居りますがね。』

『しかし、信じられぬ點もあるといふわけでせう！』

『兎に角、きくだけでもきいて下さい。』

『聞きますとも！　わしは、あんたを信用してゐますからね。』

『うまいことを！　坂本さんは、田舍へ行つて、却つて、辨口が上手になつたね。』

『うぶなところがなくなりましたか。そりや、年のせいですよ。ハハハ……』

『なる程……』

重太郎は、妙なことに感心するやうに、うなづいてから、

『坂本さん、現に、わたしは、江戸で天誅を加へなけりやいかんと思ふ人物が二人あると思ふんです。』

と、調子が變つて來た。

『たつた二人……？』

鍜から棒の一言に、龍馬は、怪訝さうに小首を傾げたが、かう戯談めかしていつた。

『坂本さん、わたしは、もう、かうなつたら、ざつくばらんにいつてしまひますが、勝麟太郎と横井平四郎の二人を血祭りにあげなけりやいかんと信じてゐるんです。しかも、急を要するのだ。横井小楠は、幸ひ、越前侯（松平春嶽）に從つて上府してゐるさうだから、機を逸してはならんと思ふんです。』

重太郎は、もう興奮して、盃をもつた右手をぶる〳〵顫はせてゐる。

『なる程、開國論者を成敗しようといふんですね。』

龍馬は、別に驚いた顏もしてゐない。

『あんたにも、いろ〳〵御考へはあるでせう。しかし、あの八月の生麥事件、――島津の家來がエゲレス人を殺傷したことが大問題になつて幕閣を惱ましてゐるでせう。この際、開國だの、通商だのといつては、益々外夷に侮られ、國威を落すばかりです。だから、外に皇威を張るためにも、勝などは、どうしても成敗しなければならんですよ。あんたは、さうは思はないですか。』

『しかし、メリケンのハリスは大手を振つて登城してゐるし、とても安政以前にかへすわけにはいかんが……。勝については、國の同志から多少聞いたところもあるにはあるが……』

『いや、米使の登城を許したりなんかしてゐる時だから、尙更、わたしは、奸賊をやつゝける必要があるといふんです。』

『松平春嶽が政事總裁となり、一橋慶喜が將軍の後見職となり、いろ〳〵やつとるやうではあるが……』

『坂本さん！』

重太郎は、もどかしさうに口を曲めたが、一段と聲を勵まし、

『あんたにも似合はぬ返事ぢやないか。わたしのいふことには反對するのかね。』

『いや、さうぢやありませんよ。』

龍馬は、慌てゝ兩手をあげて、押すやうな恰好をして見せた。

『だつて、一向、煮えきらないぢやありませんか。はつきりといつて下さい。』

『まア〳〵、千葉君！　わしは、反對どころか、正に賛成なんだ。しかし、あんたのやうにおつしやつちや、信州の佐久間象山だつて、それから……』

『佐久間は、勝の妹婿であり同類だが、今は、吉田松陰一件で松代に蟄居中ぢや――わたしは、最も近くにゐて、軍艦奉行並とか何とかいつて威張りながら國を賣るやうな考へを抱いてゐる大法螺吹きの勝麟太郎なんて手合をいの一番にやつゝける必要があると思つてゐるんです。』

『千葉君、分つた〳〵、ようく分りました。』

龍馬は、又しても、同じ手つきをして笑ひながら、

『ぢや、かうしたらどうです。一應、勝に會つて議論を闘はした上で、事を決したら？　今何もやつゝけることにきめなければならんこともありますまい。』

『さうかな、あんたはさうかな、何の爲にわざ〳〵江戸へ出て來たんです？　降魔の利劍われにあり！　わたしは、劍を生命とする人間だから、そんな間のろいことはして居れんのです。』

『いや、議論は、わしがひきうけます。その上で、いよ〳〵いかんと分つたら、あんたがばつさりやつてもよろしい。な、さうしようぢやないですか。』

『今更、無用の議論なんか……』

『無用が有用にならぬとは限らん。實は、わしも、江戸へ出たら、松平春嶽、勝麟太郎その他のお歴々に一度は會つて見たいと考へてゐたんです。だから、あんたからいひ出された時は、思はず手を拍ちたいところぢやつた。しかし、如何に天誅ばやりでも、いきなりは可愛想だ。ハハハ……』

『それもさうだが……』

重太郎は、だん〳〵と穏かな表情に返つて來た。

『わしは、何も勝を辯護するわけぢやありませんよ。しかし、唯、惜しむところは、勝の考へはどうか分らんが、海外の知識と航海術なんだ。就中、海軍建設の計畫なんです。』

『海軍……？』

『さうです。あんたのやうな劍を生命とする人には、船乘りまがひの仕事は、好みに合はんかも知れないが、水軍は、これから是非必要ですからね。』

『うーむ。坂本さんは、そんなことまで考へてゐたんですか。』

『これが、どうも、田舍者の道樂でな。しかし、勝に會つて見ることは面白い。是非、同道させて下さい。』

『本當に行きますか。』

『行きますともさ！　わしだつて、いざとなつたら、抜きますよ。そこは、こゝの大先生から仕込まれた北辰一刀流が物をいひますからね。』

『ぢや、いかんとなつたら、合圖をして下さい。あんたの手は煩はさんから……』

『江戸つ子は氣が早いな。よろしい！　確かに雜兵とは違つて、殺すに値ひする人間だから、そのところは、よろしくお頼ん申します。ハハハ……』

龍馬は、蟠りのない笑ひ聲をあげた。

それから、いろ〳〵勝の噂にうつゝた。幕府の一貧乏旗本に過ぎないが、先には、長崎で航海術を練習し、又、萬延元年のアメリカへの使節には、初めて、日本人だけの手による航海を見ん事やりとげて、咸臨丸で往復した程の手腕と膽力のある人物である。歸朝後は、兵制を改革し、砲臺建築も研究し、オランダに軍艦を註文し、榎本釜次郎（武揚）その他を留學させたりしてゐる。土州藩でも、後藤象二郎その他多數の士は、確か江戸開成館で教へをうけたこともあつた筈である。

やつと、重太郎にも、勝の爲人はのみこめて來たやうではあるが、相變らず、『蟲の好かん

奴！』といひたげな顏付をしてゐる。

龍馬は、わざと不得要領な態度でゐながら、いざとなると、躊躇逡巡は、好まない性分なので、今度は、自分から、明日にも勝の氷川の邸へ押しかけようといつて、重太郎を驚かせたのであつた。

江戸では、土州藩でも容堂老公を扶けて、間崎哲馬のやうな傑物がゐる。又、藩主豐範が、兵を率ゐて、再度の勅使に扈從し、追つゝけ江戸下向との風聞も傳はつてゐる折柄だから、龍馬は脫藩の日蔭の身として、今のうちに出來るだけのことをして置いて、窃かに、第二の行動に移らねばならぬと考へてゐた矢先なので、重太郎の提言は、お誂へ向きの企てゞもあつたのである。

世間の噂の通りで、この物騷な時節にも、龍馬と千葉重太郎とが訪ねると、勝麟太郎は、無雜作に會つてくれるといふ。その返答を取次ぎの腰元から聞かされた時、二人は、うれしくもあつたが、緊張してゐたゞけに、幾分、拍子ぬけの體でもあつた。刺は通じられたゞけで、別段、どんな用件なのかとも訊かれなかつた。

二人は、ふと視線が會ふと、互ひに、あゝよかつたといひたげな微笑を浮べた。導かれるまゝに廊下を傳ひ、奥まつた一室に通されると、主人海舟の一癖ありげな風丰が、ぱつと眼に來た。

勝は、小卓を前に、何か漢藉を開いて讀んでゐたらしい。

『さア、ずつとこちらへ……』

勝は、ひよいとふり向くと、にこりともせず、窪んだ眼で鋭い一瞥を投げてから、洒落な調子でいつた。

『……御免蒙ります。』

二人は、かたみにいつて、下座で刀をおかうとした。

『いや、それには及ぶまい。刀は、もつたまゝでよからう。時節柄だからなア。』

勝は、ちよつと居住居を變へながら、

『何アに構ふことはないよ。』

と、江戸つ子らしい捲き舌でいひ足した。

『しかし……』

『武士の禮儀ですから。』

小聲で、二人がかういつてゐるのを聽くきゝつけると、勝は、

『ハハハッ……。武士の禮儀か。なる程、お前さんたちは、劍術使ひだつたのう。』

と、どこまで、人を食つたからかひ氣味の口調である。

龍馬は、苦笑しながら、そのまゝ進んだが、重太郎は、覺えず、むつとした顏付になつてゐた。

二人は、改めて慇懃に初對面の挨拶をのべた。重太郎は、いやに、鹿爪らしく胸に一物あるやうな調子を帶びてゐた。

『ほゝう。又、わしを刺しに見えたか。近頃は、刺客ばやりでな。毎日、何人となくやつて來るよ。』

勝は、かう無雜作にいつて、口の中で冷やかな笑ひ聲をたてた。

『……先生のお眼鏡には、狂ひはございませんでせうな。』

龍馬は、響きに應ずるやうに、第一矢をびしりと放つた。

『だつて、お前さん方の眉宇には、殺氣が動いてゐるよ。かくしたつて駄目だ。アハハハ……』

勝は、二人の顏を見比べてから、ついと眼をそらした。

『さうですかなア。』

龍馬は、いたづらつ兒のやうに、自分の眉間に手をあてゝ見ながら、

『あんたは、どうぢや？』

と、重太郎を顧みた。

『…次第によつては、私共もどう變るか分りませんが…』

重太郎は、かういひながら、眞正面を向いて、端座したまゝである。

『さういふお前さんは、千葉君だつたな。貞吉先生の息子さんの、——これは、ようこそ…』

勝は、かういつて名札をいぢくりながら、

『君は、坂本さんか。なる程…』

『はい！　わたくしは土州藩の坂本龍馬と申します。今日は、千葉氏同道種々と御高教を賜はりたいと存じまして伺ひました次第ですが、拜顏がかなひまして、何ともあり難い仕合せでございます。』

龍馬は、そろ〳〵緒をきつた。

『何に、わしは、誰にでも會つてやるよ。來るものは拒まずが、わしの流儀でな。しかし、刺客でも、話してゐると、妙なもんで、かへる時分には仲好しになつてしまふから面白いね。』

勝は、銀の煙管に一服つめながら、

『土州藩といへば、わしの弟子も大分ゐる筈ぢや。うむ、みんな海軍關係ぢや。——今日は、何か、そんな話でも訊きに見えたのかね。』

と、晩秋のひらり〳〵と枯葉の散る庭の方へ向つて、ぷーッと煙を吐く。

『勝先生！』

重太郎が、こらへかねて、心持膝を進め、

『今日は、そのやうなのんきなお話を承るつもりで參上したのではございません。日頃、先生の唱へてゐらつしやる開國說、その他いろ〳〵承りたく存じまして、かくは、御意を得ました次第でございます。』

と、劍客らしく、ぐつと開き直つた。

勝は、どこを風が吹くかといはんばかりの眼付をしてゐる。この時、勝は、四十歲で、數々の經驗と、鍛練によつて人間も熟し、老巧にもなつてゐて、言外自ら禪機のやうなものが感じられる。

『どうか、御腹藏なき御所見を…』

龍馬も、透かさず、一本打ちこんだつもりで、『この狸おやぢ奴！』と心でつぶやきながらも、その樣子を瞬きもせず見守つた。

『何んだ、そんな不粋な話なのか。そりや、商賣の話ぢやないかい？　しかし、鎖港攘夷の武士も、商法のことを考へるやうになれば、まづ、一進歩ぢやのう。』

勝は、二人の方を下から見あげるやうにして、

『金がなうては、いくさも出來んし、鐵砲や軍艦も買へんからのう。もちろん、つくれもしない。』

『先生！　わたくし共は、そのやうなことを伺ひたいのではございません。この皇國の危急を夷狄に乘ぜられるやうでは、ぢつとして居れないのです。外夷の傍若無人の振舞については、よもや、對岸の火災視して居らるゝわけでもございませんでせう？』

重太郎の右手は、心の中では、刀の方へのびようとしてもがいてゐた。

『メリケンのみでなく、オロシヤの使節までが登城したと申すではございませんか。幕臣たる先生は、あまり、いゝお心持ではございますまいと思ひますが、どんなものですか。』

龍馬は、のんきさうな調子でいつたが、勝のちよつとした視線の動き、顏面神經の動きにすら、その心中を讀みとらうとしてゐる。

勝は、まるで聞いてゐて、聞えぬやうな風で、ひよいと、煙管でもつて、違ひ棚の地球儀を指し、

『ちよいと、あれを御覽よ。世界は、五大洲といふが、海面の方がずつと廣いだらう。海の上には、家も建てられないし、田もつくれんが、その代り船が、――殊に火船があれば、陸よりも自由自在に走り廻れるな。とりわけ日本と來たら、四面盡く海ぢや。魚や、鯨を捕るのも肝要だが、この海を利用して、こつちから、どん〳〵進んで行つて、外國と通航するやうにならなければ負けに定つてゐる。カラフトの問題にしたところで、負けになつたのは、それが劣つてゐたからぢやないのかい？』

勝は、抑揚の巧みな、きび〳〵した口調で說き始めた。こゝで、ちよつと咳拂ひをして、

『まア、話と思つてきいておくれ。たとへば、開國だの、通商だの何んだのといつたところで、その是非の問題は、海軍を興さんことには、お話にならんぢやないか。先決問題は、そこにあると、わしは考へてゐる。攘夷〳〵と騷ぐのもわるくはないが、實効のない騷ぎは、近所迷惑だぜ。黑船にはかなはんからな。ポン〳〵と打つても、後で、あやまつたり、償金の勘定をしなければならんやうでは、氣の利かん話ぢやないか。わしは、それが口惜しふてならんのぢや。』

と、如何にも無念さうに眉を寄せた。

二人は、思はず、ひきこまれて、無言でうなづいた。

『船だよ、軍艦だよ。それも金ぢや。世界と交易して、大いに利を得んことには、その準備も出來ないし、第一、國の世帶が立ち行かん。幕府も、諸侯も、下々も藏の中や、懐ろの財布がからつけつぢや動きがとれん。これは、大きな聲でいへんかも知れんが、兵も強く、財政も豐かな藩は、密貿易なんかで、うんと儲けてゐるところばかりなんだぜ。ハハハ……』

勝は、ひとりで喋りつゞけて、得意さうに突ひあげた。

二人は、まるで、煙に捲かれた形で互ひに顔を見合はせた。

『おゝ、坂本君は土州なら中濱萬次郎さんの噂もきいて居らうが、わしが、咸臨丸でアメリカ桑港へ行つた時は、あの仁は使節の方の通辯ぢやつたから一度聞いて御覽よ。日本は、内に上下團結し、實力を養ふて、外に向はんといかんな。自慢をいふのぢやないが、わしのやうな人間が、今は、幾人居つても足らんのが日本の現狀ぢや。わしは、日本の海防と、外への進出のために、

大童になつてゐるところだが、それを誤解して、勝の奴、刺すべしといふ手合もあるさうだから情ないよ。お前さん方のやうに、意見を質して見た上でといふやうな心がけ、――いや、見あげた料簡の人は、上の部だからな。』

勝の辯舌は、ます〳〵爽やかに、しかし、辛辣味を帶びて來た。

『先生の大艦隊の御計畫は、かねて拜聞して居りまして魂消て居りました。あれは、實に雄大なお考へですな。』

龍馬は、重太郎が膨れつ面をして默りこんでゐるのが氣になつたが、それをも和らげるつもりで勝をおだてあげるやうにいつた。

『うん、あの話かい、――全國に別つて六つの艦隊をつくる案ぢやらう。どうも、今の幕閣にはかういふ話の分る人がないのでな。何をいふても勝の駄法螺のやうにとる。貧すれば鈍すると は、あのことぢやよ。いや、船をこしらへても、乘り手がないと來てゐるからみぢめぢや。前に長崎や、築地で養成した連中も、始終、使つて居らんと元の杢阿彌さ。まア、そんなわけで、このところ軍艦奉行並樣もとんと暇でな、氣をもませられるばかりよ。』

『それでは、刻下焦眉の急を告げて居ります攘夷實行には、御反對と承知いたしてもよろしうご

さいますか。』

重太郎が、口を尖らせて、つめ寄つた。

『まア、さう力みかへりなさんな。刺客への早變りには、ちと早過ぎやしないかい。いや、これは戯談だが、わしは攘夷に反對した覺えはないよ。攘夷といへば、暗雲に黒船へ打ちかけたり、夷人館へ斬りこんだりすることぢやないだらう。護りをかたくして、何が來ようとびくともしない。つまり、待つあるを頼む構へで居ればいゝのぢやないか。談判ですむことなら、口で結構間に合ふ。向ふから頭を下げて、薪水の補給地を貸してくれとか、石炭がほしいとか、やれ、交易をしようとかいつて來るのを、無下に退けるには及ぶまい。こちらに用意がなくて、恐れたり、逃げたり、手向つたりするから、向ふでも實は困つてゐるのだぜ。』

勝は、こゝで一と息いれて、態度を正し、

『畏れ多いことだが、天子樣の在します禁裏を御安泰にするには、京攝の海岸の固めが、一日も忽せに出來ぬ問題だらう。ずつと離れた對州にしても、エゲレス、オロシヤ、フランスなんかゞねらつてゐる。小笠原島だつて、うか〳〵してゐると、メリケンに自由にされるやうになるぜ。

——松平春嶽さんにしても、横井小楠先生にしても、こんなことは、とつくから、ちやんと辨へて居られる。お前さん方のやうな若い有爲の人材が、その考へになつてくれぬと困るよ。老人や、殿樣は、船頭にはなれんからな。ハハハハ……』

と、どうかすると淀みがちな空氣を吹つとばすやうに哄笑した。

『……御尤で。』

龍馬は、思はず傾聽してゐた自分に氣づいた。

重太郎も、やつと、心がほぐれて來たのか、にこやかな表情に變つてゐた。

『あの、それ生麥事件の島津の家來が異人を斬つた事件よ。今に、どつさり償金をエゲレスから吹つかけられるぞ。軍艦を江戸灣へ乘り入れて、威嚇しておいてな。——考へたゞけでも口惜しいぢやないか。こちらは、無力だから、つよい手は打てんからなア。』

『……われ〳〵も軍艦の操縱、航海術の練習でも始めようか。』

龍馬は、かういつてほつと溜息をついた。

『そこだよ。しつかりたのむ。——坂本君の如きは海育ちぢやないかい。疊の上の水練のやうなことはお止しよ。昔は、ほら、長曾我部元親は、十八反帆の大黒丸に乘り込んで小田原陣へも出て來れば、文祿の征韓の役にも勇名を走せてゐるぢやないか。どうだね。』

勝は、うつかりきいてゐると冗弄し、揶揄してゐるやうな調子だつたが、

『この次ぎには、いゝものをお目にかけるよ。わしのメリケンみやげぢや。――蒸汽機關の雛形と、それから、セバストポールの戰爭の繪圖面もある。これもいくさのやり方についての參考になるぜ。それから、毛唐の書いた戰術の書物もあるよ。ペルリがもつて來た幕府への贈り物には劣るが、まだ、何彼と珍品があるからね。』

と、あいそよくいつて起ちかけた。

どうやら、厠へでも行くらしい。

『ちよつと失禮、――あゝ、今日は、刺されんうちに話が出來てうれしかつたよ。もう、いつ刺されても不服はない。ハハハ……』

勝は、笑ひながら、後ろ姿を見せて、ゆつくりと歩を運んで行く。

『千葉君！　やるか。』

龍馬は、廊下に消えた勝の方を見送りながら戯談に囁いた。

『いや、あの後ろにも二つの眼がついてゐるやうで、とても手は出せん。』

重太郎は、がつくりとうなだれてしまつた。

『……斬りこむ隙はないですか。』

『もう、斬る必要はなからう。』

重太郎は、ひどく自信のない調子であつた。

『うむ、殺すどころか、生かしておかねばならん人物だ。』

龍馬は、すつかり共鳴し、敬服してゐる自分を發見すると共に、こゝに來てゐることが恰も、日頃から親しい先輩か、師匠のところへ來て胡座をかいてゐるやうな氣易さを覺えた。これは、自分ながら奇妙な心理の變りやうである。――重太郎は、どうかと思つて見ると、一向に見當はつきかねるが、きよろ〳〵と室内を見廻し『海舟書屋』といふ篇額を物珍らしげに眺めてゐる。

最早、二人には微塵も刺客に見るやうな殺氣は認められなかつた。

やがて、勝が這入つて來る氣配がした。可なり、永い厠であつた。

『どうも、失禮……』

勝は、姿を現はすと、立つたまゝで、

『今日は、この位でいゝぢやないか。わしは、ちと風邪氣味でな、ぼんやりしてゐたところぢやつたよ。しかし、お蔭で元氣が出たが、ここらで休せまて貰ひたいな。命もどうやら助つたやう

だから……。アハハハ……』

と、からりとした調子でいつて、鼻をくす〳〵鳴らせてゐる。

『勝先生！　これから門生にして頂きたいと思つて居ります。先生の海防、海軍等の御意見には一々感服いたしました。』

龍馬は、突然、兩手を膝について、ぢつと勝を見あげた。

『まア、時々やつて來なさい。お前さん方のやうな若い人は、物分りが早いから、話し甲斐があつてうれしいよ。大乘的見地に立たんと、物事がはつきり見えて來んから、しつかりやつてくれ給へ。』

『はツ……』

重太郎の方が、先を越して、莊重な返事をした。

もう、黄昏になつてゐるのか、どこかの寺の鐘の音が澄みきつた空をわたつて來て、餘韻をふるはせてゐた。……

新たな發足

品川沖から出帆した順動丸には、攝海防備の準備かために出張する閣老小笠原圖書頭（ずしよのかみ）の一行が坐乘してゐたが、船長格として采配を振つてゐるのは、勝麟太郎であつた。

こつそり乘りこんだ三人の若い武士があつた。いづれも、勝の門生といふ名儀であつた。いや、名儀だけでなく、眞實、師弟の契りを結んだ三人なのであつた。

それは、坂本龍馬と千葉重太郎に、土州の近藤長次郎であつた。劍客達も、俄か仕立みの航海練習生となつた恰好である。

長く江戸に遊學してゐた近藤も、とうとう龍馬に說得されて、勝の門生となつたわけだが、彼は、最早、昔の高知城下の饅頭屋の悴で、燒きつぎなどを渡世にしてゐた町人の若者とは違ふ。もと〳〵龍馬に激勵され、刺激されて、自費をもつて江戸に出たのであるが、安積艮齋塾で經學を學び、手塚某に蘭學を習ひ、高島秋帆流の砲術をも少しはやつたといふのだから、天性の才氣と共に、急に人間まで光り出して來たのである。龍馬のことだから、昔の癖が出て、『おい、水道横町の先生』だの、『燒つぎ屋さん』など、無遠慮な口を利くが、その人物は十分認めてゐた。

甲板に立つてゐると、師走の夜といふのだから、膚を劈（つんざ）くやうな海風がびゆう〳〵と吹きつけた。氷のやうな半月が、研（と）ぎすました刄のやうに悽く、中天にかゝつてゐる。

だが、勝船長の振舞酒が、船の動揺の爲に一層利いたと見え、二人は、ふらつきながらも、欄干につかまつて、烈風も物かは、大きな聲で語り合つてゐる。

『……人間の運命なんてものは、全く妙なもんぢやよ。おんしとわしとが、こんな風になつて、勝先生の船に乘り込むやうになるなんて、全く夢にも思はれないことだのう。』

龍馬は、彼らしくない感慨を洩らす。

『うむ、おれも、どうやら學究の徒ぢやなかつたやうだ。』

近藤は、黑くて細長い顏を、一層尖らせ、氣どつた調子でいつた。

『梅花道人！　おんしは、昔からゑらい學者ぢやつたぞ。あのそれ、畫かきの書生に與へた文章なんてものは大したものぢやないか。』

龍馬は、急に笑ひ出した。

『よく覺えてゐるな。しかし、あの一文が抑も、花鳥風月に遊ぶ靑年輩を戒めたわけだから、おれの憂國慨世は今に始つたことぢやないなア。』

近藤は、昂然として、瘠せた肩をそびやかす。

近藤は、國にゐた時、既に藩儒細川延平の門に學んで、梅花道人などゝ號し、江戸に赴く畫學

生に與へて、彫蟲の末枝に耽ることを時勢を辨へぬ柔弱の徒の爲すべき業だといつて戒めた文を贈つたことがあつた。その中には、『泰西女主淸國ヲ貪暴シ、又來ツテ皇國ヲ覗フ、其餘亞奴魯西亞之虜、晨ニ來リタニ去ル、或ハ某陸ニ上リ、或ハ某港ニ入ル、其情意未ダ測ル可カラズ、而シテ我南海ハ夷船之航行之道ニ當ル、志士豈寒心セザル可ケン哉』などといふ一節があつたのである。

それを思ひ出すと、龍馬も、急に前言を訂正して、

『さうぢや〳〵、おんしは、矢張、實際に當つて仕事をする人物かも知れんな。』

と、慰めるやうにいつた。

『あの頃は、何といつても小僧ぢやつたからな。』

近藤は、悵然として嘯き、

『ところで、京都の方はどうなるだらう？　三條公、姉小路卿の御勅使は、幕府に攘夷の卽行を迫るといふのが御主意ぢやつたらう。將軍家では、臣家茂と署して、御勅諚をお受けしたと傳へられてゐるが、會津侯が守護職となつて京都に入り、桑名侯が所司代となつた。そこへ春嶽侯が行く、慶喜公が行く、將軍も又上洛するといふ。それは、一體全體攘夷の實を擧げようといふの

か、それとも、御勅諚を覆へさうといふ魂膽なのか。そこがどうも分らん。——この船に乘つてござる小笠原閣老にしてもさうぢやが……』

『わしが、勝先生からきいたところによると、慶喜公からして、攘夷卽行なんて、とても不可能だから、後見職は御免蒙りたいといふてござるさうだぜ。』

『それぢや、春嶽さんの政事總裁も怪しいもんぢやのう。攘夷派との正面衝突になるかな。』

御勅使三條公が江戸下向の時には、俄かに勢ひを盛り返してゐる土州勤王黨の武市半平太は、柳川左門と名乘つて姉小路卿附となり、長州の久坂玄瑞や、志道聞多（後の井上馨）その他は、公卿侍に假裝して、柳營にまじり込んだといはれてゐる。——近藤は、これ等攘夷討幕派の暗躍を思ひ出してゐたのである。

『うん、今に將軍樣が將軍職を御免蒙りたいといひ出すかも知れんよ。』

龍馬は、皮肉をいつて、一人で愉快さうに笑つた。

『幕臣勝先生は、どうなのかな。』

『土州に於ける坂本龍馬のやうなものよ。わしらは、どこまでも、攝海防備、海軍擴張、航海術操練で行かうや。——どうも何だな、血で血を洗ふやうなことは、わしは、性に合はんのでな。』

『坂本が、江戸で間崎哲馬に海軍振興策を說いて感服させたことは大出來ぢやつたよ。だから、間崎が、大監察小南（五郎右衞門）を動かして、藩からも航海術修業生を出すことを命ずるやうになつたといふが、近頃珍らしい淸凉劑だな。——ところで、京阪地方には、同志に入れる奴はゐるかのう？』

『居るぞ〳〵！　わしの姉の悴の高松太郎がゐるし、それから千屋寅之介、望月龜彌太、澤村總之丞なんて、錚々たるものぢやないか。』

『しかし……』

近藤は、思案深げにいつて、

『幕臣勝麟太郎と事を共にするわれ〳〵に、果して、武市派の勤王黨が、素直について來るものかどうかぢや。それが疑問ぢやないのか。』

『さういふこともあるかも知れん。しかし、幕臣であらうと何であらうと、外國に對した時は、同じ日本人で、味方同志ぢやないか。そこが、勝先生のいふ大乘的見地といふやつぢやないかね。何に、わしが、屹度說き伏せて見せちやる！』

『たのむ！　平井はどうしてゐる？』

『隈山先生か、あれは、今、京都留守居役で、どゑらい勢ひだといふぜ。』

『ふゝん、下士が上士の座に坐ることになつて、われ〳〵は下士の又下士といふところなのか。時勢といふものは恐ろしいな。』

『いつ又、どう、でんぐり返るか知れんさ。わしは、どこまでも坂本龍馬で行く。それでいゝぢやないか。ハハハ……』

龍馬は、聲を擧げ、烈風に和するやうに笑つた。

何かゞ裂けちぎれんばかりにはためき、船體は、波にのりあげ、又、沈む。遠州灘にかゝつてゐるらしい。

二人は、醉ひも吹き醒まされたので船室へ逃げこむと、勝が無雜作な恰好で、そこへやつて來て、千葉重太郎を相手に頻りに劍法を談じてゐるところであつた。それで、二人も、丁寧に會釋して、その座に加はつた。

釣りランプの光をうけて、人や、物の影が船の動搖と共に、音もなく怪しく踊つてゐる。

勝は、從兄であつて劍聖と稱せられる男谷下總守信友に年少の時から劍を學び、ついで、同門の劍豪島田虎之助について、みつちり仕込まれ、二十一歳の時に免許皆傳を得た程の劍客であつ

たし、西洋兵學や、禪學も修めてゐるから、話は、すつかり玄人である。今では、因州鳥取藩の劍術指南となつてゐる重太郎も、ともすれば、受太刀ばかりになつて來る。

話が、ちよつと杜斷れたところで、近藤は、

『先生！　神戸村の海軍操練所は、なるべく早くつくつて頂きたいですな。同志は、どつさり集まる見込みですから……』

と、待ち構へてゐたやうにいつた。

『まア、さうせか〳〵いはないでおくれよ。土地の檢分にしても暇がかゝるからな。それまでは、大阪の塾で小手調べにやるつもりだ。紀州の加太砲臺の設備も頼まれて居るし、船頭も忙しいし、わしも、このところ、こき使はれてゐる形だからな。ハハハ……』

勝は、諧謔を弄して、

『物事を建設するといふことは、天誅々々といつて、首を斬るやうな工合には行かんものでな。』

『先生！　海軍操練所の費用の點にしても大變でせう？』

龍馬は、氣遣はしげに訊いた。

『うん、まア、幕府からは年額三千兩以上は出してくれる見込みだけは立つてゐるがね。』

『それでは不足でせう?』

『大名方の中の有志にでも無心するんだな。その時は、坂本君の遊説が必要ぢや。』

『いや、そういふことにかけては、近藤の方が上は手です。』

龍馬は、照れ氣味にいつた。

『近藤君もいゝ、しかし、坂本君も一と役買つて出るんだ。春嶽さんは、君が好きらしいよ。』

勝は、にや〳〵しながらいつた。

龍馬は、一層照れた。

『坂本君、やれよ。』

近藤が、おだてあげた。

『さうだ。勝先生のおつしやるやうに、坂本さんは、なか〳〵談判事にかけては、うまいところがあります。』

重太郎が、眞顏でいつた。

『又、一つ千葉君御同道で出かけますかな。』

『いや、わたしは、鳥取へでも行きます。道場以外のことは、さつぱり駄目だから……』

重太郎が、かういふと、期せずして、一座に哄笑が起つた。勝も、いゝ御機嫌で、たえず、にこ〳〵してゐる。

愉快な航海を終へて、大阪に上陸すると、直ぐに、文久三年の正月を迎へることになつた。龍馬は、勝と共に攝海を巡航したり、大阪城で大久保一翁に紹介されたりして、いゝ氣持でゐたが、一と先づ、同志を勝に托して、單身京都に行くことになつたのである。

霙が風と共に横なぐりに吹きつけた。龍馬は、雨具の用意もないので、伏見へあがると、蓬來橋に近い寺田屋へと駈け込むつもりであつた。

すると、雨合羽を着た壯漢が、とある軒下に佇んでゐて呼びとめた。變な奴だと思つて、近づいて見ると、それは、同藩の岡田以藏で、もう一人、その蔭に佇んでゐる連れらしい男がゐる。

『おゝ、おんしだつたのか。』

龍馬は、なつかしさうにいつた。

『お久しぶりぢや。どちらから……?』

以藏は、粗野な顏をしてゐるが、好人物らしい。

『今日は、大阪からだ。』

龍馬は、かういつて、連れの男の方をちらと見やつた。

以藏が直ぐ紹介したが、それは、薩州の田中新兵衞であつた。見るからに屈强さうな面構へである。

岡田以藏は、武市半平太取立ての門人で一刀流をやつたが、後に桃井春藏に就いて、鏡新明智流の目錄をとつた腕利きであつた。田中新兵衞は薩摩で、賣藥屋の次男坊に生れたが、劍道が三度の飯よりも好きなので、商賣違ひの方向に進んだ男だ。慷慨家で、烈しい氣性の持ち主である。

龍馬は、江戸にゐても、この二人が、天誅恐怖時代の立役者として、縱橫に荒れ廻り、觸るゝもの盡く斬るの猛威を逞ふしてゐるとの風聞を耳にしてゐたので、揃ひも揃つて、その二人に偶然とはいへ、ぶつゝかつたわけだから、これは、ちよつと面倒だなと思はないわけに行かなかつた。今、當面に描いてゐる龍馬の新たな仕事は、彼等の考へとは、あまりにかけ離れてゐたからである。

『……わしは、雨宿りにちよつと寺田屋へ寄つて行かうと思つちよるが……』

龍馬は、海路で江戸からやつて來たことをも話した。

『では、後刻また。われ〳〵は、これから薩摩屋敷へ行くから……』

以藏は、さつぱりしたもので、かういひ捨てると、霎が小歇みになつたところを、さつさと、新兵衞を先に行つてしまつた。

龍馬は、ふと、あゝいふ手合も、何とかしてひつ張り込み、善導し、利用する方法はないものかなと空想したが、だん〳〵寺田屋に近づくにつれて、昨年春の騷動のことを思ひ出した。薩藩士が相殺戮し合つた慘事が、直接見たわけではないが、まるで、惡夢のやうに、龍馬の腦裏に描き出されるのである。

寺田屋伊助といへば、古くからの薩摩の定宿で、船宿であつた。今は、女丈夫の女將おとせが後家の身で娘たちを抱へて采配を振つてゐるが、なか〳〵人氣もあり、浪士などにも親切であつた。龍馬は、まだ、格別親密といふ程の間柄ではなかつたが、おとせは、よく覺えてゐたと見え、愛想よく迎へられ、早速、ひつそりとした裏座敷へと案内された。

風呂加減がいゝといふので、龍馬は、朝湯に浸り、いゝ氣持になり、丹前姿に寛いだが、やがて、朝と晝とをかねたやうな食膳を前に坐ると、矢張、熱燗がほしかつた。

まだ、新參だといふ女中を相手に、ちびり〳〵やりながら、いろ〳〵と近頃の情勢を訊ねたりしてゐるうちに、昨年の騒動に移つて行つた。

『さすがは薩摩様！　ゑらいもんどすな。』

女は、聞きかぢりだか傳へ聞きだかを、のべつ暮なしに喋り立てる。

いはゆる昨春の寺田屋騒動の時は、薩摩屋敷の留守居は、一夜のうちに、死骸のとり片づけは勿論のこと、血しぶきを浴びた襖も張りかへ、血汐の流れた庭の土をとり變へ、柱から框、二階の根太などの汚れには、すつかり埋め木までして、見違へるやうにしてしまつたので、翌朝からは、女將がちーんと帳場に坐つて居り、そんな大騒動のあつた後とは、夢にも思はれない光景であつたといふ。

『さうか。うれしい話だな。わしも、薩州の浪人だから、さう聞くと惡い氣持はしないよ。』

龍馬は、疲れと、湯上りとの爲に醉ひの廻りも早く、てら〳〵と顏を輝かせ、舌も滑かになつて、つい、出まかせをいつた。

『さうだろと思ふてました。どう見ても、旦那はんは、薩摩風どすよつてな。』

女は、調子にのつて、

『さう〳〵、騒ぎの時には、このお座敷に眞木和泉様、田中河内介様たちが陣どつて居られたさうどす。』

『ほう、さうか。ぢや、こゝはなか〳〵曰く因縁のある座敷だな。酒も一としほうめえよ。姐さんのお酌はいゝし…』

龍馬は、二本ばかりあけて、輕い食事をすませ、置き炬燵に兩足を入れて、ごろりと横になつた。夢現のやうに京都のお龍たち一家のことを思ひ、弟の太一郎は救ふ意味で仲間に入れてやりたいと思つたりしてゐるうちに、とろ〳〵と假睡の快さに落ちてゐた。

そこへ、岡田以藏が、闖入するやうな勢ひで這入つて來たので、忽ち、覺まされてしまつた。

『坂本さん！　わしやな、わしやな…』

以藏は、どつかり坐ると、大きな拳で鼻をこすりながら、

『あんたに平謝りに謝らねばならんことを仕出來したんだよ。謝る！　謝る！　かくの通りぢや。』

まるで、醉ひ泣きするやうな調子で、肱を張つて、兩手をつき、そこへ頭を埋めんばかりに下げた。

驚いて起き、まだ、眠氣のとれないやうな赤い眼をしてゐる龍馬は、面食つてしまつて、

『何んだね。龍馬先生ちと御所勞の氣味ぢやによつて、面倒臭いことは止めてくれよ！　以藏戸惑つて來たのぢやないかい？』

と、ぢろ〳〵と相手を見つめてゐる。

以藏は、それで、やつと安堵したものか、おづ〳〵ながらも顏をあげたが、まるで、朱を注いだやうに赤い。

『坂本さん！　實は、わしやな、あんたの祕藏の刀に憑かれて、ふら〳〵と持ち出したところが、殘念ながら、しくぢつた。』

『何に、わしの祕藏の刀を……？』

『傳家の寶刀と承つた肥前忠廣のこつちや。』

『忠廣をどうしたといふんだね。』

さすがに、龍馬の顏色が、さつと變つた。

『あれをな、京の土州屋敷から借り出した。ところが、一度でいゝから試して見たうてかなはんやうになつたのぢや。』

『……斬つたのか！』

『斬るには斬つたが、岡田以藏一生の不覺をとつた。』

『何んだ、相手を逃がしたのか。』

『いや、そんなへまはやらん。見ん事やるにはやつたが、力餘つて、餘計なものまで斬りつけたのぢや。』

『誰を、やつゝけた？』

『その時は、食はせ者の贋せ志士で、裏切り者の本間精一郎ぢやつた。』

『本間は、おんし等がやつたのか！』

龍馬は、覺えずとみあげた溜息と共にいつた。

以藏の語るところによると、その時に、龍馬が、姉の乙女から餞別に貰つた傳家の銘刀肥前忠廣を過つて扉に切りつけ、鉈子を少しばかり折つた。しかし、それは、ちやんと武市半平太に預けてあるといふのである。

すんだことは、いたし方のないことであつた。龍馬が、刀を土州屋敷へ置いて行つたのが、抑も惡かつたといはれても仕方がない。

『田中新兵衛も一味なのか。』

『……』

以藏は、ちよつと用心深くあたりを見廻してから、かすかに、うなづいた。そして、

『本間奴は、會津に通じ、薩、長、土の離間をたくらみ、剩へ、不淨の財貨によつて豪遊を試み……、實に、八つ裂きにしてもあき足らぬ奸賊ぢや。あん時は、いゝ氣持ぢやつた！』

『もう止めろ！　壁に耳ありぢや。』

龍馬は、鋭くたしなめた。

龍馬は、以藏等の行動から、京都に於ける土州勤皇黨の消息が氣になるので、

『時に、武市先生たちは、どうしてござる？』

と、何氣なげに訊いた。

『武市瑞山、平井隈山の諸先生は、飛ぶ鳥を落す勢ひぢや。』

以藏は、思ひ入れ深くいつた。

『ほう、ゑらいことになつたのう。』

『本當ぢや。田中新兵衛の如きは、當今、瑞山に比ぶべき程の人物は見當らんといふて感心しとる。强ひて、求めたら薩摩の西郷吉之助位なもんだらうといひ居つた。瑞山先生も、新兵衛に惚れこんでな、義兄弟の約束をしなすつた位ぢや。これで、大抵分るだらう。』

以藏は、羨ましさうにいつた。

『だがのう、以藏！　おんしたちも、あんまり、兇暴を逞ふしてはいかんぞ。まるで、血に渴した狼のやうぢやないか。』

『兇暴？　あんたは武士で、劍客で、勤王黨の一人の癖に何をいひなさる？　まさか、天誅といふ意味が分らんあんたぢやあるまい？』

『いや、人を殺すことの必要な時もあるが、生かすことは、もつと肝要だぞ。わしは、これから生かすことに懸命になるつもりだからのう。』

『そりや、結構なこつちやが、大義親を滅すで、斬らねばならん時には、昨日までの同志でも涙を振つて斬る。いけない奴なら、いくらぶつた斬つたつていゝ。これが、わしらの信仰ぢや。

――斬るぞ！　斬つてやるぞ！　わしの刀は、日夜睡つてゐるのぢや。』

以藏は、ぎゆつと握りしめた拳をわな〻かせながら、まるで、狂人のやうな眼付をして、虚空を見つめてゐる。

龍馬は、瞑目して、ぢつと考へ込むだ。――自分たちも、まさかの時には、斬つて捨てるつもりで、千葉重太郎と共に、勝麟太郎のところへ押しかけた位である。だが、後になつて考へて見ると、少くとも、自分だけは、何とかしてお互ひに生かし合はう。いや、相手の力を信じてゐるだけに、さういふ氣持になり合ふことを望む氣持が、勝の面前にかしこまつて、顏をもたげるまで、心の底に渦卷くやうに動いてゐたことを否定することは出來なかつたやうに思はれる。以藏や、新兵衞になると、『あいつはいかん、よし、ばつさり』といつた調子らしい。本間精一郎の是非は別として、武市等の巨頭が、無暗と暴發組を使嗾してゐるのであつたら、彼等の理想とあまりに、その實現の手段に隔てがあり過ぎはしないか。何故、小人輩の跋扈する餘地のない大勢をつくり、壓力を結集することに努めないのか。武士の魂たる劍は、雜草を刈る爲にぬくべきものでは、斷じてない！

『おい、以藏！　おんしは、わしを斬るか。この坂本龍馬を斬つて見るか。』

龍馬は、急に威丈高になつた。

『な、な、なにをいふんぢや。わしが、いつ坂本さんを斬るといふた？』

以藏も、驚いて眼を圓くした。

『ぢや、ようく耳をほじつて聞けよ。――わしはな、今度、幕臣の勝麟太郎の弟子になつて、順動丸で大阪へ航海して來た。これから、禁裏に近い攝海の防備をかため、又、海軍を興すつもりなのぢや。これは、薩、長の爲でもなければ、會、桑の爲でもない。況んや、土、肥の諸藩の爲でもない。大日本の大海軍を建設するのぢやぞ。』

龍馬は、のしかゝつて壓服するやうな態度になり、

『わしが、幕臣など〻結んだのがいかんといふなら、血祭りにあげてくれ。見事に斬つて見るがいゝ！』

以藏は、いきなり、がん〳〵とやられて、呆つ氣にとられてゐる。

『斬るか！　斬らぬか？　はつきりと男らしく返答しないか。』

『いや、斬らん！　あんたを斬つてどうする？　阿呆らしい！』

『何故に……？』

『何故でも……』

『ぢや、以藏！　おんしもわしのいふことを聞いて勝先生の弟子になれ。海軍に這入れ。』
『そいつは待つて貰ひたい。わしは、劍に生きるのだ、船のことは分らんけにな。』
『ぢや、わしのいふことには反對なんぢやらうが……？』
『わしは、坂本さん、あんたを信じてゐる。あんたが好きなんぢや。――わしの心は、唯天朝樣の御爲に！　それだけぢや。あんたの海軍が、天朝樣のものなら、何も反對はせん。』
『さうか、なる程！　ぢや、おんしも一度は、勝先生に會ふて見るがいゝぞ。』
『よし、會ひませう。――時に、一献どうぢや。あんまり話が理に落ちて、醉ひ醒めの身體がぞく〳〵し出したでな。』
以藏は、酒をねだつて置いてから、
『……肝膽元ト雄大、奇機自ラ湧出ス、飛潛誰カ知ル有ラン、偏に龍名ニ耻ジズ――この詩を知つてゞざるか。』
と、錆びた聲で微吟していつた。
『知らんよ！』
『偏ニ龍名ニ耻ジズ、――あんたのこつちやないか。武市瑞山先生の作ぢやぜ。まだ、知つてなかつたのか。』
『えッ！　瑞山が……？』
龍馬は、ある感動に胸が閉がつた。定めて、自分の惡口ばかりいつてゐるであらうと思ひ込んでゐた武市半平太が、いつの間にか、そんな詩を作つて居ようとは……？　それだけに、龍馬はちよつと憂欝でもあつた。
それを、追つ拂ふやうに、龍馬は、勢ひよくパン〳〵と手を鳴らして、酒肴をいひつけたのである。

龍馬が、嵐を孕むだ雲行の怪しい京都へ潛行したのは、翌日のことであつた。そこで、先づ、同志や知人の動靜を探つたが、いづれも、風雲に乘ぜんとする過激の尊攘派に加擔してゐた。
吉村虎太郎や、宮地宜藏は、一旦高知へ引かれて揚屋入りとなつてゐたが、朝廷の御内旨で許され、再び、京都へかへつて何事をか劃策し、中山忠光の師匠となつて、盛んに武技を練つてゐるといふ。忠光は、忠能卿の五男で、まだ、二十歳の公卿としては稀れに見る熱血兒で、寺田屋

事件に連座し、薩州の士と船で彼地へ送られる途中に殺された田中河内介は、この中山家に仕へてゐたのである。

どこへ行つて見ても、會津守護職の兵が幅を利かしてゐる。それと對抗するやうに尊攘黨の志士浪人は、大刀を帶びて、肩で風を切つて濶歩してゐる。いつ、どこで、どう間違つて血の雨を降らすか計り知れ難い險しい空氣が、犇々と感じられる。天誅は、頻々として行はれ、人心は恟恟としてゐる。

今に、將軍を初め、幕府のお歴々が相前後して上洛する段取りになつてゐるわけだが、固より攘夷卽行の擧は期すべくもない。さうなると、堂上に於ても、長州派の鷹司卿や、土州派の三條卿等に占められてゐる際、如何なる風雲が捲き起されるか、まことに豫測し難いものがある。風雲は益々急に、人心は激化の一途を辿り暗澹としてゐる。

龍馬は、それを案じながらも、危險な各派の繩張りをくゞり、縫ひ歩くやうにして、やがて設立さるべき海軍操練所への同志獲得の爲に、懸命に奔走するのであつた。

ところが、人心といふものは又妙なもので、一度、龍馬の口舌にかゝると岡田以藏の場合と同じやうにころりと口說き落されてしまふのである。勝麟太郎斬るべし！　坂本龍馬排すべし！

との聲も揚らないではないが、激派中の錚々たる吉村虎太郎や、田所壯輔あたりまでが、それなら、兎に角、勝先生に、ひき合はせてくれるやうにといふまでになつたのである。

心は徒らに急ぐが肝腎の勝が順動丸で江戸にひきかへし、今度は、將軍家茂を乘せて來るといふのだから、それまでは待たなければならぬ。そのうちにも、龍馬は甥の高松太郎や、千屋、望月、澤村などの行動を共にすることを誓つた連中と往來を重ねては、獨自の運動を展開しようとしてゐる。

大阪に滯留してゐた千葉重太郎や、近藤長次郎が、龍馬の後を追つて入京するやうになると、愈々活氣を呈して來た。龍馬は、かういふ同志を暴發組に走らせないで、一つの力に結びつけようとして努めてゐるのである。これは、風雲の外にあつて、しかも、別に風雲をつくつて、それに乘ぜんとする龍馬一流の行動のやうなものであつた。

誰が何といはうと坂本龍馬の存在は惑星のやうなもので、侮り難い勢力が次第に出來て來つゝある。龍馬が意識するしないにかゝはらず、それは必然のものであつた。

救ふ人・救はれる人

知足院内の佗住居に細々とくらしてゐるお龍たちのところへ、ひよつこり龍馬が訪ねて來た。

『あツ、坂本さんがいらつしやつた！』

お龍は、とびあがらんばかりに歡んだ。

底冷えのきつい夜である。火の乏しい炬燵にあたりながら、身世の果敢さを喞ち合つてゐた母と娘は、早くも、熱い涙に胸が一杯になつた。

『わたくしは、今日から坂本龍馬でなく、才谷梅太郎、――生れ變つて、どえらいことをおつ始めますぞ！　ハハハ……』

龍馬は、相變らずの調子でいつたが、昨年に變る見るに忍びぬ一家の窮乏の樣子に氣づくと、はツと胸を衝かれた。

『矢張、天誅ですか。』

お龍は、快活さをとり戻して、戯談をいつた。

『いや、わたくしは、刀をぬくことが嫌ひな人間でしてな。人間を殺すことは好まんですよ。楢

崎先生の弟子になつて、お醫者さんにでもなつてゐた方がよかつたかも知れません。ハハハ……』

龍馬は、いひながら未亡人の顏を見ると白髮がどつさりふえ、窶れきつて見るも痛ましい姿である。

訊いて見ると、楢崎將作が目をかけた弟子や、出入してゐた商人に心よからぬ者があつて、僅かの金子を融通したのを恩に着せたり、甘言をもつて誑かしたりして、今では、一層負債に惱まされてゐるばかりか、おとみと君江の姉妹は、養女にやるといふ口實で連れ出され、どうなつてゐるか分らぬやうな有樣だといふ。長男の太一郎は、やつと眞面目にはなつてゐるが悲觀ばかりして、さつぱり青年らしい元氣を喪つてゐるともいふ。

涙ながらに語る親子の話に、龍馬は持ち前の氣性から、これは一刻も早く何とか救濟してやらなければならぬとかたく決意して、

『それは、捨てゝはおけませんぞ。しかし、御安心なさい。わたくしが、是非何とかいたしませう。』

と、なみ〳〵ならぬ俠骨を示した。

龍馬の心に浮んだことは、早くかういふ生活から脫け出して、新たな生涯に入らせることであ

るが、それには、今のところ、勝先生に賴むとか、寺田屋のおとせに相談をもちかけて見るのがよからうといふことである。三條家の加尾子のことも、ちらと浮んだが、又、お龍にやきもちを燒かれては面白くないと、さし控えることにした。

『どうぞ、よろしいやうにお願ひします。』

お貞は、手を合はさんばかりである。

『わたくし、妹たちを連れ戻すことさへ出來ましたら、自分は、どんなことでもいたしますわ。ですから、太一郎の方を是非何とかしてやつて下さいな。』

お龍は、涙含んだ眼を瞬いた。

するうち、庫裡の方へ話しに行つてゐた太一郎が戻つて來た。龍馬と知つて挨拶をしたが、十八歳の少年といふのに、顏は蒼ざめ、生氣といふものが、ちつともないやうに感じられる。

『坊ちやん、どうです。わたしと一緒にどつかへ行つて見る氣になりませんか。』

龍馬は、笑ひながらいつた。

『えゝ……』

太一郎は、氣のりのしない返事である。

『近頃は何をしてゐます。』

『和尙さんのところへ遊びに行く位のものです。――お經でも習はうかと思つてゐます。』

『お經……？ それは、精神修養にいゝでせうが、しかし、妙なことをやる氣になりましたね。』

『弟もお寺へ行つてゐますし、僕も、こんなところにゐますから、自然と、そんな氣になるんです。』

『それは、いけないな。先づ、居を變へる必要がありますぞ。』

『僕、近頃『方丈記』を讀んでゐたら、この世の中が嫌になつたんです。』

太一郎は、だん〳〵蒼くなつて來た。

『この兒は、幾つも梟し首を見たり、生きながら曝し者にされてゐる人を見たりしてから、氣が變になつたらしいんですよ。』

お貞は、憂はしさうに顏をしかめた。

『大體、意氣地がなさ過ぎるのよ。』

お龍は、自烈度さうにつぶやいた。

『姉さんなんかに、僕の心が分るもんか。馬鹿！』

太一郎は、急に赫つとなり、唇を痙攣させながら、異様な聲で怒鳴りつけた。

『まア〳〵、姉弟喧嘩なんかお止しなさい。』

それまで默つて見てゐた龍馬は、押し宥めて、

『太一郎さんは、厭世的になつてゐられるらしい。しかし、それは、一つの病氣ですぜ。病氣といふやつは癒れば、けろりとしてしまふもんだから、氣にせんのがよろしいな。試みに、井戸傍へかけつけて、冷たい水を釣瓶に四五杯かぶつて御覽なさい。その位の病氣は、どつかへ、消しとんでしまひますよ。ハハハ……』

『本當ですわ。その位の勇氣があるといゝんですけれど。』

お龍は、哀しさうにいつた。

太一郎は、全身をがた〳〵顫はせながら、ぷいと立つて、どこかへ行きかけた。

『あんた、默つて、どこへ行くの？　失禮ぢやありませんか。』

お龍が慌てゝ、ひきとめようとした。

『釣瓶で四五杯水をかぶれといふから行くんぢやないか。その位のことは、いくら寒中でも僕はやつて見せるよ。』

太一郎は、怒張する顏面を、今度は、眞つ赤にほてらせてゐた。まるで、狂人のやうな形相なので、親子は魂消てしまつた。

龍馬は、どうしたのか、突如、手を拍つて、哄笑を爆發させながら、

『太一郎さん、もういゝ〳〵、それでいゝんだ。その意氣、その勇氣、その決心、——それだけで癒つてしまふんです。まア、お坐んなさい。よく、わたくしのいふことをきいてくれました。もう癒つた！　病氣は癒りましたぞ！』

と、まるで囃したてるやうに喋りつゞけ、

『わたし共は、兵庫の近くの神戸村に海軍操練所をつくることになつてゐるから、太一郎さんも一緒に行かう。こんなところで、まご〳〵してゐたつて仕方がない。蒸汽船に乘るんですよ。軍艦に乘つて、どかーんと大砲をぶつ放すんですよ。——どうです。壯快ぢやありませんか。今に異國の黑船なんか、追つ拂つてやるつもりです。』

と、唆りたてるやうにいつた。

思はずひきつけられた太一郎の顏は、不思議に晴れ〴〵しくなり、希望を得たやうな輝きが生れた。

それよりも、歡んだのはお龍である。そわ〳〵と燥いでおちつかず、

『坂本さん！　わたくしも蒸汽船に乘つて見たいですわ。』

と、とうとう羽目を外してしまつた。

『是非いらつしやい。乘せてあげますとも！』

龍馬は、さも得意さうに、にこ〳〵してゐる。

一座には、歡喜のさゞめきが、いつまでもつゞき、龍馬の巧みな說得力によつて、太一郎の病的になつた頭腦も、一轉瞬の間に、すつかり救はれたやうに見えた。

『さア、これで、太一郎さんのことはきまつたと！　さて、お次ぎは、お嬢さんたちの番ですかな。』

龍馬は、顎を撫で廻はしながら、やに下つたやうな表情をして見せた。

『人間なんていふものは、全くひよんな運命になるもんだよ。』

龍馬は、無聊げに、生欠伸を嚙み殺しながら、自分で自分の身の上を不審がるやうにつぶやいた。

こゝは、京都の土州藩屋敷の一室で、決して、座敷牢の何のといふやうなものではないが、今、龍馬は、殆んど形式だけの脫藩囚といつた恰好で、自由を奪はれてゐるのである。

しかし、その期間は、たつた七日間といふ嘘見たやうな命令に服してゐるのである。

『……貴公等が、わしを呼び戻してくれたおかげで、こんな窮屈な目に合つてゐるのぢやないか。ちとお察し願ひたいな。』

龍馬は、傍に端座してゐる望月清平に不平さうにいつた。

『坂本君は、全くわが儘ぢやのう。』

望月は、こゝに到るまで斡旋した人間だけに、顏をしかめて、

『しかし、そのわが儘が、どこまでも通して行けるのだから德人ぢやよ。』

と、淡ましげに首を傾げた。

龍馬が、僅か七日の形ばかりの禁錮で、天下晴れての歸參がかなふに到つたいきさつには、相當の理由があつた。その一つは、何といつても勝麟太郎の庇護である。

勝は、順動丸で江戸へかへる途中、伊豆の下田に船がゝりしてゐた上洛途中の容堂公に會つて

いろ〳〵語り合つた際、偶々、龍馬の噂になつて、頻りに推賞したので、土州にも、そんな逸材があつたのかと、容堂公も少からず興味をもち許してやる氣になつたのである。

ところが、龍馬の方でも、ある日千葉重太郎を伴ふて在京中の松平春嶽を訪ねると、『予は、容堂公とは仲好しだから、お前の歸藩をかなふやうに話してやらうか。脫藩の身では何彼と不便であらうから。』と、親切にいつてくれた。そこは、龍馬のことだから、『いつそのこと、左樣のことにお願ひいたしませうか。』と、當にもせずに酒ア〳〵といつて別れたのだが、その後入京の容堂公と春嶽侯との間に話があつて、同志の運動も效を奏して、龍馬は自分は何一つすゝわけでもなく、難なくすら〳〵と脫藩が帳消しになり、腕白兒が、お灸でも据えられるやうな意味で、『長々罷在り不心得の到り、屹度仰せつけられべきの處、御含みの筋有之御叱りの上別儀なく之を仰せつけらる』といふことになつて、七日の謹愼蟄居に定つたわけなのである。

しかし、仄かに聞けば、あくまで攘夷卽行の一條を盾にとつて犇めき合つてゐる武市一派の錚たる勤王黨に對する容堂公の態度は、だん〳〵硬化して、先づ、隨從の藩を士戒めて他藩士との交通を禁じ、剩へ武市黨には、いつ彈壓が下るか知れないといふ風說さへ立つたのである。

だから、かういふ際に、龍馬だけが別格扱ひをうけるといふことは、勝や、春嶽の盡力があつ

たとはいへ、ちよつと解き難い謎のやうなものが感じられるのは當然であつた。

望月が去ると、代り合つて千葉重太郎がどか〳〵と驅けこむやうにして這入つて來た。

『おゝ、坂本さん、無事でしたか。これで、やつと安堵いたした。』

重太郎は、よほど重い罪になつたやうに早合點し、早速春嶽侯に會ふつもりで越前屋敷に出かけ、留守居役の村田巳三郎に會つて嘆願をたのみ、その足でやつて來たところ容易に面會が許されたので、ほつとしたもの〻龍馬の顏を見るまでは不安でならなかつたと語り、

『今、あんたが働けなくなつたら、攝海防備その他は、どうなるんです。皇國刻下の大事ぢやありませんか。』

と、胸を撫で下ろした。

『しかし、たつた七日の辛棒です。どうか、安心して下さい。』

龍馬は、かういつて、いきさつを要領よく話してきかせた。

重太郎も、自分の取り越し苦勞がをかしくなりから〳〵と笑ひ出したが、常に水の流るゝ如く風の吹き去るが如く、自由奔放に行動してゐる龍馬にとつては、たとへ、七日間でも五十日百日の感がするであらうと察した。

そこへ、千葉重太郎の面會をとりなした大石彌太郎が樣子を見よう爲か、伺ふやうにして靜かに這入つて來た。大石は病氣が癒えて一旦歸藩したが藩主豐範公に扈從して入洛し妙心寺に宿營してゐるのだつたが、偶々藩屋敷へ來合はせてゐて、血相變へて乘り込んで來た重太郎にぶつゝかつたのであつた。

『坂本君！　もう後三日ぢやのう。』

大石は、突つ立つたまゝで、指を三本出して見せながらいつた。

『うん、ありがたいわけです。』

龍馬は、大石を坐らせて、ぴよこりと一つお辭儀をして見せた。

『先刻は、大變御無禮をいたし恐縮でした。』

重太郎が、きまり惡るさうにいつた。

『大石君よ、今度のこの恩典はな、容堂公には、わしを公武一和、佐幕開國派と御覽じた爲ぢやないかな。さうだとすると、不服なんぢやがのう。』

龍馬は、まるで他人のことをいふやうな調子である。

『贅澤いふちやいかん。老公は、晴天白日の身となつて、わが土州藩の爲に盡くせよとのお思召ぢやないか。おい、しつかりたのむぜ。』

大石は、熱をこめていつた。

重太郎は、腕組みをして、むづかしい顏をしてゐる。

『わしは、あくまで海軍建設の爲に働くよ。國の同志にも働きかけるつもりぢやが、老公の思召にかなふか、どうか分らんぞ。わしの目的の爲に、有志を他日役立つやうに養成しておくつもりぢやがのう。蝦夷地開拓なんかにも努力して北邊の備へもやりたいと考へてゐるんぢや。だから、國うちのことは、貴公等によろしくお賴ん申します。』

例によつての龍馬の大風呂敷に大石は、

『どうなと勝手にするがいゝや。どうせ、おんしは、武市瑞山が、あだたぬ（方言）奴ぢやで、かまはんとおけと匙を投げた程の人間ぢやからのう。』

と、外つ方を向いてしまつた。

『大石さん、坂本さんは、御藩の爲にも屹度何かなさるから御安心なさい。』

重太郎は、心配になつたらしく二人の間を融和するやうにいつた。

『むろん、わたしは、坂本君を信賴しては居りますが、御承知の通りわれ〳〵の同志もいきり立

つてゐる際ですから、折角の今度の御赦免が無駄になつては殘念だといふわたしの老婆心から一言注意したまでのことなんです。他意はございません。』

大石は、かう釋明した。

『左樣ですか。それで一と安心です。』

重太郎は、厚く禮を述べ、

『それでは、坂本さん、どうぞ自重してやつて下さい。わたくしは、これから因州屋敷へ所用があつて出かけますから……』

『さうですか。いろ〳〵どうもあり難う。』

龍馬は、謝辭を述べ、

『大石君、すまんが、ちよつとお見送りをたのむ。』

『よし！』

大石は、重太郎が辭退するのを推して見送りに起つた。

龍馬は、兩人の後ろ姿に向つて殊勝らしく頭を下げてゐた。

第五章

夷人とあらそふ事もよしやたゞ
こゝろにかゝる土佐の波風
—佐々木高行—

大坂から兵庫へ

伏見寺田屋の女將おとせにお龍のことをたのみ、大阪城内に將軍を蒸汽船で送つて來て滯在してゐる勝に會つては、太一郎のことを相談し、いづれも首尾よく行つたので、重荷を下ろした氣持になつた龍馬は、それ以來、ずつと大阪にゐて劃策し奔走してゐるのであつた。

宿の一室で、暇を見つけた龍馬は筆まめに國の姉に送る手紙を認めてゐた。丁度、兄の權平が大阪の土州屋敷に來てゐて乙女の傳言が傳へられたからでもあつた。

『この頃は天下無二の軍學者勝麟太郎といふ大先生の門人になり……近きうちには大阪より十里あまりの地にて兵庫といふ所にておゝきに海軍をこしらへ、又四十間五十間もある船をこし

らへ、弟子共にも四五百人も諸方より集り候事…稽古所の蒸汽船をもつて近々土佐の方へも乘り申候…すこしエヘン顔をしてひそかにおり申候、達人の見るまなこおそろしきものとや、つれ〴〵にこれあり猶エヘン〳〵かしこ』

すら〳〵と書き流して、卷き納めると、龍馬は、これを見る時の姉の顔を思ひゑがいて、北叟笑みした。

『おい、高松よ、おんしのこともちよつぴり書いておいたぞ。太郎なども今は大阪の勝塾にて學問いたし居り候つてな。うちの精次郎の奴が見たら、うづ〳〵して飛び出したくなるだらうな。ハハハ…』

と、一隅に二三人ゐて將棋をさしてゐる仲間に甥の高松太郎がゐると思つて話しかけたのである。

だが、返事がないので、

『なア、太郎、あいつも呼び寄せてやるか。乙女姉もやつて來るがいゝや。來たら、仁王樣は、さしづめ女艦長にでもせんと御機嫌が悪いかも知れんな。』

と、封をして、宛名を認めながらいつた。

矢張、返事がないので、ふりかへつて見ると誰もゐなくなつてゐて、のつぽの伊達小次郎が這入つて來たところであつた。

『…君か、高松がゐると思つてゐたら。』

『高松君は、出て行きましたよ。』

『さうか、何か用事か。』

『勝先生が京都で、もう少しのことで御危難に會はれるところだつたさうですよ。』

『えッ、危難だつて？　まさか…』

龍馬は、見るから利かん氣らしい、精悍で、俊敏さうな伊達の細長い顔を見つめ、如何にも駄駄つ兒らしい眼の動きを讀むやうにいつた。

『いえ、本當です。澤村君が例の兜宗助、乾十郎一件の御禮に大阪城へ訪ねてきいて來た話ですから…』

伊達は、二十一歳の青年で、痩せてひよろ高いが、一と筋鋼の棒でも背筋にうちこまれてゐるやうな感じで、いふこともてきぱきしてゐる。

『一體、ど、どういふことなんだ。事によつたら、わしはお見舞に行かねばならんぞ。』

龍馬にとつては、大切な親分のことだから氣が氣ぢやない。

伊達のきいた話は、勝麟太郎が、家茂將軍入浴の際に、寺町通りをぶら〳〵歩いてゐると三人の狼藉者が忽然として現はれ隙を伺ふや躍りかゝつて襲撃しようとした。正に間一髪であつた。かねて、龍馬の賴みによつて護衛に從つてゐた、あの土州の刺客として有名な岡田以藏はそれと知るとぬく手も見せずその中の一人を眞つ二つに斬り下げたので、後の二人は雲を霞と退散してしまつたとかで、その早業には、さすがの勝も舌を捲いて驚嘆したといふ。

『岡田以藏つて、そんな手練の猛者なんですか。』

伊達も、驚いてゐる。

『さうか、まアよかつた。以藏にいひつけておいたのはこのわしぢやが、あれで矢張役に立つこともあるわけだな。何に、人を斬る爲に生れて來たやうな男でな。外には用ゐどころのない人間だらう。丁度君が口から先へ生れたやうな男で劍は駄目でも舌の方がよく使へるやうなもんだよ。』

『坂本先生！　ひどいことをいひますね。ぢや、先生は何から先にお生れになつたのですか。』

『そいつは、どうもわしにも分らんな。死んだおふくろに訊いて見んことには……。ハハハ…』

日頃から、伊達の多辯と憍慢とを戒めてゐる龍馬は、かういつて笑つた。

伊達は、返す言葉もなく苦笑に紛らしてしまつた。

伊達小次郎は、紀州藩の大立物だつた伊達宗廣の息子である。宗廣はなか〳〵の傑物で藩の財政を改革したり、殖產を興したりして飛ぶ鳥をも落すばかりの勢ひだつたが、藩の重役間の政爭と軋轢との犧牲となり、閉門となり改易となり、ひどい零落に陷つたが、小次郎はその間に少年時代を送つたのである。宗廣は、國學にも秀で、勤王の志深く、後には一家をあげて脫藩し京都へ逃れたのであつた。小次郎には兄に當る養子の五郎も相當の人物で、この春、勝が姉小路公知卿を順動丸に乘せて紀淡海岸を巡見した時も、その五郎から小次郎のことを賴まれたのであつた。龍馬も、宗廣と親しくして賴まれてゐた關係から、小次郎の用ゆべきを知り、勝にも推薦し同志の一員に加へたのであつた。この早熟の俊髦こそ、後年の陸奥宗光なので、龍馬とは、きつてもきれぬ因緣が出來たわけなのである。

『兎に角、今度から面倒な奴が出て來たら、岡田以藏に萬事一任することですな。兜宗助が、意趣返しをしようと先生をねらつてゐるといふぢやありませんか。』

伊達は、鋭鋒を避けるやうに、話頭を轉じた。